

文末の「のだ」の意味に関する認知言語学的・語用論的研究：文末の「ものだ」との対照を中心に

范, 碧琳

<https://doi.org/10.15017/1654599>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

文末の「のだ」の意味に関する認知言語学的・語用論的研究

—文末の「ものだ」との対照を中心に—

九州大学大学院比較社会文化学府

范碧琳

要 旨

20世紀初頭より「のだ」についての研究が数多く行われている。しかし、認知言語学の視点からの研究は、管見の限りほとんど行われていないようである。また、「のだ」と類似した組成を持つ「ものだ」に関して、日本語学の立場からの研究は盛んに行われてきたが、認知言語学の立場からの研究は見当たらない。さらに、「のだ」「ものだ」と中国語の対照研究は未だ数少ないのが現状である。そこで本研究は、認知意味論と語用論の視点から「のだ」「ものだ」の意味論的意味と語用論的意味を考察し、意味拡張のプロセスを明らかにすることで、日本語学習者にとって理解しやすい記述を行うことを目的とする。

本論文では、まず『CD-ROM版新潮文庫の100冊』から用例を収集し、認知意味論・語用論の視点から「のだ」「ものだ」の意味と用法を分析することで、それぞれの意味ネットワーク、機能及び両者に共通する用法の相違点を明らかにした。次に、『中日対訳コーパス』から「のだ」「ものだ」に対応する中国語の用例を収集し、その対応にはどのような傾向があるのかを明らかにした。最後に、中国の日本語教育現場で使用されている日本語教科書の問題点を指摘し、「のだ」「ものだ」を教授する時に注意すべきポイント、教授法への提案をまとめた。

本論文は7章から構成される。詳細は以下の通りである。

第1章～第3章では本研究の目的、先行研究、データ、理論的枠組みと研究方法について詳述した。

第4章では、認知意味論と語用論の視点から「のだ」の意味・機能について分析した。まず、「のだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学的アプローチによって、「のだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、各意味間の拡張プロセスを考察した上で、「のだ」の多義構造を明らかにした。次に、「のだ」が「命令」「決意」と解釈される語用論的条件を解明し、さらに「強調」「告白」「教示」などの語用論的意味、機能についても考察した。その結果、「のだ」の「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」(拡張義3)という意味論的な意味が、語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的な意味が生じてくることが判明した。さらに、「のだ」が終助詞「よ」と共起する際の機能について分析し、「のだ」+「よ」は聞き手向けの機能をさらに強化する効果、話し手の認識、判断を聞き手に明確に提示する機能と命令の気持ちを和らげる機能をもっていることを明らかにした。

第5章では、認知意味論と語用論の視点から「ものだ」の意味を分析した。まず、「ものだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学の理論的枠組みに基づき、「も

のだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、「ものだ」の複数の意味の拡張ネットワークを示した。また、「解説」の「ものだ」はプロトタイプの意味とその拡張義から派生されたものではなく、「～たものだ」の形をとっている名詞述語文の「ものだ」から構文的に派生されたものであることが確認された。さらに、「ものだ」の「当為」「教示」「詠嘆」の語用論的意味について考察し、「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味が語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的意味が生じてくることが判明した。最後に、「のだ」と「ものだ」の類似する意味・用法について考察し、その共通点と相違点を明らかにした。

第6章では、「のだ」「ものだ」に対応している中国語について詳しく考察し、教授法の改善を提案した。まずは、「のだ」に対応する中国語の傾向、およびその表す語気を分析した。「のだ」に対応する中国語は無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「命令・願望語気」、「意志・願望語気」、「必要語気」などを表す形式、または語気副詞、語気助詞とその他の形式(接続詞、副詞)であることが分かった。次に、「ものだ」に対応する中国語の傾向、およびその表す語気を分析し、同じく無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「意外語気」、「詠嘆語気」、「必要語気」などを表す形式であることが判明した。さらに、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」の提示の仕方とその問題点を明らかにした。その上で、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時に注意するポイント、教授法への提案をまとめた。

終章である第7章では、本論文の内容のまとめ、意義、今後の課題について述べた。

本論文では、認知言語学的アプローチと語用論の視点から、「のだ」と「ものだ」の意味拡張ネットワーク、機能を明らかにした。また、その結果に基づき、両者と中国語語気体系の対応の傾向を示した。本論文が「のだ」「ものだ」の研究に新しい方法論の可能性を提供することができたということは大きな意義をもつ。さらに、「のだ」「ものだ」の効果的な教授法の開発に繋がると期待できる。

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の動機.....	1
1.2 研究の目的.....	1
1.3 論文の構成.....	2
第2章 先行研究の概観と本研究の位置づけ	5
2.1 「のだ」に関する先行研究.....	5
2.1.1 「のだ」の品詞について.....	5
2.1.2 文法の観点からの先行研究.....	7
2.1.2.1 基本的な意味・機能を求める諸説.....	7
2.1.2.2 多機能説.....	17
2.1.3 語用論の立場からの先行研究.....	20
2.1.3.1 関連性理論を用いた先行研究.....	20
2.1.3.2 談話分析の観点からの先行研究.....	22
2.1.4 日本語教育の立場からの先行研究.....	22
2.1.5 認知言語学の立場からの先行研究.....	24
2.1.6 先行研究の問題点と本研究の立場.....	26
2.2 「ものだ」に関する先行研究.....	28
2.2.1 「もの」に関する先行研究.....	28
2.2.1.1 日本語学の立場からの先行研究.....	28
2.2.1.2 認知言語学の立場からの先行研究.....	29
2.2.2 「ものだ」に関する先行研究.....	30
2.2.2.1 文法の観点からの先行研究.....	30
2.2.2.2 認知言語学の立場からの先行研究.....	33
2.2.2.3 語用論の立場からの先行研究.....	34
2.2.3 「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究.....	37
2.2.4 先行研究の問題点と本研究の立場.....	38
2.3 「のだ」「ものだ」と中国語の対照研究.....	39
2.3.1 「のだ」と中国語の対照研究.....	39
2.3.2 「ものだ」と中国語の対照研究.....	42
2.4 本研究の立場.....	42

2.5	まとめ	44
第3章	理論的枠組みとデータ	45
3.1	理論的枠組みおよび基本的な用語・概念	45
3.1.1	プロトタイプの意味の認定	45
3.1.2	周辺の意味の認定と意味拡張	47
3.1.3	複数の意味の統括モデル	50
3.2	研究データ	52
3.2.1	データの内容	52
3.2.2	データの検索・選定方法	52
3.2.3	データの分類・分析方法	53
3.3	まとめ	53
第4章	「のだ」の意味の認知言語学的・語用論的考察	55
4.1	文末の「のだ」の多義構造	55
4.1.1	文末の「のだ」の文と名詞述語文との関係	55
4.1.2	国語辞典の「のだ」についての記述	57
4.1.3	文末の「のだ」のプロトタイプの意味	60
4.1.4	拡張義1	63
4.1.5	拡張義2	67
4.1.6	拡張義3	70
4.1.7	拡張義4	74
4.1.8	拡張義5	77
4.1.9	文末の「のだ」の多義構造	80
4.2	文末の「のだ」の語用論的意味	82
4.2.1	「命令」と「決意」	82
4.2.2	そのほかの語用論的意味	85
4.3	文末の「のだ」と終助詞「よ」との共起	88
4.3.1	「よ」に関する先行研究	88
4.3.2	「のだ」と「よ」が共起する際の機能	89
4.4	まとめ	95
第5章	「ものだ」の意味の認知言語学的・語用論的考察	97
5.1	文末の「ものだ」の多義構造	97
5.1.1	文末の「ものだ」の文と名詞述語文との関係	97

5.1.2	国語辞典の「ものだ」についての記述	99
5.1.3	文末の「ものだ」のプロトタイプの意味	101
5.1.4	拡張義1	104
5.1.5	拡張義2	105
5.1.6	拡張義3	107
5.1.7	「解説」の「ものだ」	110
5.1.8	文末の「ものだ」の多義構造	113
5.2	文末の「ものだ」の語用論的意味	114
5.2.1	「当為」	114
5.2.1.1	「ものだ」の「当為」の意味に関する先行研究	114
5.2.1.2	「当為」と解釈される語用論的条件	115
5.2.2	「教示」	118
5.2.3	「詠嘆」	119
5.3	「のだ」と「ものだ」の対照	120
5.3.1	「のだ」と「ものだ」の相違について	120
5.3.2	「のだ」と「ものだ」の類似する意味用法について	122
5.3.2.1	「説明」と「解説」	122
5.3.2.2	「命令」と「当為」	124
5.4	まとめ	125

第6章 「のだ」「ものだ」に対応する中国語 127

6.1	「のだ」に対応する中国語	127
6.1.1	「のだ」に対応する中国語翻訳の傾向	128
6.1.1.1	「のだ」と「是……的」の対応	128
6.1.1.2	「のだ」と「是……」の対応	133
6.1.1.3	「のだ」と語気助詞の対応	134
6.1.1.4	「のだ」と助動詞の対応	136
6.1.1.5	「のだ」とその他の中国語の対応	137
6.1.2	「のだ」に対応する中国語が表している語気	138
6.2	「ものだ」に対応する中国語	139
6.2.1	「ものだ」に対応する中国語翻訳の傾向	139
6.2.1.1	「ものだ」と「是……的」の対応	142
6.2.1.2	拡張義3に対応する中国語	144
6.2.1.3	「ものだ」と助動詞の対応	147
6.2.1.4	「ものだ」と語気助詞の対応	148

6.2.2 「ものだ」に対応する中国語が表している語気	150
6.3 教科書に関わる問題	150
6.3.1 中国の日本語教科書における「のだ」「ものだ」の提示の仕方	151
6.3.1.1 中国の日本語教科書における「のだ」の提示方法	151
6.3.1.1 中国の日本語教科書における「ものだ」の提示方法	155
6.3.2 教科書の問題点	156
6.4 「のだ」「ものだ」の教授法への提案	157
6.4.1 「のだ」の教授法への提案	157
6.4.2 「ものだ」の教授法への提案	159
6.5 まとめ	161
第7章 結論.....	163
7.1 本論文の要約	163
7.2 本論文の意義	165
7.3 今後の課題	165
参考文献.....	167
付録1「のだ」「ものだ」の用例集.....	175
付録2「のだ」「ものだ」に対応する中国語の用例集.....	190

第1章 序論

1.1 研究の動機

「のだ」は現代日本語において頻繁に用いられる文末表現形式である。「のだ」は「～んだ」「～んです」「～のだ」「～のです」などの形で日常会話に使われているだけでなく、文章の中にもよく用いられる。多様な現れを呈する形式によって、「のだ」は様々な意味、用法、機能を持っている。筆者は11年前に日本へ留学で来た時、周りの日本人が「のだ」を頻繁に使用していることに驚いた。当時、中国の日本語教科書では、「のだ」はまった一つの文法項目として扱われておらず、大学や日本語教師の中にもその重要性があまり認識されていなかったと思われる状況がある。筆者は日本人の「のだ」の使用状況に留意し、中国の日本語教科書で扱われていない使い方が大変気になり、日本語学習者の「のだ」の使用状況に関心を持つようになった。中国の日本語学習者にとっては、中国語には意味的に「のだ」と類似する「是……的」があるが、両者は対応しない場合もあるので、「のだ」はかねてより習得の難しい項目となっている。そのため、中国の学習者は「のだ」を使うべき場合に使わなかったり、使うべきでない場合に使いすぎて奇妙な日本語にしてしまったりすることが非常に多い。また、日本語教育現場において、外国人学習者に「のだ」をどのように説明したらより効果的な指導ができるかは難しい問題となっている。

「のだ」を研究しているうちに、「のだ」と似た組成を持つ「ものだ」の使用状況にも注意が向き始めた。「ものだ」は「～ものだ」「～ものです」「～もんだ」「～ものである」などの形で現われ、「本性・本質・一般性」「解説・説明」「回想」「感慨・驚き」「当為」など様々な意味と用法を持っている。しかし、「ものだ」も中国の日本語教育現場であまり重要視されていないように感じる。中国語には「ものだ」に対応する表現形式がないため、中国の日本語学習者にとって、「ものだ」の様々な意味と用法を理解するのも非常に難しい。

そこで、日本語学習者にとってわかりやすい「のだ」「ものだ」の記述はできないかという意識が本論文を執筆する動機となった。

1.2 研究の目的

現代日本語学では、「のだ」「ものだ」の様々な意味と用法を網羅的に記述している先

行研究は数多くあるが、未だに統一的な説明ができておらず、中には「のだ」「ものだ」の意味論的意味と語用論的意味を区別せずに記述しているものもある。これが学習者の習得に大きな影響をもたらしている。本研究は意味論的意味と語用論的意味を以下のように定義する¹。

意味論的意味の定義：特定の場面や話し手、聞き手から抽象化されて、純粹に問題となる言語における表現の有する特性として規定される意味。

語用論的意味の定義：コンテキストや発話場面を考慮し、言語の話し手、ないし言語の使用者との関連で規定される意味。

日本語教育の立場からみると、多義語の意味を教えるにあたり、意味と意味の間がどのように結ばれているかを学習者に理解させることができれば、全体の意味ネットワークの理解と意味習得に役に立つのではないかと考える。本論文は、多様な言語現象の本質を人間の一般的な認知との関わりから解明する認知言語学を援用する。「のだ」「ものだ」の意味論的意味を語用論的意味と区別し、その基本的な意味論的意味を認知意味論の基本理論に基づいて考察し、意味と意味の間がどのように結ばれているか、どのようなネットワークを構成しているかを解明したい。また、「のだ」「ものだ」の語用論的意味にはどのようなものがあるかを明らかにし、文脈と発話状況に結びつけて説明したいと考える。その上で、「のだ」と「ものだ」の全体像を究明し、中国の日本語学習者にとって理解しやすい記述を行い、中国の日本語学習者の「のだ」「ものだ」への理解を深めることに役立たせたい。さらに、「のだ」「ものだ」は中国語ではどのような表現形式に対応しているのか、その対応はどのような傾向性を呈しているのかを調査分析することで、日本語の「のだ」「ものだ」と中国語の対応関係を解明していきたい。その上で、「のだ」「ものだ」に対応する中国語が表している語気²と「のだ」「ものだ」が表しているモダリティとの類似点、相違点についても明らかにしたい。

1.3 論文の構成

各章の内容は以下の通りである。

第2章では、先行研究の概観を行い、本論文の位置づけについて述べる。まず、「のだ」に関する先行研究を「のだ」の品詞についての先行研究、文法の観点、語用論の立場、日本語教育の立場、認知言語学の立場からの先行研究に分け、それぞれの内容をまとめ、

¹ 意味論・語用論の定義づけについてはリーチ(1983, 池上・河上訳 (1987:8))を参照した。

² 賀(1993:157)は「語気(modality)は文法の形式によって命題に対する話し手の主観を表すもの」と述べている。

問題点を指摘する。次に、「ものだ」に関する先行研究を「もの」に関する先行研究、「ものだ」に関する先行研究、「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究の三つに分け、文法、認知言語学、語用論の観点からのそれぞれの先行研究を整理する。さらに、「のだ」「ものだ」と中国語の対照研究の概観を行う。最後に、それぞれの先行研究の問題点をまとめた上で、本論文の位置づけを行う。

第3章では、本論文において使用する理論的枠組み、研究方法および研究データについて説明する。まず、本論文で用いる理論的枠組み、プロトタイプの意味、周辺の意味の認定方法、意味拡張のプロセスと定義、複数の意味を統括するモデルについて記述する。次に、本論文で使用した研究データの内容、収集方法、分類・分析方法について述べる。

第4章では、認知意味論と語用論の視点から「のだ」の意味・機能について分析する。まず、「のだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、「のだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、各意味間の拡張プロセスを考察した上で、「のだ」が有する複数の意味の拡張ネットワークの構造を明らかにする。次に、「のだ」が「命令」「決意」と解釈される語用論的な条件を解明し、「強調」「告白」「教示」などの語用論的意味、機能についても考察する。さらに、「のだ」が終助詞「よ」と共起する際の機能について分析する。

第5章は、認知意味論と語用論の視点から「ものだ」の意味を分析する。まず、「ものだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学の理論的枠組みに基づき、「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、「ものだ」の複数の意味の拡張ネットワークを示す。次に、「ものだ」が「当為」と解釈される語用論的な条件を解明し、「教示」「詠嘆」などの語用論的意味についても考察する。さらに、「のだ」と「ものだ」の類似する意味、用法について考察し、その共通点と相違点を明らかにする。

第6章では、「のだ」と「ものだ」に対応する中国語について考察し、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時の注意点をまとめる。まず、「のだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を分析する。次に、「ものだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気について詳述する。さらに、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」がそれぞれどのように扱われているかを考察する。その上で、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時の注意点をまとめ、中国の日本語教育現場の問題点を解決するための対策を考える。

第7章では、本論文の内容のまとめ、意義、今後の課題について述べる。

第2章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

20世紀中葉より「のだ」についての研究は数多く行われ、研究成果もかなり蓄積されている。しかし、認知言語学の視点からの研究は、管見の限りほとんど行われていない。また、「のだ」と類似した組成を持つ「ものだ」に関しても、日本語学の立場からの研究は盛んに行われてきたが、認知言語学の立場からの研究は未だ数少ないのが現状である。さらに、「のだ」と中国語の「是……的」との対照研究が行われたが、「のだ」に対応する他の中国語形式について言及しているものは少ない。「ものだ」とそれに対応する中国語との対照研究は見当たらない。

本章では、「のだ」「ものだ」に関する先行研究を概観する。まず2.1では、「のだ」に関する先行研究を概観する。「のだ」の品詞についての先行研究、文法の観点、語用論の立場、日本語教育の立場、認知言語学の立場からの先行研究に分け、それぞれの内容をまとめ、問題点を指摘する。2.2では、「ものだ」に関する先行研究を「もの」に関する先行研究、「ものだ」に関する先行研究、「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究の三つに分け、文法、認知言語学、語用論の観点からのそれぞれの先行研究を整理する。2.3では、「のだ」「ものだ」とそれに対応する中国語の対照研究の概観を行う。2.4では、それぞれの先行研究の問題点をまとめた上で、本論文の位置づけについて述べる。2.5は本章のまとめである。なお、第4章～第7章での議論と直接に関係する先行研究は、各章で必要に応じて言及する。

2.1 「のだ」に関する先行研究

「のだ」は20世紀初頭より口語文法において言及されはじめ、20世紀の半ば頃から次第に注目され、様々な研究が盛んに行われてきた。大別すれば、文法の観点、語用論の立場、日本語教育の立場、認知言語学の立場からの先行研究がある。本節では、「のだ」の品詞に関する論考も含めて、文法の観点、語用論の立場、日本語教育の立場、認知言語学の立場からの先行研究を概観する。

2.1.1 「のだ」の品詞について

「のだ」は、いまや「のだ」で一つの助動詞になっている。その組成からみると、「のだ」はもともと体言化の機能をもつ準体助詞の「の」が助動詞の「だ」と結びついて一

語化したものである。まず、「の」の品詞について、松下(1928)は「の」を「形式名詞」に分類したが、橋本(1948:72)は「の」を「準体助詞」として、「他の語に附いて或意味を加へて、全体として体言と同じ職能をもったものを作る」ものを準体助詞と定義した。

三上(1953:27-28)は、「のだ」は「組成は「ノ+ダ」に違いないが、これはこれで別語としなければならない」と指摘している。それは「のだ」が名詞としての資格のうち重要な一つ「修飾語句中にある主格の格助詞「ガ」を「ノ」に変えることができる」性質、つまり「ガノ可変」という性質を失っているからであると述べている。

- (1) 雨ガ降ル+晩→雨ノ降ル晩
- (2) 扁理ガ到着シタノヲ知ッテキルカ
- (3) 扁理ガ到着シタノデス

三上(1953:27-28)

三上(1953)によると、例(2)は「扁理ノ」と変えられるが、例(3)は「扁理ノ」と改めることはできない。例(3)の「ノ」は完全に名詞くずれしているため、「のだ」を一個の準用言と見なさなくてはならない³としている。

佐治(1969:191-192)は「私が辞書を買ってきたのを誰に聞いたのですか」のような「具体的な意味のない、形だけの体言として、前の文を受けとめる働き」をする「の」を「準体助詞」の名前が一番ぴったりするものとし、「狭義準体助詞」と呼んでいる。橋本は「準体助詞」の「の」を以下のように三つに分けている。

橋本の 準体助詞「の」	}	格助詞(下の体言の省略)…私のは机の上にあります。
		準代名助詞……………私が買ったのは辞書です。
		狭義の準体助詞……………私が辞書を買ったのを知っていますか。

佐治(1969:192)

また、佐治(1972:201)は、狭義の準体助詞「の」が「だ」に結びつくと、「ガノ可変」でなくなってしまうことを指摘し、「のだ」の組成は狭義の準体助詞「の」+「だ」であるとしている。

野田(1997:13)は「のだ」を一語化した助動詞だと考え、「[名詞化の機能をもつ「の」+「だ」]という組成のままに近い、プリミティブな性質をもつ「のだ」(スコープの「のだ」と、一語化して変質し、「説明」と言われるようなムードを担う「のだ」(ムードの「のだ」)がある」と主張している。

³ 三上(1953:235)を参照。

本論文は「のだ」を体言化の機能をもつ準体助詞の「の」が助動詞の「だ」と結びついて一語化した助動詞⁴だと考える。研究の対象は、最も基本的である肯定平叙文文末の「のだ」のみとする。「のだ」の否定形(「のではない」など)、疑問形(「のか」など)、過去形(「のだった」など)、また「の」、「のだから」、「のなら」などについては考察の対象としない。肯定平叙文文末の「のだ」という基本的な形式についてより詳細な記述を行い、これをベースにして将来他の形式への広がり、網羅的な記述を今後の目標としたい。

2.1.2 文法の観点からの先行研究

これまでの「のだ」に関する先行研究の多くは文法的な研究である。その数が膨大であるため、本論文はその中の代表的なものを取り上げ、基本的な機能を求める諸説、多機能説の二つに分けて概観する。

2.1.2.1 基本的な意味・機能を求める諸説

「のだ」の多種多様な意味、用法、機能を統一的に説明するため、その基本的な意味・機能を追究する研究が多く見られる。基本的な意味・機能を求める諸説を説明説、既定命題説とその他の基本的な意味・機能を求める説に分けて概観する。

2.1.2.1.1 説明説

説明説は「のだ」の先行研究の中でもっとも広く支持を得ている説である。数多くの研究者は「のだ」の文が「説明」を表すとしている。代表的なものは Alfonso(1966)、久野(1973)、山口(1975)、田中(1980)、寺村(1984)、奥田(1990)、益岡(1991)(2007)などである。

Alfonso(1966)

Alfonso(1966:405)は「のだ」に関して次のように記述している。

However, the presence of NO DESU adds certain overtones to the statement, for

⁴ 本論文では、寺村(1984)、野田(1997)に従い、「のだ」は準体助詞の「の」に「だ」が後接し、それが一語化した助動詞とする。

it indicates some EXPLANATION, either of what was said or done, or will be said or done, and as such always suggests some context or situation.

「ノ德斯」は、先に言われたこと、為されたこと、あるいはこれから言われようとする、為されようとするに対する説明(explanation)を表わす。それがために、「ノ德斯」には必ず、特殊なコンテキストまたはシチュエーションが必要である⁵。

また、以下の四つの例を挙げて「のだ」の無い文、ある文を比較している。

(4) 話があります。

ちょっと待ってください。話があるんです。

(「話があるんです」は、何故話し手が相手に待つように頼んでいるかの説明である)

(5) 勤めるところがないです。

「太田さんは勤めていませんね。」「勤めるところがないんです。」

(太田は、何故勤めていないかを説明している)

(6) 面白いですか、その本は？

面白いんですか？

(熱中して読んでいる人、あるいはにやにや笑いながら読んでいる人に質問するのに用いる。)

(7) あれはどうしましたか？

どうしたんですか？

(第一の文は、単に事実に関する質問である。第二の文では、話し手は、相手の心配そうな顔、気分の悪そうな様子、あるいはことのほか急いでいる様子などについての説明を求めている。相手が気分が悪そうな場合には、彼は「頭ガ痛インデス」と答えるかもしれない⁶。)

⁵ 訳文は久野(1973:143)による。

⁶ ()内の訳文は久野(1973:143)による。

久野(1973)

久野(1973:148-149)は、Alfonso(1966)の分析を受け継いで、「「ノ德斯」は、話し手が先に言ったこと、したこと、あるいは、話し手の状態(元気がないとか、外出の身仕度をしているとか)に対する話し手の説明を与える。話し手がこれから述べようとすることに対する説明を与えるという用法(本節初頭引用のAlfonsoの記述参照)はない」とまとめている。また、「「ノデスカ」は、話し手が見、聞いたことに対する聞き手の説明を求める」と述べている。以下のような例が挙げられている。

(8) 昨日休ンデシマイマシタ。気分ガ悪カッタノ德斯。

「昨日休んでしまったことの説明は、気分が悪かったことです。」

(9) 顔色ガ悪イデスネ。病気ナノデスカ？

「あなたが顔色が悪いことの説明は、病気であることですか」

久野(1973:144)

さらに、「のだ」と「からだ」の違いについて、「「ノ德斯」は、説明を、「カラデス」は原因・理由を表す(原因・理由でない説明もある)」と述べ、「「ノ德斯」が説明せんとする事象は、先行文として言語化されてなくてもよい」としているのに対して、「「カラデス」が説明せんとする事象は、文として言語化されたものでなければならず、しかも、その文はそのままのかたちで、「S₁ノハ…カラデス」のS₁として用い得るものでなければならない」と言う。その上で、「「ノ德斯」の後に依頼文・命令文が来ると、しばしば、非難の意味合いを含んだ文となる」、「話し手が直接的に現在のシチュエーションを観察したような場合には、その観察に対する質問は、「ノデスカ」形で行わなければならない」と述べている。

山口(1975)

山口(1975:16-17)は、「のだ」について構文論的に分析し、「…のは…のだ」という形を「のだ」の文の基本形と考えている。「のだ」の文は、あるいはその文だけで、あるいは先行文と協同して、××トイウコトハ○○トイウコトダという内容を表す文であるという点で共通しているといつてよさそうである」と述べている。また、「のだ」の意味について、「指摘された「説明・理由・強調」その他の意味合いは、「××トイウコトハ○○トイウコトダ」という「のだ」の文の本来の意味に還元して考えることによって、初めて統一的な説明が可能になると思われる」と指摘している。

田中(1980)

田中(1980:52-63)は、山口(1975)を批判し、以下の例(4)'と例(5)'は「「××トイウコトハ、〇〇トイウコトダ」にはおさまりきらない関係を含んでいる」と指摘している。

- (10) 彼女は美人だ。彼女はコンテストで一位になったのだ。
- (11) 彼は諦めた。もう抵抗しなかったのだ。
- (10)' 彼女は美人だトイウコトハ、彼女はコンテストで一位になったトイウコトダ。
- (11)' 彼は諦めたトイウコトハ、もう抵抗しなかったトイウコトダ。

田中(1980:52)

その上で、「「のだ」の文は、その文を単独に検討しても意味がない。必ず、前提とされる文、あるいは状況との関係で分析していかなければならない」と述べ、「「のだ」を含む文を「説明項」その文によって前提される文あるいは状況を「被説明項」と呼び、「説明」の「のだ」を説明項と被説明項との関係という面から分析し、次のように分類している。

ア 被説明項が状況であるもの。

アー1 被説明項が話し手の行為であるもの。

<例：(ドアを開きながら)お前はもう帰るのだ。(田中 1980:54)>

アー2 被説明項が話し手の関与しない状況であるもの。

<例：(こわれたコップを見て)だれがこわしたんですか。(田中 1980:55)>

イ 被説明項が言語表現であるもの。

イー1 被説明項の言語表現が命令あるいは依頼などを表すもの。

<例：お金をください。本が買いたいです。(田中 1980:55)>

イー2 被説明項の言語表現が断定表現であるもの。

イー2-1) 事実文+ (判断文+のだ)

<例：熱がある。風邪をひいたのだ。(田中 1980:56)>

イー2-2) 判断文+ (事実文+のだ)

<例：風邪をひいた。熱があるのだ。(田中 1980:56)>

イー2-1) 事実文+ (事実文+のだ)

<例：風邪をひきました。雨に濡れたのです。(田中 1980:56)>

寺村(1984)

寺村(1984:305-311)は「のだ」を説明のムードを表す助動詞としている。「ムードの助動詞としての「ノダ」の意味は、かなり一般的な「説明」を表すとしかいいよのなような、範囲の広いもの」であると述べている。また、「～ノダを誘発するのは、ある状況を認識して、それを理解しよう、あるいは相手に理解させようという気持ちである」と指摘している。さらに、「先行する文、あるいは状況をPとしてとり立て(言語化するかしないかは別として)それについて説明する(あるいは説明を求める)のが、～ノダの最も一般的な使い方である」と述べている。

奥田(1990)

奥田(1990)では、「のだ」は文に「説明」としての働きをあたえる言語的な手段であるとしている。「のだ」を「説明する」と「説明される」との二つの部分に分け、そのあいだの様々な論理的な結びつき方についてテキスト論の立場から考察した。その結びつき方を大きく「つけたし的な説明」と「ひきだし的な説明」に分けている。「つけたし的な説明」の結びつき方として、原因、理由、動機、感情の源泉、判断の根拠、具体化・精密化・いいかえ、思考の対象的な内容、意義づけを挙げている。一方、「ひきだし的な説明」の結びつき方として、原因の結果、理由の結果、発見的な判断、必然の判断、評価的な判断、一般化の判断を挙げている。

益岡(1991)(2007)

益岡(1991:139-155)は「のだ」を「説明のモダリティ」と呼んでいる。「説明」を「設定された課題に解答を与えること」とし、「のだ」文の構造については、「設定された課題を主題とし、それに対する回答を解説とする「主題—解説」型の文である」と述べている。また、説明の類型について詳しく考察し、課題設定を「明示的文脈」に基づく場合と「非明示的文脈」に基づく場合に分け、それぞれについて「背景説明」と「帰結説明」が区別できると述べている。「背景説明」を「与えられた事態に対する理由や事情を述べるものである」とし、「帰結説明」を「与えられた事態から何が帰結するかを述べるものをいう」としている。さらに、「背景説明」、「帰結説明」に、主として「非明示的文脈」に基づく「叙述様式判断の説明」を加えている。

益岡(2007:85-95)は「説明のモダリティ」を再考し、新規知識の獲得の側面が問題にされる用法を「認識系」とし、既定知識の伝達の側面が問題にされる用法を「伝達系」として、「のだ」の用法を再分類した。「のだ」の用法に、「叙述様式説明」、「事情

説明」、「帰結説明」、「実情説明」、「当為内容説明」があり、それらすべてに伝達系・認識系の2系列が見られる」と結論づけている。

すでに堀口(1985)、国広(1992)、名嶋(2007)、井島(2010)などが指摘しているように、「説明」は「のだ」が有する多様な意味、用法と機能のある一面は捉えているが、「説明」ですべての用法を記述しようという点は問題である。野田(2002:230)は、説明について「一般に、ある事物や状況について、聞き手が十分に理解出来ていないとき、あるいは十分に理解出来できないだろうと予想されるとき、話し手は、わかりやすくかみくだいて述べたり、詳しい事情などを述べたりして、聞き手の理解を助けようとする。そして、そういった行為は、説明と呼ばれる」と定義している。この定義に従うと、以下の例(12)と例(13)のような場合には、「説明」と呼ぶのはふさわしくないとされる。

(12) 「十八です」

「十八……」 この子、きっと伸子さんを好きなんだわ、と純子は思った。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(13) 「あら、そんな? 地髪を切っちゃ駄目よ。」

「ずいぶん幾つも縛ってるんだね。」

(川端康成『雪国』)

このような「のだ」が「説明」の「のだ」とはどのような関連があるのかを言及するのは少ない。「説明」という用語で「のだ」のすべての意味と用法を記述することは不可能であり、無論、それを「のだ」の本質とすることもできない。しかし、「説明」は「のだ」の意味用法として、認知されやすく、典型性を有することは否めない。

2.1.2.1.2 既成命題説

既成命題説は、「のだ」に前接する命題は既成、ないし既定のものであるとする説である。既成ないし既定というのは、命題によって表される事柄が過去の事実とは限らず、未来についての既定の計画の場合もある。代表的なものとして三上(1953)、国広(1984)(1990)(1992)などがある。

三上(1953)

三上(1953:232-248)は「のだ」を一個の準用言(準詞)と見なす立場をとり、「何々ス

ル、シタ」の単純時に対して「何々スル、シタ+ノデアル、アッタ」を反省時と呼んで対立させる。そして、「連体部分「何々スル」を既成命題とし、それに話手の主観的責任の準詞部分「ノデアル」を添えて提出するというのが反省時の根本的な意味だろうと思う」と述べている。また、反省時と単純時の違いについて、「単純時は報告であって、センテンスの一つ一つが独立して使われ、順々に言いつづけられて体裁をなして行くが、反省時による解説は文脈の解決をめざすものだから、何らかの場面を前提として使われるものである。つまり前文と関係的に出てくるものであって、その続き具合は順でなく「逆」である」と指摘している。さらに、「提出された既成命題が、そうして提出されたということで理由や結論らしい役割をつとめて前後を結びつける、といった程度に因果関係をほのめかすものであり、一方提出によって命題の既成であることを併せ示している。半ば理由づけ(ムウド)であり、半ば完了(テンス的)である」と述べている。

国広(1984) (1990) (1992)

三上(1953)を受け継いだ国広(1984:9)は、「のだ」の意義素を「「のだ」は現況を出発点として、それと何らかの関係のある命題を既成のこととして提示する。既成とは過去の事実とは限らず、未来についての既定の計画でもある。文脈によっては出発点が過去時であることがあるが、そのときは「のだ」はさらに一段前の過去を示す」と示している。そして、説明説などの諸説は既定命題説の中に含まれると位置づけている。国広(1990)は「既定命題」を「既定命題」と呼びかえて、以下の図2-1で示している。



国広(1990:3)

図2-1 「のだ」の意義素

その定義について、以下のように提示している。

つまり、話者が何らかの言語表現によって「既定命題」を提出する必要があると考えるような「現状を認知する」のが前提で、その認知に基づいて「現状」と関連のある(relevant)「既定命題」を提出しているのだという印が「のだ」だということである。

国広(1990:3)

さらに、国広(1992:19)は「のだ」の意義素を「ある現状を認知するという主体的行為を行ない、それと関連があると“主観的に判断される”既定命題を「のだ」の前に提示する」と言い換えている。

既成命題説または既定命題説は「のだ」を統一的に説明するため、抽象的な意味特性を求めているが、「既成」「既定」「関連がある」などの用語の定義が明確にされていない。これは三上(1953)と国広(1984)(1990)(1992)両方に見られた問題点である。また、既成命題説または既定命題説から「のだ」の様々な意味用法へとどのように変容されているかについての議論は曖昧であり、明確に示されていない。例えば、国広(1992)は「のだ」の具体的な意味を19種類と挙げ、これらの語用論的意味変容は単一の意義素で説明することができるとしているが、実際に単一の意義素からどのようなプロセスを経て変容されているかについては示されていない。

2.1.2.1.3 その他の基本的な意味・機能を求める説

説明説と既成命題説のほかに、「のだ」の基本的な意味・機能を追究する研究としては田野村(1990)、堀口(1985)、佐治(1991)(1997)、菊池(2000)、井島(2010)などが代表的である。

田野村(1990)

田野村(1990:5-8)は、「 β のだ」は α を受けて、その「あることがらの背後の事情」や「ある実情」を表すのが基本的機能だとしている。 α が具体的なことがらとして存在する場合、「のだ」は「あることがら α を受けて、 α とはこういうことだ、 α の内実はこういうことだ、 α の背後にある事情はこういうことだ、といった気持ちで命題 β を提出する」という「あることがらの背後の事情」を表すとしている。 α が具体的なことがらとして存在しない場合、「のだ」は「ある実情」を表すとしている。そして、後者の用法においては、「すべてのものには必ずしも容易には知り得ないにせよ、すでに定まっていると想定される事情 α が話し手の念頭に問題意識としてあり、それが β である(かどうか)ということが問題とされている」という。また、背後の事情や実情を表すという「のだ」の基本的な意味・機能から出てくる派生的な意味特性ないし使用条件として「承前性」、「既定性」、「披瀝性」、「特立性」の四つを挙げている。

堀口(1985)

堀口(1985:52-57)は山口(1975)をもとに、先行文や先行するコンテキストを受ける「のだ」表現における「説明」といわれるものを整理するとともに、先行文や先行するコンテキストを受けない「のだ」文を検討し、「のだ」表現は、それに上接する用言句の表すことが「**確実な事態**」としてあることを表す表現である」と定義している。そして、「のだ」表現の本質は「**説明**」にあるのではなく、それは「**確実な事態**」の提示を基本にするものだ」と主張している。また、「のだ」の「強調」、「確認」、「説明」、「命令」などの用法は「**確実な事態**」の提示」という基本的な機能から生じるものであると述べている。

佐治(1991)(1997)

佐治(1991:181-254)は「のだ」の構文論的機能と意味を考察し、「のだ」は、その前にある述語によってあらわされている判断が、その判断の出てくる状況（その状況の中には話し手が心の中でよく知っているといったことも含まれる）から、そのまま成り立つことの表現であり、前の述語の判断を確かなものとして認定する表現であると言っても良い。もっと簡単に、客観的な真実として述べるものだ、とも言えよう。そこから、解説、説明、説得的な感じも出てくるのである」と述べている。また、その考えを補うものとして、「「～のだ」の前は述語の連体形になっている。述語の連体形によって表わされる判断は、話し手(の主観)が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手(の主観)の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である」、「のだ」の「の」は、その前の述語の連体形によって表わされる判断をいったん固定化し、「だ」はそれをもう一度主観的に断定するものである」と記述している。さらに、上記の論考を踏まえ、「の」の前の述語の表す内容、およびその述語がまとめあげる種々の成分と述語によって描かれることがらを客体的に固定化するものである。そのことによって、話し手の主観からはなれたところで成立していることがらとして提出することになり、そこに、まわりの状況、前文、先行文脈とのかかわりが生じるのであろう」とまとめている。

佐治(1997:213)は「のだ」の中心的性質について、「「Xノダ」が、それが現表される時の状況の中のYなる事態に関わって、Xなる事態が、既定のものとしてあることを言い表すものである。Yは、ことばとして言い表されることもあるが、言い表されないこともあり、ことばで言い表すことがほとんど不可能な場合もある」と述べ、「のだ」の特性として、「前提的事態への関連の表現」、「既定事態化の表現」、「品定めの判断の表現」を挙げている。

菊地(2000)

菊地(2000:29)は「のだ」の基本的な用法を以下のように示している。

「のだ」の基本的な用法：

- ①話手と聞き手が、ある知識・状況を共有していて、
- ②それに関連することで、話手・聞き手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方が「のだ(んです)」(その提示を求めるときの言い方が「のか(んですか)」)である。

しかし、以上で示した基本的な用法は対人的な場合のみで、独話に用いられる「のだ」の用法には当てはまらないと思われる。

井島(2010)

井島(2010)はこれまでの「のだ」に関する先行研究の全体を見渡し、「のだ」の最も基本的な意味機能を「所有者のある命題」であることを表すという立場から、「のだ」の全体を統一的に説明することを試みた。井島(2010:103-104)は、「のだ」の最も本質的な意味機能は、ノダ文が下接する命題にその内容に責任を持つ人物、すなわち所有者が存在することであると考え。いわば「誰々」の「何々」という形の命題であるということになる。この前にある「誰々」には、話し手、聞き手、一般的第三者などの人物が入り、後に来る「何々」には、期待、信念(この場合、beliefの訳として用いる)などが入る。いずれのものが入るかは、用いられる状況によって決定されるものと考え」と述べている。また、文の種類による意味機能は、「聞き手に対して発話されるのか、独り言のように自分自身に向けられて発話されるのか、あるいは前後の文脈や発話状況と“関連付け”て発話されるのか、そうでないのか、などの条件が加わって、様々な“用法”が派生されると考えられる」と述べている。

以上のように、「のだ」の基本的な意味・機能をめぐって様々な観点から研究がなされてきた。これらの研究は、「のだ」の本質を把握するには有効であるが、「のだ」の構文的な意味機能、基本的な機能と「説明」「命令」などの個別の意味用法とどのように連結されているかについては明確ではない。つまり、基本的な意味機能からそれぞれ

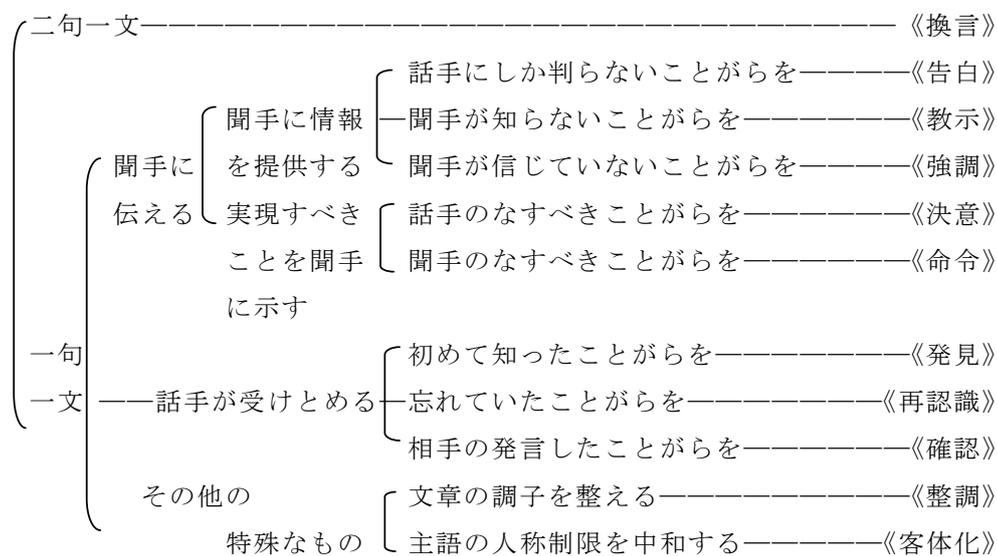
の意味用法への派生に関する記述が足りない。また、「のだ」の意味機能を希薄化、抽象化する傾向が見られる。例えば、菊池(2000)の「のだ」の基本的な用法に関する記述は希薄であり、「のだ」だけではなくほかの言語形式にも見られる機能の説明と言える。

2.1.2.2 多機能説

「説明」という用語で記述しきれない意味と用法を含め、「のだ」の多種多様な意味・機能を細分化し、網羅的に示す研究がある。代表的なものは吉田(1988a)(2000)、野田(1997)などである。

吉田(1988a)(2000)

吉田(1988a)は「のだ」の組成を「<準体助詞「の」+述語化要素>」とし、「ノダ形式は、叙述内容をいったん句的体言とし、然る後にあらためて述語形式たらしめる。手短かに言えば、<述語の体言化とその再叙述化>がノダ形式を用いる表現の構造である」(p. 46)と述べている。また、文末に使用される平叙・現在の「のだ」形式の表現効果を「換言、告白、教示、強調、決意、命令、発見、再認識、確認、整調、客体化」の11種類に細分類し、以下の図2-2で示している。



吉田(1988a:52)

図2-2 「のだ」形式の表現効果の分類

吉田(2000)は「のだ」の表現効果を再度整理し、「文内表現効果」と「文間表現効果」

の二つに分けている。また、「文内表現効果」を「第一類《換言》、第二類《得心・再認識》、第三類《告白・教示・強調》、第四類《決意・命令》」の四種類に下位分類し、「文間表現効果」を「A類【捉え直し】、B類【根拠付け】」の二種類に下位分類している。その上で、「説明」という語で呼ぶことができるのは「文内表現効果」の第一類《換言》と第三類《告白・教示・強調》、「文間表現効果」のA類【捉え直し】とB類【根拠付け】であると述べている。それらを「説明」と呼びうる事情はそれぞれ異なることと、さらに第二類《得心・再認識》と第四類《決意・命令》は「説明」とみなしがたいことから、「のだ」の表現内容全体を「説明」一語でまとめるのは無理であると論じている。

野田(1997)

野田(1997)では「のだ」を一語化した助動詞だと考え、「[名詞化の機能をもつ「の」+「だ」]という組成のままに近い、プリミティブな性質をもつ「のだ」(スコープの「のだ」と、一語化して変質し、「説明」と言われるようなムードを担う「のだ」(ムードの「のだ」)がある」(p. 13)という立場に立ち、「のだ」の機能を考察している。

野田(1997)では、「前接する部分を名詞化するために必須である「のだ」」(p. 33)をスコープの「のだ」と呼ぶ。スコープの「のだ」は構文的な必要があって用いられるもので、「の」+「だ」という組成のままの機能にかなり近いものであり、文の一部をフォーカスにするという機能を持っているとしている。

(14) 悲しいから泣いたのではない。

野田(1997:33)

また、ムードの「のだ」は「文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心の態度を表す」(p. 66)のものであるとし、対事的(必ずしも聞き手を必要としない)ムードのみを担うか、対人的(必ず聞き手を必要とする)ムードも担うかという軸と、事態Qが状況や先行文脈Pとの関係づけを示すか示さないかという軸とで以下の表2-1の四種類に分類した。

表2-1

ムードの「のだ」の分類

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味としてQを把握する	Pの事情・意味としてQを提示する

非関係づけ	Qを(既定の事態として)把握する	Qを(既定の事態として)提示する
-------	------------------	------------------

野田(1997:67)

(15) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。

(16) そうか、このスイッチを押すんだ。

(17) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。

(18) このスイッチを押すんだ。

野田(1997:67)

野田(1997:67)は「対事的ムードの「のだ」は、話し手が発話時において、それまで認識していなかった既定の事態Qを把握する時に用いられる、必ずしも聞き手を必要としない」と述べている。そして、関係づけの対事的ムードの「のだ」は、状況や先行文脈Pの事情、意味としてQを把握するときに用いられ、非関係づけの対事的ムードの「のだ」は、Qを既定の事態として把握するときに用いられるとしている。例(15)(16)はそれぞれ関係づけと非関係づけの対事的ムードの「のだ」である。「対人的ムードの「のだ」は、話し手がすでに認識していた事態Qを聞き手に提示する場合に用いられ、必ず聞き手を必要とする」と述べている。関係づけの対人的ムードの「のだ」は、状況や先行文脈Pの事情、意味としてQを提示し、それを聞き手に認識させようとするときに用いられ、非関係づけの対人的ムードの「のだ」は、Qを既定の事態として提示するときに用いられるとしている。例(17)(18)はそれぞれ関係づけと非関係づけの対人的ムードの「のだ」である。さらに、野田(1997:81)は「対事的ムードの「のだ」というのは、スコープの「のだ」と対人的ムードの「のだ」の中間に位置するものである」と述べている。

多機能説は、「のだ」の多種多様な意味・機能を細分化し、網羅的に示す点では評価されるが、問題点も存在している。吉田(1988a)では「のだ」の表現効果を細分化し過ぎる傾向が見られる。例えば、「整調」は基本的に「強調」「教示」、「客体化」は基本的に「教示」の分類に入れられると思われる。このような表現効果の細分化は、本研究の目的には必ずしも有効ではない。学習者には意味と機能の適切な分類が必要であり、細分化し過ぎると逆に全体的な意味の把握に妨げが生じる。また、「のだ」の用法を記述する際、その意味論的意味と語用論的意味の分別を考慮せず、混在して記述されているので、学習者がそれをそのまま「のだ」の表す意味だと誤解する恐れがある。野田(1997)は「のだ」をスコープの「のだ」とムードの「のだ」に二分化しているが、「のだ」の意味と機能から考えると、スコープ・フォーカスは副次的な機能である。「のだ」をスコープの「のだ」とムードの「のだ」に二分化すべきではないと考える。また、野田(1997)

にも「のだ」の意味論的意味と語用論的意味を区別せずに記述している問題点が存在する。

2.1.3 語用論の立場からの先行研究

前項では、文法の観点からの「のだ」の先行研究について検討したが、この節では、語用論の立場からの先行研究をまとめる。主に、関連性理論を用いた先行研究と談話分析の観点からの先行研究を概観する。

2.1.3.1 関連性理論を用いた先行研究

近年、Sperber and Wilson によって提出された関連性理論の枠組みを用いた「のだ」の研究成果も見られる。代表的なものとして内田(1998)、近藤(2002)、名嶋(2007)などがある。

内田(1998)

内田(1998:244-249)は、Sperber and Wilson(1986a)が記述している「描写的用法」と「解釈的用法」の区別に基づいて「のだ」の用例を分析し、「のだ」を「話者の主観的判断を表す解釈的用法のマーカである」と位置付けている。また、「のだ」は何らかの「話し手の関与」を暗示するものであり、その方向に聞き手の注意を向ける働きがあるという、手続き的(procedural)意味をもち、聞き手が高次表意を復元するのに貢献するのである」とまとめている。

近藤(2002)

近藤(2002)では関連性理論と「談話連結語」の観点から、聞き手は「ノダ」で会話に導入された発話から話し手の伝達意図をいかに理解するかという情報の受け手の視点に立ち、会話で使用される平叙文に後続する「のだ」の意味・用法を分析している。また、会話における「ノダ」が、英語のsoに類似した談話展開の機能を有するよう見えることから、「ノダ」を接続詞などの談話連結語に準じる形式として、次のような仮説を立てた(p. 244)。

談話連結語形式としての「ノダ」:

「ノダ」は、談話の首尾一貫性を保証する談話連結語形式であり、「ノダ」が導く

発話が表す命題の真理条件には関与しないが、聞き手の発話理解過程を制約する手続きの意味を有する。

名嶋(2007)

名嶋(2007:305)はこれまでの先行研究を踏まえ、関連性理論を主とした語用論の観点から、「のだ」の本質的機能とその諸用法について考察した。「ノダが示すとされてきた関連性」即ち「ノダ文と発話状況・先行文脈との間の関連」というものは発話時において、聞き手にとって所与のものとして存在しているものではなく、聞き手が発話解釈の過程において主体的に見出していくものである、ということである。つまり、ノダは聞き手に対し、「関連性の見込み」を「意図的に、かつ、意図明示的に」伝達するもの」とであると述べ、「これまでいくつかの先行研究が述べてきたように、ノダそれ自体が直接命題間の「関連付け(関係付け)」や「因果関係」といった具体的な「命題間の統合的関係」を表すのではない」という結論を出している。そして、「のだ」を「説明のモダリティ」とする現代日本語学における代表的な考え方に対し、「解釈のモダリティ」という考え方とその体系構築を提案した。

名嶋(2007)は、関連性理論の立場から「のだ」を研究するもののうちの集大成といえる研究である。しかし、井島(2010)が指摘したように、名嶋(2007)は理論の適用の仕方を誤っている。井島(2010:88)は、「関連性理論は語用論の原理の一つであり、意味論的意味から語用論的意味を導出するために適用される理論である」と述べ、「名嶋(2007)で提出されたノダ文の意味(意味論的意味であるべきもの)は、この関連性理論を下敷きにしており、理論の適用の仕方を誤っていると判断せざるをえない」と指摘している。

名嶋(2007:305)は、「ノダは、ある命題を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」「聞き手に対して提示する」と定義し、これを「意味論的意味」としている。そして、「既定命題」、「関連付け」等の本質的意味・機能や「発見」、「説明」、「命令」「強調」等の意味は全てこの「意味論的意味」から派生された「語用論的意味」である。しかし、この「意味論的意味」は「聞き手Aにとって最適な関連性を有する」と「話し手Bによって見込まれている」ということから導き出されている。つまり、これは関連性理論という語用論の原理のもとに導き出されたものである。そもそも、「意味論的意味」は特定の場面や話し手、聞き手から抽象化されて、純粹に問題となる言語における表現の有する特性として規定される意味で、「最適な関連性」などを考慮するものではない。このように、名嶋(2007)ではベースとなっている「意味論的意味」の規定が誤っていると考えられる。

2.1.3.2 談話分析の観点からの先行研究

メイナード(1997)

メイナード(1997)は随筆、日常会話などを分析対象とし、「のだ」の談話機能を提示した。まず「のだ」文に関して次のように捉えている(p. 181)。

1. 「の」の名詞化によって事件を客体化し状態として捉える。
2. 動詞「だ」によって言語主体の意見、発話の態度等を伝える。
3. 「のだ」文の構造はテーマ・レーマ構造と関連して談話の結束性を支え、コミュニケーションの場にふさわしい発話を形成する

また「のだ」を「「のだ」文には「の」の客体化による描写上の距離と、「だ」による言語主体の主観的モダリティ表現、しかもこの文型を選ぶことによる命題の主観的捉え方が含まれている」(p. 183)と述べている。

霜崎(1981)

霜崎(1981)は森鷗外の『雁』を通じて、「ノデアル」の意味機能をテキストにおける結束性という観点から検討を行った。日本語において明示的に結束性を表す「ノデアル」は、英語に訳すと結束性を明示する場合とコンテキストによって暗示する場合があると述べている。「「ノデアル」によって明示的に行われる結束性の表示は、英語ではある場合には「ゼロ」の記号による暗示的なものにとって代われ、そのためにある文が、それに先行する文に対して承前機能を含むものかどうかはコンテキストに基づく判断にまかせられたりすることがある」(p. 122)と述べ、また何らかの手段に頼ることによって明示的に表されることもあると述べている。

談話分析によって示された「のだ」の機能はその一部しかなく、「のだ」の機能の全体を明らかにしているとは言えない。

2.1.4 日本語教育の立場からの先行研究

近年、「のだ」が使用される条件を学習者にイメージさせることを目指す日本語教育の立場からの研究が増え始めている。代表的なものとして庵(2013)、今村(2007)などが

ある。

庵(2013)

庵(2013)は日本語教育文法の立場から、学習者の産出につながる「のだ」の記述を試みた。「産出レベル」の記述を考える上で必要な要件として、以下のようにまとめている。

- ①疑問文・否定文の「のだ」は、その文に「前提」があることを表す。
- ②平叙文の「のだ」は、「理由・解釈」「言い換え」「発見」に分けて考えるとよい。
- ③「理由」の場合は基本的に「からだ」と言い換えられるが、「解釈」の場合は原則として「からだ」は使えない。
- ④「言い換え」の場合は基本的に「わけだ」と言い換えられる。
- ⑤「のだ+モダリティ形式」のパターンで使える形式は「だろう、かもしれない、にちがいない」に限られる。これらの意味は「のだ+モダリティ形式の意味」として理解できる。
- ⑥「のではないか」は「のだ+（確認を表す）ではないか」と見なせる。

庵(2013:8)

今村(2007)

今村(2007)は、話し手の表現意図から独立した客観的な事実関係を「のだ」使用の条件とみなす考え方の限界を示し、「のだ」使用には、客観的な事実関係だけでなく、発話内容をどのように聞き手に提示するかという話し手の「発話態度」も影響していると指摘した。また、「のだ」文に表された話者の発話態度や語感を日本語学習者に追体験してもらう方法を考え、話し手の発話態度の中に「のだ」の使用基準になる要因を特定した。考察の結果は以下のようにまとめられる。

- ①構文上の規約や情報共有の有無など、客観的な事実関係を「のだ」使用の条件としてルール化することは、その有効性に限界があり、ルール化できた部分も複雑すぎて日本語学習者の理解を助けることができないものが多い。
- ②直前の文を名詞化・客体化し、断定するという「のだ」構文の分析的記述は、直前部分の内容を一つのまとまりとして見つめて聞き手に差し出すという、直感的記述（語感）に言い換えることができる。

- ③そこから導き出される「のだ」の発話態度の本質は、話の内容を相手に投げかけ、注意を促し、判断を迫るものであり、聞き手は、その発話態度を受けて、「のだ」文を噛み締めて、文脈の中で解釈するよう促される。
- ④「のだ」使用には、客観的な事実関係よりも発話態度のほうが大きく影響している。
- ⑤「のだ」の使用実態の多くは、「語りかけ度」、「語りかけタイプ」やその発話態度を使って矛盾なく説明することができる。

今村(2007:48)

日本語教育の立場からの先行研究は、日本語教育への応用を考慮し、学習者がイメージしやすく、産出しやすい記述を行っている。日本語学習者の理解を助けることには有効である。但しこれらの先行研究には、「のだ」の意味と意味の間がどのように結ばれているか、どのようなネットワークを構成しているかという観点をもって日本語教育への応用を試みたものはまだない。

2.1.5 認知言語学の立場からの先行研究

「のだ」に関する認知言語学の立場からの先行研究は非常に少ない。笠井(2014)はLangacker (1987) のネットワーク・モデルを用いて、「のだ」の多義構造を考察している。

笠井(2014)

笠井(2014)は「のだ」を「意味的機能のノダ」と「統語的機能のノダ」(スコープの「のだ」)に分け、「意味的機能のノダ」における多義構造の記述を通して、「意味的機能のノダ」と「統語的機能のノダ」との関係性を考察した。笠井(2014)は、「意味的機能のノダ」として吉田(2000)で挙げられた意味的機能を以下のように再分類している。

意味①：情報に関わるもの・・・《得心・再認識》／《告白・教示・強調》

意味②：要求に関わるもの・・・《決意・命令》

意味③：前後の文との間に構成されるもの・・・【捉え直し】【根拠付け】

笠井(2014:117)

また、以上の分類に基づいて、「意味的機能のノダ」が持つ多義構造を以下の図 2-3 のようにまとめた。

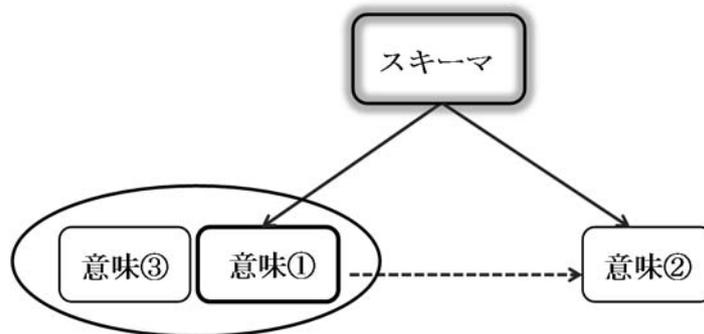


図 2-3 「のだ」の多義構造

意味① (プロトタイプ) 〈聞き手もしくは話し手自身に、受け入れるべき情報を示す〉

意味② 〈聞き手もしくは話し手自身に、受け入れるべき要求を示す〉

意味③ 〈聞き手もしくは話し手自身に、関連付けるべき情報を示す〉

意味① (プロトタイプ) から意味②へ：メタファー/拡張関係

意味①と意味②の共通点 (スキーマ)：〈聞き手もしくは話し手自身に、受け入れるべき話し手の信念を示す〉

スキーマから意味①、意味②：シネクドキー/スキーマ関係 (詳細化・具体化)

意味①から意味③へ：メトニミー

笠井(2014:120-121)

さらに、「意味的機能のノダ」のスキーマは、ノダの本質的機能である「実体化」から実現するものであると主張し、「意味的機能のノダ」と「統合的機能のノダ」の関係について、以下のような仮説を提唱した。

「意味的機能のノダ」と「統合的機能のノダ」の両者は無関係ではなく、ノダの本質的機能である「実体化」を共通基盤として実現している。

笠井(2014:123)

笠井(2014)は、先行研究のスキーマの「のだ」を「統語的機能のノダ」としている。そして、「意味的機能のノダ」と「統合的機能のノダ」の関係について詳しい検証を行っておらず、仮説を提示するに留まっている。本研究はスキーマの「のだ」の統語的機能は副次的な機能であると考え、例えば、スキーマの「のだ」に分類されている以下の例(19)では、「黒く焦げていた」ということを前提として、その理由「閃光かまたは爆発で起った熱気のために」を新しい情報として付加して説明している。

(19) 後で見ると、竹筒が舷から食みだしていた部分は、半面だけ黒く焦げていた。
閃光かまたは爆発で起った熱気のために焦げたのだ。

(井伏鱒二『黒い雨』)

従って、この新しい情報が自然に文の焦点(フォーカス)として現れてくる。笠井(2014)の分類に従うと、例(19)のようなスコープの「のだ」は意味①に分類することも可能である。また、意味②に分類されている「命令」「決意」は「のだ」の意味的機能ではなく、語用論的に派生するものである。笠井(2014)の「のだ」の分類と多義構造が妥当かどうかは検討すべきである。

2.1.6 先行研究の問題点と本研究の立場

以上、「のだ」に関する代表的な先行研究を概観し、問題点を分析した。説明説は「のだ」が有する多様な意味、用法と機能のある一面しか捉えておらず、「説明」ですべての意味用法は記述しきれない。また、「のだ」の基本的な機能を明らかにすれば、その多様な意味用法は統一的に記述できるが、「のだ」の全ての意味用法をカバーするために、結局、基本的な機能が希薄化、抽象化されることになる。その上、基本的な意味機能から個別の意味用法への派生に関する記述が足りないため、日本語学習者が具体的なイメージをつかむのは難しく、日本語教育現場への応用も難しい。さらに、「のだ」の多種多様な意味・機能を細分化し、網羅的に示すことは評価できるが、細分化し過ぎると逆に学習者の全体的な意味の把握に妨げが生じる。特に、「のだ」の意味論的意味と語用論的意味の分別を考慮せず、混同して記述すると、学習者がそれをそのまま「のだ」の表す意味だと誤解する恐れがあり、誤用非用を招くかもしれない。

先行研究には「のだ」の意味論的意味と語用論的意味を区別せずに記述しているものもある。また、「のだ」の意味に関して拡大解釈している傾向もみられる。「のだ」の解釈には語用論的推論が関与していると考えられるので、「のだ」の意味論的意味と語用論的意味を明確に区別した上で、考察する必要があると考えている。ここで、本研究の意味論的意味と語用論的意味の定義を再掲する。

意味論的意味の定義：特定の場面や話し手、聞き手から抽象化されて、純粹に問題となる言語における表現の有する特性として規定される意味。

語用論的意味の定義：コンテキストや発話場面を考慮し、言語の話し手、ないし言語の使用者との関連で規定される意味。

日本語教育の立場からみると、多義語の意味を教えるにあたり、意味と意味の間がどのように結ばれているかを学習者に理解させることができれば、全体の意味ネットワークの理解と意味習得に役に立つのではないかと考える。また、「のだ」については、様々な観点、立場から研究が行われているが、認知言語学の視点からの研究は非常に少ない。そこで、本論文は、日本語教育への応用を念頭に置き、認知言語学と語用論の観点を援用し、「のだ」の意味論的意味と語用論的意味を明確に区別した上で、考察を行う。

第一に、多様な言語現象の本質を人間の一般的な認知との関わりから解明する認知言語学を援用し、「のだ」の意味論的意味について考察する。「のだ」の各意味を具体的に分析し、そのプロトタイプの意味をつかみ、複数の意味を関連付けるメカニズムと「のだ」の多義構造を究明する。

第二に、「のだ」の構文的構造の分析に基づいて、「のだ」の意味論的意味を確認する。井島(2010:81)では、「説明・関係付け説が談話文法あるいはテキスト文法に位置付けられるものであったのに対して、既成命題説は文の中に納まる文文法に位置付けられる。すなわち、この二つの説は、ノダの本質的な意味機能について、説明・関係付け説は談話文法あるいはテキスト文法レベルにあると考えるのに対して、既成命題説は文文法レベルにあると考えるというように、決定的な違いがある。そして、既成命題説はさらに二次的に、談話文法ないしテキスト文法レベルにおける“説明”あるいは“関係づけ”という意味機能が派生されると考えることになる」と述べている。本論文は、「のだ」は文文法とテキスト文法⁷にまたがるものと捉える。

(20) 地面が濡れているのは雨が降ったのだ。⁸

(21) 地面が濡れている。雨が降ったのだ。

例(20)(21)は由来、原因の説明を表しており、それぞれ文レベルとテキストレベルから把握する「のだ」である。本論文は「のだ」の構文的構造とその意味論的意味の関係を明確にする。

第三に、「のだ」の語用論的意味について、認知意味論の考察と関連させながら、どのような語用論的な要因や条件、状況と結びついてその意味、ニュアンスが生じてくるかを究明する。また、その語用論的条件を基に意味解釈のプロセスを明らかにする。さらに、多様な場面で頻繁に使われている「のだ」+「よ」についても考察し、両者の関連性、共起する際の機能を明らかにする。

⁷ 文文法は文法的機能が一文の中だけで完結するものであり、テキスト文法は文法的機能が文を超えて、文同士の関係や構造の規則によって決められるものである。

⁸ 田野村(1990:1)の例を参考にした。

2.2 「ものだ」に関する先行研究

「ものだ」に関して、日本語学の立場からの研究が盛んに行われてきている。本節では、「もの」に関する先行研究、「ものだ」に関する先行研究、「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究の三つに分け、文法、認知言語学、語用論の観点からそれぞれの先行研究を整理する。

2.2.1 「もの」に関する先行研究

「もの」の研究に関しては、寺村秀夫(1981)、原田・小谷(1991)等が日本語学の立場から「もの」と「こと」の区別について論じている。靱山(2000)はラネカーのネットワークモデルを参考にし、「もの」の多義構造を明らかにしている。

2.2.1.1 日本語学の立場からの先行研究

寺村(1981)

寺村(1981)は、「もの」と「こと」の使い分けを説明する上で、「具体的、具像的」対「抽象的」という対立から論述を展開している。「もの」は一般に具体的であると考えている。「石」や「太鼓の音」や「ビール」のような五官で知覚される「物理的な具体的存在」と「旅」「運命」「波瀾」「情欲性」「楽シミ」のような五官で知覚されるが物理的な存在物とはいえない「心理的な具体的存在」があるとした。

一方、「こと」に関しては、寺村(1981:753)は一般に抽象的であるとしている。「コトの対象は、命題で表されるような内容や、動詞、形容詞で表される動作、作用、変化、状態、属性などを一般的に概念として表したもので、である。モノが個別的であるのに対してコトは一般的、モノが感覚(五官)ないしそれに準ずる心理作用によって把握される対象であるのに対して、コトは思考によって把握される対象、発話や知識の内容である、というように対置できるかと思われる」と述べている。

原田・小谷(1991)

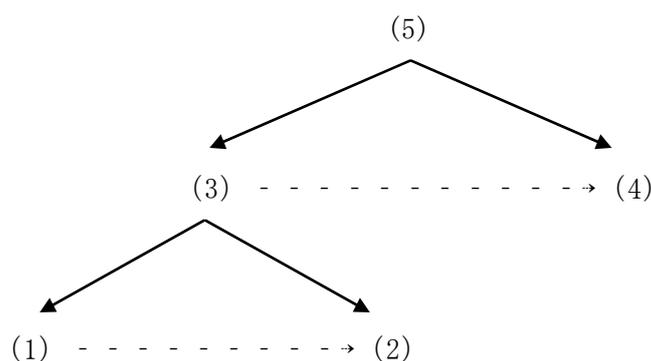
原田・小谷(1992:5-7)は外国人学習者への日本語教育の立場から「もの」と「こと」の区別を論じている。「もの」とは不変的存在物であり世間でのありかたである。そして、その存在物やありかたには一定の規範論理が貫かれている。この時間的に不変な存在物は、具象物が時間的に不変であり恒常的であることと通じている」と述べている。

一方、「こと」で表現された文の場合には、その事柄は生成変化し不動ではない一事情の話者の経験を示しているのであり、その意味では可変的な性質の事例である」と論じている。原田・小谷(1992:1)によると、「もの」と「こと」の大きな違いは、「もの」が時間に関わりなく不変であるという観点に拠るのに対し、「こと」は時間の経過に伴い変化するという観点に拠る」という点にある。

2.2.1.2 認知言語学の立場からの先行研究

梶山(2000)

梶山(2000)はラネカーのネットワーク・モデルを参照し、「もの」の多義構造を明らかにしている。「もの」の複数の多義的別義を記述するとともに、多義的別義相互の関係を、比喩(隠喩と提喩)の観点から考察した。「もの」の多義構造は以下の図2-4のように示されている。



梶山(2000:187-188)

図2-4 「もの」の多義構造

- ①プロトタイプの意味：〈人間〉(及び他の動物)以外の〈形のある〉〈存在〉
- ②〈プロトタイプの意味の「もの」と同列に扱われた〉人間
- ③〈形のある〉存在
- ④ 〈抽象的な(形のない)〉〈存在〉
- ⑤スキーマ：〈存在〉

破線の矢印は隠喩に基づく意味の転用を表し、実線の矢印は提喩に基づく意味の転用を表す。③〈形のある〉存在という意味は(局所的)スキーマであり、①プロトタイプの意味及び②〈プロトタイプの意味の「もの」と同列に扱われた〉〈人間〉という意味と

提喩の関係にある。①と②は隠喩に基づく意味の拡張である。また、③<形のある>存在と④ <抽象的な(形のない)><存在>に共通するスキーマとして何らかの方法で把握できる、形の有無や具体性・抽象性を問わないすべての⑤<存在>という意味が抽出できる。この<存在>という意味は「もの」の(スーパー)スキーマであり、③と④は隠喩に基づく意味の拡張である。

以上、「もの」に関する代表的な先行研究を概観したが、これらの研究では、「もの」はあらゆる物体・物質、品物・物品の「上位語」であり、「不変的存在」であるという点において一致している。

2.2.2 「ものだ」に関する先行研究

本節では「ものだ」に関する代表的な先行研究を概観する。文法の観点からの先行研究、認知言語学の立場からの先行研究と語用論の立場からの先行研究の三つに分けて整理する。

2.2.2.1 文法の観点からの先行研究

文法の観点からの先行研究には、寺村(1981)(1984)、坪根(1994)、藤井(1996)などがある。

寺村(1981)(1984)

寺村(1981)は、「ものだ」の助動詞的用法として、本性・習性を述べるもの、あるべき姿の主張を表すもの、事件の背景や対象の出現の由来を説明するもの、さらに、感慨・驚きなどを表すものなどを挙げている。そして寺村(1984)は「ものだ」の用法を再度整理し、「当為、解説、回想、驚き」の四つに分けられると述べている。

寺村(1981)は「本性・習性」を「ものだ」の助動詞的用法として挙げているが、寺村(1984)はそれを実質名詞としての「もの」が「だ」と結びついた構造とみなしている。そして、「本性」を表す「ものだ」と「当為」を表すムードの助動詞「ものだ」を識別するテストを提案している。しかし、後に靫山(1992)で指摘されたように、この判断の根拠となるテスト自体に問題があり、「本性」と「当為」の意味を識別する方法として妥当ではない。

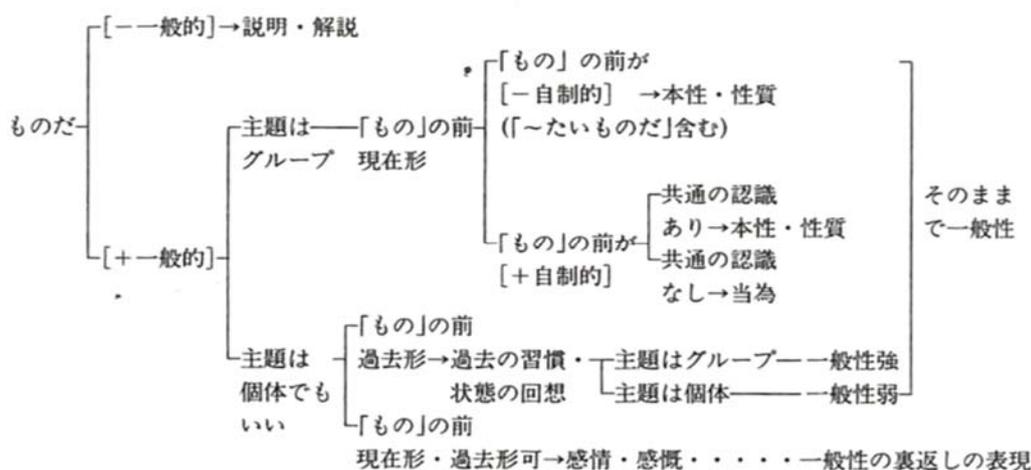
坪根(1994)

坪根(1994:65)は、「いくつかあるとされている文末の「ものだ」の用法には、ある共通する意味があり、それが表面上様々な意味を表すようになっている」という考えを検証しようとしている。その結果、「ものだ」の共通の意味は、「前接する命題について「一般的にこうだ」ということを話し手の意志・判断として相手に訴えかけることである」(p.66)としている。「ものだ」の用法には、本性・性質、当為、説明・解説、過去の習慣・回想、感情・感慨の五つの用法があるとされており、例(22)のような「説明・解説」の用法を除き、各用法は「一般性」という性質を含み、その一般性の作用の仕方によってさまざまな意味になると論述している。

(22) DDI(第二電電)は十五日、市外通話料金の値下げと料金制度の変更を郵政省に認可申請した。(中略)NTTが今月十九日から値下げをするのに対抗したもので、認可されれば、十一月上旬から実施する。

坪根(1994:69)

坪根(1994)は「ものだ」の各用法を以下の図2-5のようにまとめている。



坪根(1994:76)

図2-5 「ものだ」の各用法と一般性の関係

坪根(1994)は「ものだ」の各用法が共通して持つ「一般性」を一本の軸として「ものだ」を説明しているが、「ものだ」の五つの用法のうち「説明・解説」の用法は「一般性」では説明し切れていない。それゆえ、「一般性」が「ものだ」に共通している意味であるとは言いがたいであろう。「説明・解説」の意味が他の意味用法とどのような関

係を持っているかを解明する必要がある。

藤井(1996)

藤井(1996)は「ールモノダッタ」も研究の対象に入れ、「一般的傾向性」を「ものだ」の基本の意味とし、「一般的傾向性」の「提示」の用法か「修正(生成)」の用法か、また対象が過去か非過去かにより大きく5つの用法に分けられている。さらに、「ものだ」の用法の性質を表2-2のようにまとめている。

表 2-2

「ものだ」の用法の性質

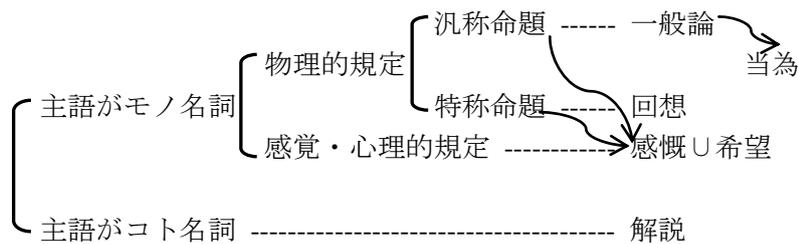
				文末の形式	主体が グループ	述語が 状态的
一般的傾向性 (の揭示)	非過去	①一般的傾向性(非過去)	ールモノダ	+	+	
	過去	②一般的傾向性(過去)	ールモノダッタ	+	+	
		③習慣・状態(過去)	ータモノダ[ッタ]	-	+	
一般的傾向性修 正(生成)	非過去	④事態(非過去)の認識	ール/ータモノダ	-	-	
	過去	⑤事態(過去)の認識	ータモノダ	-	-	

藤井(1996:60)

藤井(1996)は「説明・解説」の「ものだ」を考察の対象から外すことにしているので、「ものだ」の意味が十分に説明されたとは言えない。また、「ールモノダッタ」と「ールモノダ」は過去か非過去の区別だけあって、本質的には同じく「一般的傾向性」を表しているので、とりわけ区別する必要はないと考える。

井島(2012)

井島(2012)は統語論の立場から「ものだ」文を考察している。「ものだ」文の成立は、「 α 連体節(同一名詞連体)の構成」、「 β 名詞述語文の構成」、「 γ 異分析」、「 δ 文末辞化」という四段階の統語論的な過程を経ていると述べている。そして、「ものだ」文の「諸用法のある部分は、名詞述語文の働きである<特徴付け>の仕方の違いとして説明することができ(<一般論><回想><感慨>(の一部)<希望><解説>用法)、また別の部分は、語用論的な派生として説明できる(<当為><感慨>(の一部)用法)」とまとめている(p.120)。以上を図示したものが以下の図2-6である。



(波線は語用論的な派生関係を表す)

井島(2012:120)

図2-6 「ものだ」文の諸用法の広がり

井島(2012)は「ものだ」の諸用法の広がりを意味論的に説明したものではなく、「ものだ」文の統語論的な成立過程の中に各用法への派生の契機を見出したものである。つまり、「ものだ」の諸用法は名詞述語文から派生したものもあり、語用論的に派生したものもあるということを論じた。しかし、意味論的な意味を考慮せず、統語論と語用論のみで「ものだ」の意味機能を考察することは妥当ではないと考える。井島(2012:117)自身も「主語名詞を過去の出来事によって<特徴付ける>名詞述語文と、モノダ文の<回想>用法の間には大きな断絶がある。すなわち前者には<回想>の意味合いはなく、後者には主語名詞の<特徴付け>という意味合いはない」と指摘している。「一般論」、「解説」という用法は名詞述語文との関わりから説明できるが、「回想」、「感慨」という用法は名詞述語文との関わりから説明すると、牽強附会の感を否めない。

2.2.2.2 認知言語学の立場からの先行研究

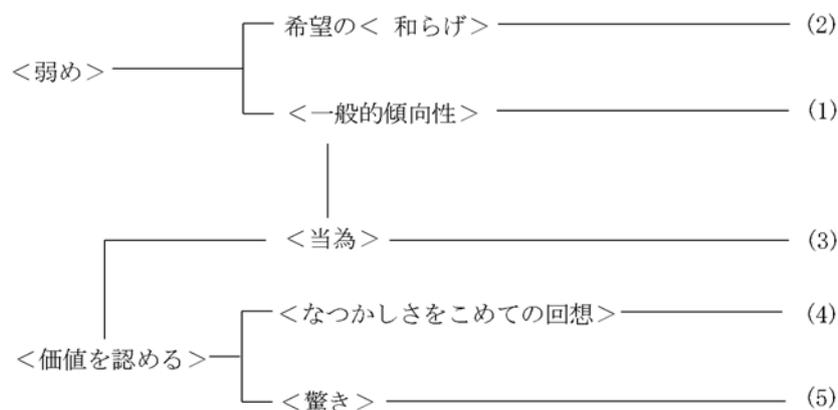
「ものだ」に関する認知言語学の立場からの先行研究は非常に少ない。靱山(1992)は「ものだ」の多義構造を考察している。

靱山(1992)

靱山(1992)は文末の「ものだ」を考察対象とし、文末の「ものだ」がどのような多義構造を成しているのかについて考察している。「ものだ」の用法を「一般的傾向性」、「希望の<和らげ>」、「当為」、「なつかしさをこめての回想」、「驚き」という五つの用法に分けて、そのうち、「一般的傾向性」と「希望の<和らげ>」は「弱め」という共通点を持ち、「当為」、「なつかしさをこめての回想」、「驚き」は「価値を認める」という共通点を持つとしている。靱山(1992)は「ものだ」を「弱め」と「価値を認める」の二つに分け、その二つをつなぐ位置を占めているのが「当為」の「ものだ」と述べて

いる。文末の「ものだ」の多義構造を以下の図2-7のようにまとめている。

文末のモノダの多義構造



梶山(1992:29)

図2-7 文末の「ものだ」の多義構造

梶山(1992)は「説明・解説」の「ものだ」⁹と他の「ものだ」との意味的関連を見出せなかった為、考察の対象から除くとしている。しかし、できる限り含めて論じるべきであろう。また、「弱め」と「価値を認める」が「ものだ」の意味として妥当かどうかも検討すべき点である。

2.2.2.3 語用論の立場からの先行研究

先行研究では、「ものだ」を助動詞とする立場に立ち、その意味と用法の詳細な記述を行うものが主流である。一方、「ものだ」を助動詞とは考えず、コンテキストと主体の認識といった語用論的条件からアプローチしているものもある。代表的な研究は揚妻(1997)、北村(2005)(2007)などがある。

揚妻(1997)

揚妻(1997:375-374)は「「ものだ」文の表現性を分かつのは主体の間主観的概念に対

⁹ 「説明・解説」の「ものだ」は以下の例のようなものを指している。
「ストラウス米大統領特使は十六日イスラエル入りし、四日間の中東訪問外交を開始する。米・イスラエル関係は最近パレスチナ開放機構の扱いなどをめぐって不協和音が目立っている。[中略] この危機を乗り切るため、タフで知られ、かつカーター大統領の信任の厚い「スーパー大使」ストラウス氏の出馬となったものだ。」(朝日新聞(解説記事)1978.8, 寺村秀夫(1984:302-303))

する認識のありかたの違いである」と述べている。具体的に主体の直接的認識に基づくものと現実界に所与的に存する概念に基づくものに分けている。「本性・当為」は主体が間主観的だと信じた概念の開陳であり、「感慨」は具体的事態を契機とした道理への主体の気付き、認識である」と述べ、これらの「ものだ」を主体の直接的認識に基づくものに分類している。また、説明の「ものだ」と推定文は現実界に所与的に存する概念を提示する文であると見なしている。さらに、推定文は「主体の信じる道理に基づく推定」であると述べ、「主体が間主観的だと信じた概念」を提示する「本性・当為」と具体的な事態の成立を受けずに発話するという点において共通していると論じている。一方、「既成事態」を提示する「説明」の「ものだ」は具体的事態成立を受けて発話するという点では「感慨」の「ものだ」に似ていると述べている。「ものだ」文の分類は以下の表2-3のようにまとめられている。

表 2-3

「ものだ」の分類

	成立済の具体的事態を受けて発話する	具体的事態の成立を受けずに発話する（できる）
主体の直接的認識の提示	感慨の「ものだ」 回想の「ものだ」	本性・当為の「ものだ」
現実界の所与性の提示	説明の「ものだ」	「ものと思われる」等

揚妻(1997:374)

揚妻(1997)は、「ものだ」の意味機能は文自体、文構造の違いによるものではなく、「連体節で表された事態を所与とみなすか、主体の認識に基づくのかの違い」によるものであると言う。そして、主体の認識は状況、場面、文脈などによるものとみなされる。

揚妻(1997)は「ものだ」の意味をすべて語用論の側面から解釈しようとするものである。しかし、「ものだ」の文構造、意味論的な意味を考慮せず、語用論的な条件のみで「ものだ」の意味機能を考察することは妥当ではないと考える。例えば、以下の例(23)(24)は文構造が明らかに異なり、それぞれ「代名詞(漬物)」「驚き」以外には解釈のしようがない。

(23) この漬物は故郷の母から送られてきたものだ。

(24) よくあんなことができるものだ。

例(24)と名詞述語文の「ものだ」との構文的な違いは否めない。「ものだ」の意味を考察する時には、文法形式の違いも考慮すべきである。

北村(2005)(2007)

北村(2001)～(2007)の一連の研究は、「ものだ」を助動詞としない立場に立ち、構文的な側面である<文機能>と語用論的な側面である<発話機能>の視点から「ものだ」文の言語的意味と語用論的解釈を考察している。

北村(2005:88)は、<文機能>の視点から、Pの意味特性およびQのアクチュアリティを手がかりに「ものだ」を分類した。その結果、「(i)Qモノダ、(ii)PガQモノダは、<文機能>として独立することができず、「発話現場」に拘束されてしか存在し得ないこと」を主張した。また「(iii)PハQモノダ(Qはアクチュアル)、(iv)PハQモノダ(Qは非アクチュアル)では、<文機能>上、(iii)は、「PとQモノを関係づける」という解釈(【イ】代用語)、(iv)は「PはQという属性を持つ」という解釈(【ハ】一般的傾向)であること」を主張した。さらに、「<文機能>上の解釈に、<発話機能>、つまり「直接経験性」および「関連性の原理」を付加し、(iv)PハQモノダ(Qは非アクチュアル)では、多くの解釈が可能であること、また、その中から解釈が一つに決まる」と述べた。

北村(2007)は、<代用語>を表す「PハQモノダ」文をふつうのコピュラ文「XハYZダ」(Xは主題、Yは連体修飾部・Zは主名詞)とし、<一般的傾向性>を表す「PハQモノダ」文を文末名詞文「XハYZダ」と捉えている。そして、北村(2007:238)は「モノダ文の多様な解釈の背景には、構造的側面としてPとQの意味特性、および、モノが何らかの「部分」を取り出すという関数的役割があること」を示し、「モノダ文の多様な解釈には、名詞述語文(コピュラ文)の一つである文末名詞文という構造的ベースと、話し手の認識といった言語外的要因が関連しているのである」と述べた。

北村(2005)は、構文的な側面と語用論的な側面から「ものだ」を考察している点で評価できる。北村(2005)は(iv)のタイプのモノダ文は<文機能>上の解釈は「一般的傾向」であると述べている。つまり、「一般的傾向」は「ものだ」の意味論的意味と認定できる。確かに、「一般的傾向」に「発話機能」を付加すると「当為」「感慨」など多くの解釈が可能である。しかし、北村(2005)の「ものだ」文の文機能の分類と認定には不適切な点がある。北村(2005)では、(iv)タイプの「ものだ」文に入っている例(25)は発話機能という語用論的条件を付加しなくても「回想」と解釈できる。また、例(25)のPの意味特性は「一般的傾向」を表す「PハQモノダ」の例(26)と異なっているので、両者は文機能上違うものであると考えられる。

(25) 私は、子供の頃、よく兄とけんかしたものだ。

北村(2005:83)

(26) 子どもはいたずらをするものだ。

北村(2005:86)

(27) この登録上のマネージャーは、内藤が練習をさせてもらっている金子ジムに、ただの一度も足を運ぶことがなかった。金子に一言の挨拶もなく、内藤の練習を一回も見にこなかった。それでよくマネージャー面ができるものだ。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

また、例(27)のような(ii)タイプの「ものだ」文は、意外な事態の存在に対する驚きを表す用法としてすでに定着されているので、文機能として独立していると考えることができる。北村(2007)は「ものだ」文の構造を文末名詞文と捉え、述語名詞「もの」が「部分の取り出し」といった関数的役割に特化したものであると論じているが、構造上Pが存在しない例(24)のような例では、「部分の取り出し」は想定しにくい。

2.2.3 「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究

奥田(2008)

奥田(2008)は、「もの」について、実質名詞としての用法から助動詞としての用法へどのように用法が拡張されていくかを考察している。「もの」の上位範疇と時間的不変性という二つの特質とこの拡張のプロセスとの関連を分析している。奥田(2008)によると、「Xは…ものだ」のある対象にある属性が存在するということを改めて認識するという性質が形式化した「ものだ」に連なっていく。「ものだ」のこういった性質が最も顕著に現れているのがある対象の本質や本性を述べる表現である。奥田(2008:23-24)は「Xは…ものだ」の対象を「ある特定の観点からのみ特徴付けようとしている点で、話し手の主観が強く現れている」と指摘し、そのことから、「ものだ」は「その対象のあるべき姿、話し手が理想と考える主張を述べる当為表現にしばしば移行する」と述べている。奥田(2008)によると、[[X]は[[<修飾語>]もの]だ]という形で図式化される構造は「説明対象—説明」という構造をもち、<修飾語>はその説明の部分に相当する。「ものだ」の助動詞化がさらに進むと、[[<修飾語>]もの]だ]という形で図式化される構造を持つようになる。この構造は一つのことから全体が<修飾語>を構成し、そのことからの存在や成立を述べるものである。「ものだ」が現在ではなく過去の事実を再確認する場合に用いられると、「回想」を表す用法になる。この場合、回想の対象となるのは必ず習慣性の行為や出来事である。また、奥田(2008)は揚妻(1991:9)の「客観的にある対象にある属性が存在するということを認識するには、観察する側でも、瞬間的で

はなくて、ある心理的な時間の長さが必要」という説明を借りて、この話し手の心理的な持続性という方向で形式化が進むと、「詠嘆」や「願望」を表す用法になり、「驚き」を表す方法も、客観的に存在する事実を対象としている点では「詠嘆」の用法に共通していると述べている。さらに、「ものだ」の前に述べられている事柄を普遍的な通念として捉えているが、普遍的通念というものは話し手が発話時に判断する以前に客観的に既定されたものである。その点で、「ものだ」は「もの」の性質と通じていると言える」と指摘した。

奥田(2008)は「もの」の上位範疇と時間的不変性という特質と「ものだ」の用法拡張のプロセスとの関連を分析しているが、意味と意味の間がどのように結ばれているか、つまり意味拡張の動機づけについて考察していない。また、「本性規定」は「当為表現」にしばしば移行するということを指摘しているが、具体的にどのように移行するか、つまり、「当為表現」となる語用論的な条件について論じていない。

2.2.4 先行研究の問題点と本研究の立場

以上、「ものだ」に関する代表的な先行研究を概観し、問題点を挙げた。文末の「ものだ」の意味に関して、これまで多くの先行研究がなされてきたが、その全体像を一貫して包括的に説明するものはまだ少ない。「解説」の「ものだ」が考察対象から外されたり、一本の軸で説明出来なかつたりする 경우가多く、「ものだ」の意味は現段階で十分に説明されているとは言えない。また、ほとんどの研究は日本語学の視点からの研究であり、認知言語学と日本語教育の視点からの研究はあまり見られない。さらに、「のだ」と同様、「ものだ」においても意味論的意味と語用論的意味を混同して記述するという問題点が存在している。そこで、本論文は日本語教育の立場に立ち、平叙文文末の助動詞の「ものだ」を研究対象とし、認知言語学と語用論の視点から「ものだ」の意味の全体像をより統一的に解明することを試みる。

第一に、「ものだ」の構文的構造の分析に基づいて、「ものだ」の意味論的意味を確認する。「ものだ」は「のだ」と異なり、主に文文法レベルで考察すれば十分であると考える。また、「ものだ」には実質名詞の「もの」の影響が存在しているので、「ものだ」文と名詞述語文の「PはQものだ」との関係を確認する必要がある。さらに、一般性を有しない「解説」の「ものだ」と名詞述語文の関係も確認すべきである。

第二に、「ものだ」の意味論的意味について、「ものだ」と名詞「もの」との意味的つながりを考慮に入れながら、認知意味論の視点から考察する。各意味を具体的に分析し、「ものだ」のプロトタイプの意味を明らかにし、意味間の拡張メカニズムと「ものだ」が有する多義構造を究明する。

第三に、「ものだ」の「当為」という語用論的意味について、認知意味論の考察と関

連させながら、話し手と聞き手が「当為」の解釈にどのように関与しているのか、「ものだ」が「当為」と解釈される語用論的な条件はどのようなものであるのかということをも究明する。また、その語用論的条件を基に、「当為」と解釈されるプロセスを明らかにする。さらに、「ものだ」文の多様な解釈に、語用論的な要因や条件がどのように関与しているのかを解明する。

2.3 「のだ」「ものだ」と中国語の対照研究

2.3.1 「のだ」と中国語の対照研究

杉村(1980)(1982)

杉村(1980)(1982)は「のだ」と「是……的」の対照研究を行っている。杉村(1982:156-162)は「是……的」は「形式的に比較対照したとき、「のだ」と意外な程の平行関係をみせる」と述べている。またその機能については、「状況解説的用法が余り発達しておらず、もっぱら特定成分の指定強調という面で活躍する」と指摘している。以下の例を見られたい。

(28) 从医院回来以后,我发现自己的衣服洗干净了。不用说,一定是丁力帮我洗的。

(29) 病院から帰ると、私の衣類はきれいに洗濯されていた。いうまでもない、丁力が私に代わって洗ってくれたのだ。

杉村(1982:170)

状況解説的「のだ」の中国語訳としては、「翻訳ものなどに当たって、見ても、状況解説的「Sのだ」と「是S的」は意外な程対応しない。状況解説的「のだ」には“是S的”から「是」的を取り去った「S」が最もよく対応し、次には「的」だけを取った「是S」である」と述べている。次の例がそれにあたる。

(30) 轟音と同時に砲口から火を吐き、モリは長い網を引いて飛んでゆく。「わっ」とあがる歓声。モリはみごとに鯨の心臓に命中したのだ。

(31) 突然掀起了欢呼。鱼镖准确准确地打中了鲸鱼的心脏。

杉村(1982:166)

杉村(1980)(1982)では「のだ」と「是……的」は形式面では平行関係であると指摘したが、「のだ」の状況解説的用法についての中国語との対照には残された部分がある。「是……的」文には、以下の例(32)のように「特定成分の指定強調」ではなく、肯定の

語気を表すものもある。

- (32) 相手に責任を背負わせるとか、遠い先の約束をするとか、そんな風に相手を束縛するようなことは一切していない、お互いに完全に自由なんだ、決して変なごたごたなんか起しやしないから、安心してくれ。

(石川達三『青春の蹉跎』)

- (33) 不要对方负什么责任，也没有许下过什么诺言，总之不能束缚对方，互相之间都是完全自由的，决不会发生纠纷，你尽管放心好了。”

(石川达三《青春的蹉跎》)

また、状況解説の「のだ」と「是……」の文との対照は行われていない。さらに、「のだ」の他の用法に対応する中国語にはどのようなものがあるのかについても言及されていない。

野田(1997)

野田(1997:233-234)は、杉村(1980)(1982)の論述を受けて「ムードの「のだ」に対応する中国語の形式はなく、スコープの「のだ」には“是……的”が対応するということになる」と述べている。

- (34) 男のくせに私、めちゃめちゃ泣いちゃってたから、くそ寒いのにタクシーに乗れないのよ。男ってもういやだってその時、初めて思ったのかもね。

- (35) 我哭了、一个大男人呜呜地哭了、严寒中、没有勇气乘计程车。恐怕、我是在那时候开始讨厌做男人的吧！

野田(1997:234)

また、スコープの「のだ」には「是……的」が対応するという点についてはもう少し考察が必要だと指摘し、スコープの「のだ」が(37)のような例では「是……」だけに対応していると述べている。

- (36) 彼はいつもその雰囲気や表情にある種の透明感を持っていた。だから、こんなにはかなく心もとなく感じるのだらうと私はずっと思っていたが、もしそれが予感だったとしたらなんと切ないことであろうか。

- (37) 在这种气氛和表情之中，他会给人一种透明的感觉。就是这种透明感，令我一直

担心、不安。假若、这就是一种预感的话、那是多么无奈啊。

野田(1997:234)

野田(1997)は杉村の指摘に従って、ムードの「のだ」に対応する中国語の形式はなく、スコープの「のだ」には“是……的”に対応すると述べているが、スコープの「のだ」がある例では「是」だけに対応するとも述べている。しかし、事実を指摘するにとどまっておろ、なぜ「のだ」が「是」だけに対応するのかを説明していない。

王(1997)

王(1997)は構文と意味の側面から「のだ」と「是……(的)」を考察した。その結果、「ののだ」と「是……(的)」の間には対応する部分も見られるが、対応しない部分が多い。具体的にいえば「焦点のとりたて(スコープ)」という意味関係で対応する例が比較的多い。また因果関係という意味構造で、しかも文構造が比較的に単純な場合も対応する例が見られるが、複数の構文を関連づけるという用法では、基本的に対応していない。そのほか、説明口調を伴っている点で両者の共通点が見られるが、その説明は、何に基づいて展開されているかという点で、両者に違いがあるようである」と述べている(p. 210)。また、「ののだ」と「是……(的)」は構文的にもすべて対応していない。さらに、たとえ同じ文脈と構文条件でも、中国語と日本語にそれぞれ複数の表現手段を持っているので、実際の表現で対応しない可能性もある」と指摘している(p. 210)。

王(1997)は「特定成分の指定強調」の「是……(的)」だけではなく、肯定の語気を表す「是……(的)」と「のだ」との対照も行ったが、「のだ」に対応する他の中国語形式については言及していない。

井上(2003)

井上(2003)は「のだ」文と“的”構文の対照研究を行い、この二つの構文の類似点と相違点を分析したうえで、両文の基本的相違は「二つの事態の関係づけ」と「一つの事態の内容限定」であるということ指摘し、この相違の背景と相違点に関連する「テンスの有無」の問題に触れている。二つの構文の類似点として三つ挙げている(p. 265)。

類似点1:「のだ」文と“的”構文で用いられている「の」と“的”は、いずれも「名詞化」と関係する形式である。

類似点2:「のだ」文と“的”構文は、いずれも「既定事項の存在を受けて、それに対する解説を述べる」という性質(承前性)を有する。

類似点3:「のだ」文と“的”構文は、いずれも述語以外の要素を主張の焦点とする場合に用いられることが多い。

また、「のだ」文と“的”構文は、本質的な部分で異なる四つの性質を持つと述べている(pp. 266-267)。

相違点1: “的”構文は、アスペクト接辞や否定辞“没”を伴わない、動量語や様態描写的な連用修飾語が生じにくいなど、文内部に生起可能な要素にかんがりの制限がある。「のだ」文にこのような制限はない。

相違点2: 「のだ」文は、程度の差はあれ「実情の披瀝」というニュアンスを有するが、“的”構文にはそのようなニュアンスがないことも多い

相違点3: 原因・理由を問う文は、日本語では通常「のだ」文になるが、中国語では“的”構文を用いる必要はない。

相違点4: “的”構文の解説対象は「既然の事態」に限られるが、「のだ」文の解説対象は文脈上「既定事項」扱いされる事態であれば、既然の事態でも既定の予定でもよい。

井上(2003)は「のだ」と「是……的」の共通点と相違点を詳しく分析しているが、杉村の研究と同様、「特定成分の指定強調」の「是……的」のみ考察している。また、「のだ」に対応する他の中国語形式についても言及していない。

2.3.2 「ものだ」と中国語の対照研究

前項で見たように、「のだ」と中国語との対照研究は行われてはいるが未だに数が少ない。それに対し、「ものだ」と中国語との対照研究は見当たらない。

2.4 本研究の立場

以上「のだ」「ものだ」に関する代表的な先行研究と「のだ」「ものだ」と中国語の先行研究を概観し、その問題点を挙げた。「のだ」と「ものだ」に関して、これまで多くの先行研究が行われてきたが、多種多様な「のだ」「ものだ」の意味と機能を統一的に記述できるものは少ない。以下では、先行研究に見られる共通の問題点をまとめる。また、こういった問題点を解決するために、本論文の立場と考察をすすめる時に考慮に入れる点について詳述する。

第一に、研究の視点がやや狭いことが挙げられる。今までの先行研究は日本語学の視

点からのものが多い。認知言語学の視点からの研究は、管見の限りほとんど行われていなかった。また、日本語教育の立場からの考察が少ないため、日本語学習者は具体的なイメージをつかみにくく、日本語学の視点からの研究をそのまま日本語教育へ応用することは難しい。日本語教育の立場からみると、多義語の意味を教えるにあたり、意味と意味の間がどのように関連しているかを学習者に理解させることができれば、全体の意味ネットワークの理解と意味習得に役に立つのではないかと考える。そこで本論文は、多様な言語現象の本質を人間の一般的な認知との関わりから解明する認知言語学を援用し、「のだ」「ものだ」の意味論的意味について考察する。「のだ」「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、各意味間の拡張プロセスを考察した上で、「のだ」「ものだ」が有する複数の意味の拡張ネットワークの構造を究明する。「のだ」「ものだ」の多義構造を明らかにすることで、日本語学習者にとって理解・把握しやすい「のだ」「ものだ」の意味記述を行う。

第二に研究の視点の混同の問題が挙げられよう。文法の視点からの先行研究には「のだ」「ものだ」の意味論的意味と語用論的意味を区別せずに記述しているものがある。特に「のだ」の意味に関しては拡大解釈している傾向がみられる。一方、語用論の立場からの先行研究には、文構造、意味論的な意味を考慮せず、語用論の原理、語用論的な条件のみで「のだ」「ものだ」の意味機能を考察するものもある。「のだ」「ものだ」の解釈には語用論的要因が関与しているため、「のだ」「ものだ」の意味論的意味と語用論的意味を明確に区別する上で、考察する必要があると考える。本論文では、意味論的意味を考察するにあたり、「のだ」「ものだ」の構文的構造の分析、名詞述語文との関係を考慮に入れる。また、「のだ」「ものだ」の語用論的意味については、認知意味論の考察と関連させながら、どのような語用論的な要因や条件、状況と結びついてその意味、ニュアンスが生じてくるかを究明する。また、語用論的条件を基に意味解釈のプロセスを明らかにする。

第三に、「のだ」と外国語との対照研究に対する関心が高まっているにも関わらず、「のだ」「ものだ」と中国語との対照研究は未だ数少ないという現状がある。とくに、「ものだ」と中国語との対照研究は皆無と言えるほどの状態である。また、「のだ」と中国語との対照研究は「是……的」との対照に限定して行われているものが多く、「のだ」に対応する中国語の全貌はまだ明らかにされていない。そこで本論文は、「のだ」「ものだ」に対応する中国語にはどのような形式があるのか、どのような傾向性を表しているのかを明らかにする。また、「のだ」「ものだ」に対応する中国語が表している語気を分析し、それぞれどのような対応関係をなしているのかについて考察する。

2.5 まとめ

本章では、先行研究の概観を行い、本研究の位置づけについて詳述した。まず2.1では、「のだ」に関する先行研究をまとめた。具体的には、「のだ」の品詞についての先行研究、文法の観点、語用論の立場、日本語教育の立場、認知言語学の立場からの先行研究に分け、それぞれの内容をまとめ、問題点を指摘した。次に2.2では、「ものだ」に関する先行研究を整理した。具体的には、「もの」に関する先行研究、「ものだ」に関する先行研究、「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究の三つに分け、文法、認知言語学、語用論の観点からの先行研究を整理し、問題点を指摘した。2.3では、「のだ」「ものだ」と中国語の対照研究の概観を行った。最後に、それぞれの先行研究の問題点をまとめた上で、本研究の位置づけを述べた。

第3章 理論的枠組みとデータ

Lakoff and Johnson(1980)の *Metaphors We Live By* の中で提示されたメタファーとメトニミーに関する研究を皮切りに、比喩が従来のレトリック表現の領域から、認知言語学の領域の中心課題として取り上げられ、意味拡張のプロセスとして認められるようになってきている。認知意味論では、多義語の様々な意味はプロトタイプの意味を中心にネットワークを構成されると理解されている。意味拡張を生じさせるものとして、メタファー、メトニミー、シネクドキーという三種類の比喩が上げられる。この三種類の比喩はそれぞれ認知的基盤となる人間が有する認知能力に基づいて成り立っている。本研究では、認知言語学の理論的枠組みをもとに、データの分類、分析を行う。

本章では、本研究において使用する理論的枠組み、研究方法および研究データについて詳述する。3.1では、本研究の研究方法の基盤である認知言語学の理論及び理論的枠組み、基本的な用語・概念について記述する。3.2では、本研究で使用した研究データの内容、収集方法、分類・分析方法について述べる。3.3は本章のまとめである。

3.1 理論的枠組みおよび基本的な用語・概念

従来の認知意味論の研究者たちの「意味」に関する観点には共通項目があった。それは、「①意味を言語使用者の外界認知の産物として捉える、②言語的意味と百科事典的知識の無理な区別をしない、③意味に経験などからの動機づけを求める」(松本2003:3)、というものである。本節では、この認知言語学の基本的な考え方にに基づき、本研究の理論的枠組みなどを記述する。

3.1.1 プロトタイプの意味の認定

認知意味論における語の意味記述に用いられる基本的な概念に、プロトタイプがある。多義語の様々な意味は、プロトタイプの意味を中心に一つのカテゴリーを構成していると考えられるものである。プロトタイプに基づく意味論は広く認められている。このプロトタイプ意味論では、「ある意味カテゴリーに属する成員は均等ではなく、その中には典型的なケースと周辺的なケースがあることを認め、その典型的なケースに注目して記述を行う」(松本2003:30)。二つ以上の意味を持つ多義語を分析する際には、まず、このプロトタイプの意味、あるいは中心義の認定を行わなければならない。プロトタイプの

意味、あるいは中心義の認定方法はこれまでの多義性研究で多数提案されている。

プロトタイプの意味に関して、靱山(2000:182)では、「複数の意味の中で、最も確立されていて、認知的際立ちが高く、また、最初に習得され、中立的なコンテキストで最も活性化されやすいといった特徴を有するものをプロトタイプと言う。」¹⁰と規定されている。

また、靱山・深田(松本編 2003:141)は、「複数の意味のなかで、最も基本的であり、慣習化の程度・認知的際立ちが高いといった特徴を備えたものをプロトタイプの意味と認定することになる」という認定方法を提案している。

さらに、中心義の設定について、瀬戸(楠見編 2007:47)は、中心義を「共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である」と規定している。中心義の特徴については、

中心義は、文字通りで、母語話者の頭の中で中心的であると想定される意義である。つまり、ほかの意義を理解する上での前提となり、具体性(身体性)が高く、認知されやすく、想起されやすく、用法上の制約を受けにくい、それゆえ、意義展開の起点(接点)となることがもっとも多い意義である。

瀬戸(楠見編 2007:47)

と記述している。また、補充的に「おそらく中心義は、言語習得の早い段階で獲得される意義でもある。頻度は高いことが多いが、必ずしももっとも頻度が高い意義と一致するわけではない。派生的、比喩的な意義の方が頻度が高いこともあるだろう。しかし、派生的、比喩的な意義は、あくまでも中心義との関連の中で理解されるべきである。「用法上の制約を受けにくい」という点は、中心義に対する派生義の方が、コロケーションによる制約や統語上の制約などを受けやすい傾向があることと関連する」と述べている。

松本(2009:89)では、多義語の中心的意味は「概念的中心性」と「機能的中心性」という二種類の中心性を持つと考えている。まず「概念的中心性」は、「言語話者の概念化の観点からすれば、心的辞書の多義語の構造において、他の個別の意味の派生の基盤となるような、概念的に最も基本的な意味を中心に据え」、「カテゴリーの構成のためには有益」である。一方「機能的中心性」は、「言語話者の伝達活動の観点からすれば、一番よくアクセスする意味を中心に据え」、「伝達活動のためには有益」である。またこの二種類の中心性について、「この二つは常に同一の意味が担うとは限らず、それが「中心的意味らしさ」を決めていると考える。両者を兼ね備えた意味が典型的な中心的意味(中心的意味らしい中心的意味)であり、一方の中心性のみを持つなら非典型的な

¹⁰ 靱山(2000)のプロトタイプの意味の認定方法はLangacker(1987, 1988a, 1988b)の考えに基づいている。

中心的意味である」と論じている。

その上で、松本(2009:93)は、瀬戸(2007)を参照し、瀬戸(2007)で挙げられた中心的意味の特徴はこの二つの中心性に集約されると判断している。まず、概念的中心性は瀬戸(2007)の「意味展開の起点(接点)となるかどうか」に対応するとした。さらに、「そのような中心的意味の特徴として、(i)文字通りの意味である、(ii)関連する他の意味を理解する上での前提となる、(iii)具体性(身体性)を持つ、(iv)認知されやすい、がある」と考えた。また、機能的中心性は、瀬戸(2007)の「想起されやすい」に対応するとし、その特徴として「使用頻度が高い、用法上の制約を受けにくい」があると考えた。

本研究は、以上のプロトタイプの意味、あるいは中心義の認定方法を参考にして、「のだ」「ものだ」のプロトタイプの意味を認定する。また、プロトタイプの意味を認定する際に、瀬戸(楠見編 2007:47)で述べられた「中心義とみなされるものがつねにすべて備えていなければならないものではない。典型性(Prototypicality)という考え方が当てはまり、上記の特徴を数多く備えるものが典型的な中心義とみなせる」という方法を用いる。

3.1.2 周辺の意味の認定と意味拡張

多義語のプロトタイプの意味を確定した後には、周辺の意味の認定と意味拡張のプロセス、多義構造の究明が必然的に課題となってくる。

梶山・深田(松本編 2003:140-141)では、多義語分析の課題について、以下の三つが挙げられている。

- ①プロトタイプの意味の認定
- ②複数の意味の相互関係の明示
- ③複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

梶山・深田(松本編 2003:141)は、多義語の定義から必然的に②の課題が導き出されると述べている。「意味の拡張を生じさせる比喻の重要な下位類として、メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喻が認められる」、「この3種の比喻は多義語の複数の意味を関連付ける重要なメカニズムである」と論じている。また、③の課題は②をさらに発展させたもので、「つまり、多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、多義構造全体における個々の意味の位置づけを明示することなどが課題となる」と説明している。

瀬戸(楠見編 2007:46-56)では、多義語を体系的に記述するという方針を実現するた

めに、新たに次の四つの問題を設定して検討を進めた。

- (i) 中心義の設定
- (ii) 各意義の設定
- (iii) 各意義の関連
- (iv) 各意義の配列

(ii)各意義の設定について、「まず、何をもってひとつの意義と見なすかが大きな問題である」と述べ、これについて、瀬戸(2001:10)で述べたものを再提示している。「意義の認定には、2つの逆方向の注意がいる。(i)一つの意義のなかに明らかに領域(domain)が異なるものを混在させてはならない、(ii)単なる文脈のゆれ(contextual fluctuation)にすぎないものを別の意義と認定してはならない。(i)は意義を分割する方向を示し、(ii)は統合する方向を示す」というように、各意義を認定する際に、注意すべき2つの逆方向性を示している。さらに続けて、意義Aと意義Bを別義と区別する基準として「メタファー・メトニミー・シネクドキによる意味の切り分け」という方法を提案した。具体的には、「メタファー的な意味展開があるもの、メトニミー的な意味展開があるもの、シネクドキ的な意味展開があるものを別義として扱う。逆に、そのような意味展開がないものは同義としてまとめる」と説明している。

また、(iii)各意義の関連について、メタファー・メトニミー・シネクドキのどれかひとつによって関連付けられる各意味は、「それぞれの元に下位類を設定することによって、必要十分な多義展開のパタン(これを意義展開パタンと呼ぶ)を定めなければならない」と強調している。メタファーの下位類として「形態類似、特性類似、機能類似」の3種、メトニミーの下位類として大別で「空間隣接、時間隣接、特性隣接」の3種、シネクドキの下位類として「類で種、種で類」の2種に分かれている。具体的な意義展開のパタン一覧は以下の表3-1に示される。

表 3-1

意義展開パタン一覧

メタファー	
形態類似	neck(首→ビンの首)
特性類似	empty(〈入れ物が〉空の→〈人生が〉空の)
機能類似	sponge(〈水を〉吸い取る→〈金を〉吸い取る)
シネクドキ	
類で種	drink(〈飲み物を〉飲む→〈酒を〉飲む)
種で類	ship(〈荷を〉船で送る→〈荷を〉送る)
メトニミー	

空間	全体で部分	eye(目→瞳)
	部分で全体	longhair(長髪→長髪の人)
	入れ物で中身	bottle(ビン→中身)
	中身で入れ物	trash(ゴミ→ゴミ箱)
	図地反転	empty(〈入れ物を〉空にする→〈中身を〉空ける)
	空間隣接	red cap(赤い帽子→赤帽)
時間	全体で部分	banquet(祝宴→ご馳走)
	部分で全体	breathe(息をする→息をして生きている)
	共起	dance(ダンス→ダンス音楽)
	原因でプロセス	cause(原因→〈物事を〉引き起こす)
	プロセスで原因	headache(頭痛→頭痛の種)
	プロセスで結果	purchase(購入→購入品)
	結果でプロセス	mark(評価点→採点する)
	原因で結果	heal(治す→治る)
	結果で原因	thaw(解ける→解かす)
	行為者でプロセス	author(著者→著作する)
	プロセスで行為者	guard(見張る→見張る人)
	道具でプロセス	hammer(金槌→金槌で打つ)
	プロセスで道具	wrap(包装する→ラップ)
	素材でプロセス	paint(塗料→塗料を塗る)
	プロセスで素材	injection(注射→注射液)
	場所でプロセス	bag(袋→袋に入れる)
	プロセスで場所	walk(歩く→歩道)
	対象でプロセス	dust(埃→埃を払う)
	プロセスで対象	date(デート→デートの相手)
	行為者で結果	Shakespeare(シェイクスピア→その作品)
	結果で行為者	victory(勝利→勝利の女神)
	道具で結果	knife(ナイフ→ナイフの傷)
	結果で道具	shade(陰→ブラインド)
	素材で結果	wool(羊毛→毛織物)
	結果で素材	gloss(光沢→リップグロス)
	場所で結果	china(中国→陶磁器)
	結果で場所	(該当例なし)
特性	特性でもの	beauty(美→美人)
	もので特性	orange(オレンジ→オレンジ色)

瀬戸(楠見編 2007:51)

最後に、(iv) 各意義の配列について、動詞 crawl を実例として、紙媒体で多義を記述する方法を提案している。

本論文は、以上の先行研究の各意味の認定方法を参照しながら、多義語の周辺的意味を設定する。また、意味拡張のプロセスとしてのメタファー、メトニミー、シネクドキ

一という 3 種類の比喩を靱山・深田(松本編 2003:76-83)に従い、以下のように定義する。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。

また、各意味の関連を分析するにあたって、瀬戸(楠見編 2007:51)の意義展開のパターン(表 3-2)と靱山・深田(松本編 2003:76-83)の定義を参考にしながら、各意味間の拡張プロセスを究明する。

3.1.3 複数の意味の統括モデル

複数の意味を統括するモデルの代表的なものとして、Langacker(1987:Ch. 10, Ch. 11)の提示する「ネットワーク・モデル」と瀬戸(楠見編 2007:41-43)の提案する「意味ネットワーク」がある。

ここでは、Langacker(1987)の「ネットワーク・モデル」の定義を河上(1996:51-52)、靱山(2000:178-180)を基に記述する。ネットワーク・モデルでは、「スキーマ関係」(実線の矢印によって示される)と「拡張関係」(破線の矢印によって示される)という二つの基本的なタイプのカテゴリー化によって、カテゴリーの成員が関連付けられる。以下の図 3-1 で示す。

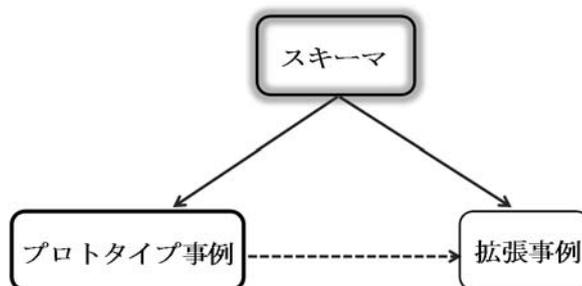
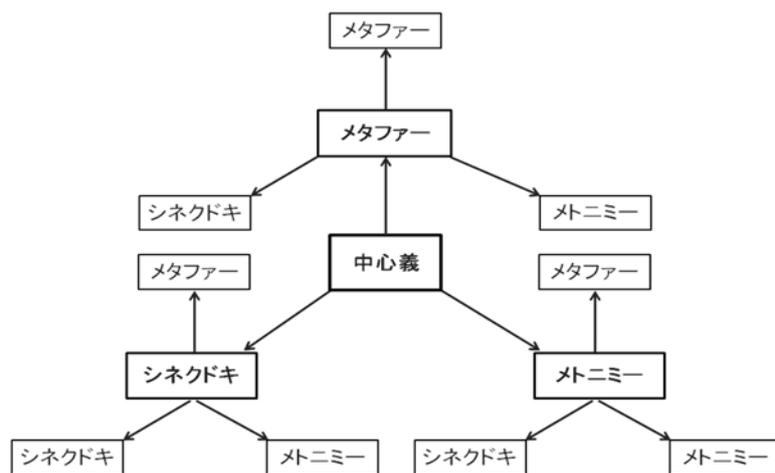


図 3-1 ネットワーク・モデル

スキーマ関係では、[X]、[Y]をそれぞれ多義語の確立した意味とした場合、[[X]→[Y]]と示され、[Y]が[X]を詳細化したものあるいは具体化したものであると捉える。この関係は意味上の「特殊化」あるいはその逆の「抽象化」の関係である。スキーマ関係は上記の3種類の比喩のシネクドキに相当する。一方、拡張関係は[[X]→[Y]]と示され、拡張された意味では、(基本的)意味[X]のある意味特徴が保留あるいは変更される。この拡張関係は3種類の比喩のメタファーに相当する。ここでのスキーマとは、それが規定するカテゴリーの全ての成員に完全に適合する抽象的な意味規定である。ネットワークにおいて、一部の成員に対するスキーマを「局所的スキーマ」と言う。また、ネットワークにおける最も抽象的な意味であり、他のすべての成員はその意味を具体化したものである場合、その意味を「スーパースキーマ」と言う。ネットワーク・モデルはプロトタイプ理論とスキーマによるカテゴリー化を統合したものである。

瀬戸(楠見編 2007:41-42)は「意味ネットワーク」について、「意味ネットワークは、中心義を出発点として、そこからメタファー・メトニミー・シネクドキの経路を通して意義が展開する」と述べている。つまり、中心義から、メタファー・メトニミー・シネクドキのどれかに拡張し、また拡張された意味から再び3種類の比喩のどれかに拡張する。このようにして、全体の意味ネットワークは複雑化する。「意味ネットワーク」を次の図3-2で示す。



瀬戸(楠見編 2007:41)

図3-2 意味ネットワーク

「のだ」、「ものだ」の多義構造記述を行うために、本論文は以上の複数の意味を統括するモデルを参考にして、「のだ」、「ものだ」の多義構造を分析する。

3.2 研究データ

3.2.1 データの内容

「のだ」「ものだ」は話し言葉で用いられるだけでなく、書き言葉でも頻繁に使われている。本論文の研究データは書き言葉と話し言葉の両方を含む文学作品の電子化されたテキストを利用した。

本論文の分析対象となるデータは、文学作品『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』（新潮社版）及び『中日対訳コーパス』（中国北京日本語学研究センター作成）という電子化されたテキストから抽出した肯定平叙文文末の助動詞の「のだ」「ものだ」の実例である。一部、必要に応じて作例と新聞より収集した実例も用いる。

本論文の各章で使用した研究データの内訳は以下の表 3-2 に示す。

表 3-2

各章の研究データの構成

章	データの内訳
第 4 章	『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の 18 冊
第 5 章	『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の 55 冊
第 6 章	『中日対訳コーパス』の日本小説 11 篇及びその訳本 11 篇

第 4 章では、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の翻訳作品 33 冊を除き、残り 67 冊の小説から主に 1920 年代以降の代表的なもの¹¹を 18 冊選び、そのテキストを「のだ」の検索対象とした。「ものだ」の使用頻度は「のだ」より低いため、第 5 章では、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の翻訳作品以外の 67 冊の小説から主に 1920 年代以降の代表的なものを 55 冊選び、そのテキストを「ものだ」の検索対象とした。第 6 章では、『中日対訳コーパス』の日本文学作品 22 冊から主に 1920 年代以降の代表的なものを 11 冊選び、そのテキストを「のだ」「ものだ」の検索対象とした。

3.2.2 データの検索・選定方法

第 4 章では、「のだ」の肯定平叙文文末の変異形即ち、「のだ」、「んだ」、「のです」、「んです」、「のである」、「のであります」などをキーワードとして、『CD-ROM 版新潮文

¹¹ 現在から遡って 100 年を目安に、1920 年代以降のものを主に選んでいる。更に、例文として本論で提示する際には、可能な限り現在に近いものを選んでいる。明治・大正期と 1920 年代以降の作品の表現方法が大きく異なるというわけではなく、恣意的に境界を引いた。一般的に知名度が高いと思われる作品（教科書に掲載されている等）を選んでいる。

庫の 100 冊』の 18 冊の小説のテキストで検索する。抽出されたデータから、「ものだ」、「進んだ」、「ものです」、「たいへんです」などのような「のだ」に属しない用例を除き、最終的に選定された「のだ」の例は 5793 例であった。

第 5 章では、「ものだ」の肯定平叙文文末の変異形即ち、「ものだ」、「もんだ」、「ものです」、「もんです」、「ものである」、「ものであります」などをキーワードとして、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の 55 冊の小説のテキストで検索する。抽出されたデータから、「おくりものだ」「それは私のものです」などのような「名詞のもの+だ」の用法と「それから、このアサリは、この先の、女優の花木由香さんの別荘の下の砂浜で太郎が掘って来たものだ」のような「代名詞的な用法」を除き、最終的に選定された「ものだ」の例は 1146 例であった。

第 6 章では、第 4 章と第 5 章と同じ検索方法と選定方法を利用し、『中日対訳コーパス』の日本小説 11 篇のテキストから、「のだ」を 3256 例、「ものだ」を 171 例選定した。

3.2.3 データの分類・分析方法

第 4 章と第 5 章では、まず、「のだ」と「ものだ」の辞書的意味を参照しながら、抽出した実例それぞれの意味項目を確定する。次に、プロトタイプの意味の認定基準に基づき、「のだ」と「ものだ」のプロトタイプの意味を認定する。さらに、周辺的な意味を確定し、意味拡張のプロセスを確定する上で、「のだ」と「ものだ」が有する複数の意味を関連づけるメカニズムを解明する。最後に、「のだ」と「ものだ」の語用論的意味、機能について考察する。

第 6 章では、まず、第 4 章と第 5 章と同じ分類・分析方法で「のだ」と「ものだ」をプロトタイプの意味、拡張義に分類し、それが対応する中国語がどのようなものになっているかをまとめ、分析する。

3.3 まとめ

本章では、本研究において使用する理論的枠組み、研究方法および研究データについて述べた。まず第 1 節では、本研究で用いる理論的枠組み、プロトタイプの意味、周辺的な意味の認定方法、意味拡張のプロセスと定義、複数の意味を統括するモデルについて述べた。第 2 節では、本研究で使用した研究データの内容、収集方法、分類・分析方法について述べた。本論文の第 4 章では、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の 18 冊の作品を用いて、認知意味論・語用論の視点から「のだ」の意味と機能を考察する。第 5 章では、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』の 55 冊の作品を用いて、認知意味論・語用論の

視点から「ものだ」の意味と機能を考察する。第6章では、『中日対訳コーパス』の11冊の日本文学作品を用いて、「のだ」「ものだ」に対応する中国語及び中国語の語気体系について分析する。

第4章 「のだ」の意味の認知言語学的・語用論的考察

本章では、肯定平叙文文末の助動詞「のだ」を対象とし、認知言語学と語用論の観点から援用しながら、「のだ」の意味について考察する。まず、4.1では「のだ」の意味論的意味について、認知言語学の理論的枠組に基づいて、多義構造を分析する。次に、4.2では「のだ」の語用論的意味について考察し、「命令」「決意」などの意味と解釈される語用論的な条件を究明する。4.3では、「のだ」が終助詞と共起する際の機能について詳述する。4.4は本章のまとめである。

4.1 文末の「のだ」の多義構造

本節では、まず4.1.1で「のだ」の文と名詞述語文との関係を確認し、「のだ」の文の構造を明らかにする。次に4.1.2で、国語辞典における「のだ」の意味の記述を確認する。その後、4.1.3～4.1.9では、「のだ」のプロトタイプ的意味と各拡張義を記述し、各意味の相互関係についても考察した上で、「のだ」の複数の意味をネットワークとして示す。

4.1.1 文末の「のだ」の文と名詞述語文との関係

「のだ」は一語化した助動詞であるが、その組成からみると、先行する部分を体言化(名詞化)する機能を持つ準体助詞の「の」に、断定を表す助動詞「だ」のついた形である。この組成から、「のだ」は文を名詞述語文に準じる形に変える性質を持っていると考えられる。このことから、「のだ」の意味を考察する前に、まず「のだ」の文と名詞述語文との関係を確認する必要がある。

寺村(1984:307)は、「PはQノダ」という文型は、基本的には、典型的な題述文「XはYだ」という文型と同じものだといってよいだろう」と述べ、次の(1)(2)を例として挙げている。

(1) アノ音は何ダ？

- アレは鳩ノ啼キ声デス
- アレは鳩ガ啼イテイル声デス
- アレは鳩ガ啼イテイルノデス

(寺村 1984:307-308)

(2) (刑事が容疑者のシャツに血痕がついているのを見つけて)

コレ(コノ血)ハ何ダ?

——コレは自分ノ鼻血デスヨ

——鼻血ガツイタンデスヨ

(寺村 1984:308)

寺村(1984)は、例(1)は音の正体¹²を示したものであり、例(2)は血のついた原因を説明しているとする。そして、「のだ」の文と題述文の違いとして、題述文のYの部分、ふつうは名詞であるのに対し、「のだ」の文のQの部分は節、ないしは動詞、形容詞、または名詞+ダという形になると述べている。以下の例を見てみよう。

(3) (外デ音ガスル。) アレは鳩ノ啼キ声デス

X Y

(4) 外デ音ガスルノは鳩ガ啼イテイルノデス

P Q

(5) 外デ音ガスル。 アレは鳩ガ啼イテイルノデス

P Q

(6) 外デ音ガスル。 鳩ガ啼イテイルノデス

P Q

(7) (外デ音ガスル。) 鳩ガ啼イテイルノデス

P Q

以上の例の述語の部分(Y、Q)を見ると、Yが名詞であるのに対して、「のだ」文のQは一文の形をとっていることがわかる。題述文とは主題—解説型の文で、その叙述部(Y)が題目部(X)を説明する関係にある。例(3)のような題述文においては、Xが指示している対象が何であるか、つまりその名前、正体などをYで説明している。一方、「のだ」の文は、述語を中心とする一つの「事象¹³(Q)」が題述文の叙述部(Y)の部分に現れている。「のだ」の文の主題部Pは、例(4)(5)(6)のように「外デ音ガスル」と言語化されているものもあるが、例(7)のように、言語化されずに「外デ音ガスルという状況」として背景化されているものも存在する。寺村が指摘したように、

¹² 例(1)の「のだ」文は音が聞こえてくる事情を説明しているとも言える。

¹³ 「ある事情のもとで、表面に現れた事柄。現実の出来事。現象。」(『大辞泉』上巻 p. 1595)

Pは、外見的には「音」「血」という名詞であるが、質問者がそれによって指しているのは、ある(聞きなれない)音がきこえてくる、その状況、シャツに不審な血痕がついている、その状況、つまり、いずれも「こと」を指していると考えるべきである。

寺村(1984:309)

すなわち、「のだ」の文の主題部Pは「事象」を指しているのである。したがって、「のだ」の文は叙述部(Q)の「事象」で主題部(P)の「事象」を説明しているということになる。例(1)(2)及び例(4)～(7)の「のだ」の文は、Pという事態、発話、状況について、その由来、原因、事情などをQで説明している。実例を見ると、例(4)(5)のような「外デ音ガスルノ」「アレ」など言語化された主題Pが「は」によって提示されている文は数が少ない。多くの文は、例(6)(7)のようにPが言語化されている先行文脈、あるいは言語化されていない状況で、「P。Qのだ。」という形で現れる。

「のだ」の文の「主題－解説」の構造は基本的に名詞述語文と共通している。「説明」という意味は先行する部分を体言化(名詞化)する機能から生じたものである。以上の例からわかるように、「のだ」による「主題－解説」の関係は、文内だけではなく、文脈あるいは状況との関係を考慮しながら分析していかなければならない。「のだ」を文文法レベルとテキスト文法レベルから考察しなければならないのは、この構文的特徴によるものである。さらに、「説明」で記述しきれない「のだ」の意味と用法も多数ある。ここでは、「のだ」の文と名詞述語文との関係の確認にとどめ、詳細は後の章でまた述べる。

4.1.2 国語辞典の「のだ」についての記述

次に、「のだ」の多義構造を分析する前に、まず国語辞典における「のだ」の意味の記述を確認しておく。本研究は、総合的な国語辞典から代表的なものを8冊選定し、「のだ」の意味記述を調べた。詳細は以下の表4-1にまとめる。

表4-1

辞典における「のだ」の意味記述

出典	「のだ」の意味記述
『国語辞典』第三版 集英社	のだ[助動詞]形動型 ①反省的、関係的な判断を表す。

<p>(2012:p. 1406)</p>	<p>㊦反省的に説明づける関係を表す。説明されるべき一つの事柄を主語とし、あるいはその前文にもち、それに対して述語となる形をとる。</p> <p>①事柄の确实さを強調し、また、人にそれを確言する。</p> <p>㊧一つの事柄の、行為を主張する。対自的には決意、対他的には命令を意味する。</p> <p>②未然形に推量の助動詞「う」の下接した「のだろう」「のでしょう」は、疑問の昇調イントネーションを伴って用いられたとき、相手に確認を求める意を構成する。</p>
<p>『大辞泉』第二版下巻 小学館 の・だ(2012:p. 2824) の・です(2012:p. 2827)</p>	<p>の・だ【連語】《準体助詞「の」+断定の助動詞「だ」》</p> <p>①理由や根拠を強調した断定の意を表す。</p> <p>②話し手の決意、または相手に対する要求・詰問の意を表す。</p> <p>③事柄のようすやあり方を強調して説明する意を表す。</p> <p>の・です【連語】《準体助詞「の」+断定の助動詞「です」》「のだ」の意の丁寧な表現。</p> <p>①理由や根拠を強調した断定の意を表す。</p> <p>②(「のですか」の形で)相手に対する要求・詰問の意を表す。</p> <p>③(多く「のでした」の形で)事柄のようすやあり方を強調して説明する意を表す。</p>
<p>『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店 (2010:p. 1361)</p>	<p>の-・だ【連語】</p> <p>①前に述べたことやその場の状況の原因・理由・帰結などを、解き明かすような気持ちで提示する。言い切りの形には断定の気持ちがこもる。</p> <p>②次に述べることの原因・前提などを表す。</p> <p>③強い主張を表す。</p> <p>④《意志的な動作を表す動詞に付いて》決意・命令を表す。</p> <p>⑤《疑問詞とともに使い、下降のイントネーションを伴って》強く詰問する気持ちを表す。</p> <p>⑥《「……だった」の形で》㊦過去のことを詠嘆的に表す。㊧悔やむ気持ちを表す。…しておけばよかった。</p>
<p>『日本国語大辞典』 第二版第十巻 小学館 (2008:p. 814)</p>	<p>の-・だ(格助詞「の㊦㊧㊨」に断定の助動詞「だ」の付いたもの)</p> <p>①事実を確かなものと認めて提示したり、自分の主張を述べたりして、それがあつて事情や理由にもとづく判断であるということを示す。</p> <p>②話し手の決意を表わす。</p> <p>③(疑問詞を受けて)意図や事実をたずねる気持ちを表わす。</p> <p>④相手にある行動をするようながす気持を表わす。</p>

<p>『小学館日本語新辞典』 第一版 小学館 (2004:p. 1325)</p>	<p>の・だ【連語】(格助詞「の」+助動詞「だ」)</p> <p>①ある状況の原因・理由などを説き示したり、疑問を呈したりする気持ちを強調する。</p> <p>②ある状況について、自己の認識や判断を強調する。</p> <p>③助動詞「た」を伴って、過去の事実について改めて納得し、詠嘆的に回想する気持ちを表す。</p> <p>④自己の決意、他人への命令を表す。</p>
<p>『大辞林』第二版新装版 三省堂 (1999:p. 2008)</p>	<p>の。だ(連語)〔準体助詞「の」に断定の助動詞「だ」の付いたもの〕</p> <p>①原因・理由・根拠などの説明を強く述べる。</p> <p>②意志的な動作を表す語に付いて、その動作主の決意や相手に対する要求などを表す。</p> <p>③(「のだった」の形で)事態の説明をやや詠嘆的に言い表す。</p>
<p>『学研国語大辞典』第二版 学習研究社 (1998:p. 1520)</p>	<p>の・だ《連語》口語。{準体助詞「の」+指定の助動詞「だ」}</p> <p>①問題になっている事柄のようす・ありかたなどを説明する。</p> <p>②ある事柄についての理由・根拠を示す。</p> <p>③{「のだ」の形で}強調をともなった断定を表す。</p> <p>④{「のだ」の形で}意思的な動作を表す動詞について、その動詞の表す動作についての話し手の決意、または相手に対する要求を表す。</p>
<p>『国語大辞典 言泉』第二版 小学館 (1989:p. 1812)</p>	<p>の・だ【連語】(準体助詞「の」+助動詞「だ」)</p> <p>①ある問題について、その状況を、原因・理由などの事情によって説明する。②「なぜ」「どうして」などに呼応して、ある状況の原因・理由、また実情の判断などを求める。</p> <p>②ある情況について、事実としての判断を示す。</p> <p>③自己の認識や判断を強調する。</p> <p>④助動詞「た」を伴って、過去の事実について改めて納得し、詠嘆的に回想する気持ちを表す。</p> <p>⑤将来のことを決定的に述べて、自己の意思、他人への命令を表す。</p>

以上の各辞典が記述している「のだ」の意味を確認すると、ほとんどの辞典は国語学・日本語学の先行研究で「(原因・理由・根拠などの)説明」と呼ばれている意味を第一の意味として記載している。また、「命令」「決意」などの「のだ」の語用論的な意味も記述している。しかし、「のだ」はある事柄について、その原因、根拠を「説明」するだけではなく、以下の例(8)のような、前の事柄の内容をより具体的に言い換えるというものもある。

(8) 八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。

(安部公房『砂の女』)

「(原因・理由・根拠などの)説明」と例(8)の意味は異なる意味項目に属するので、意味を分けるべきである。つまり、「説明」という意味をさらに細分化する必要がある。また、「強い主張を表す、自己の認識や判断を強調する」などの意味と「説明」、ほかの意味との間にどのような関係、繋がりがあるかも究明する必要がある。さらに、「命令」「決意」という語用論的な意味については、意志的な動作を表す動詞に付いて、話し手の決意、または相手に対する要求を表すという記述が多いが、これらの意味は「のだ」が本来持っている意味ではなく、ある語用論的な条件を満たしている文脈で発話される場合、聞き手の語用論的推論より導き出されるものである。意志的な動作を表す動詞に付くという条件だけでは、「命令」と「決意」が導き出されるとは限らない。

認知言語学では、多義語の個々の意味はその中心となるプロトタイプ的な意味から動機づけにより拡張されたものだとされている。多義語の様々な意味はプロトタイプ的な意味を中心にひとつのネットワークを構成している。日本語教育の立場から見ると、こうした多義語の意味を教えるにあたり、辞典に列挙された一つ一つの独立した意味を教えるのではなく、意味と意味の間がどのように結ばれているか、つまりその動機づけを学習者に理解させれば、全体の意味ネットワークの理解と意味習得に役に立つのではないかと考える。次節では、「のだ」のプロトタイプ的な意味と各拡張義を記述し、各意味の相互関係についても考察した上で、「のだ」の複数の意味をネットワークとして示す。

4.1.3 文末の「のだ」のプロトタイプ的な意味

第2章で述べたように、多くの先行研究は「説明」を「のだ」の基本的意味として記述している。寺村(1984:310)は、「先行する文、あるいは状況をPとしてとり立て(言語化するかしないかは別として)それについて説明する(あるいは説明を求める)」のが、「のだ」の最も一般的な使い方であるとしている。奥田(1990:173)も、「述語の位置にあらわれてくる動詞、形容詞、あるいは名詞に「のだ」がくみあわされると、その文は《説明》としてはたらく、という見方は、説明する必要のない事実として、すでに日本語の教科書のなかに定着している」と述べている。「のだ」による説明の中で最も典型的なのは、原因・理由・根拠などの因果関係による説明である。以下の例を検討してみよう。

(9) 九州の福岡市にもぎわっていた。大相撲の一行が巡業にやっていたのである。

(井上ひさし『ブンとフン』)

- (10) 電話に出た男はぞんざいな口調で、大体の道筋を知らせてくれた。そのぞんざいな口調が耳に残り、なんだかふいに嫌な気分になった。新聞の広告で見た「編集員」というなにか妙に胸のときめくような知的なイメージとはほど遠く、しめっぽくて暗い倉庫の中で受け応えしているような気配が、その男の声音から感じられたのだ。

(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

- (11) 書記の主張に部落長が反駁して、村には黒大兵を捕虜として収容する力がないということを作りかえた。しかもあの遠い山道を危険な黒大兵を護送することも村の人間たちの力では難しいだろう。長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にしたのだ。

(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)

- (12) 「すまないけど、ね、電車通りの薬屋に行って、カルモチンを買って来てくれない？ あんまり疲れすぎて、顔がほてって、かえって眠れないんだ。すまないね。お金は、……」

「いいわよ、お金なんか」

(太宰治『人間失格』)

以上の例(9)～(12)を見てみると、「のだ」に前接するQがそれぞれ「大相撲の一行が巡業にやってくる」「(前略)…しめっぽくて暗い倉庫の中で受け応えしているような気配が、その男の声音から感じられた」という内容を持つ、一つの事象となっている。例(9)は、「九州の福岡市もにぎわっていた」という事象(P)の原因、背後の事情が、「大相撲の一行が巡業にやってくる」という事象(Q)であると説明したものである。例(10)も同様に、「そのぞんざいな口調が耳に残り、なんだかふいに嫌な気分になった」という心理状態を表す事象(P)について、そう感じる理由を「(前略)…しめっぽくて暗い倉庫の中で受け応えしているような気配が、その男の声音から感じられた」という事象(Q)で説明している。

例(11)(12)を見てみると、「のだ」に前接するQはそれぞれ「長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にした」、「あんまり疲れすぎて、顔がほてって、かえって眠れない」という内容を持つ事象になっている。例(11)は、「村の人間たちの力では難しいだろう」という判断を下したことの根拠として、「長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にした」という事象(Q)を提示している。例(12)は、「カルモチンを買

って来てくれないか」と頼んでいることについて、その理由は「あんまり疲れすぎて、顔がほてって、かえって眠れない」という事象(Q)であると説明している。堀口(1985:47)は、「この種の〈説明〉の対象は、先行文の表す内容ではなく、そのように判断したり依頼したりするという事態である」と論じている。つまり、「のだ」文の叙述部の事象Qが説明する事象は、「村の人間たちの力では難しいだろう」、「カルモチンを買って来てくれない」ではなく、「村の人間たちの力では難しいだろうと判断したこと」「カルモチンを買って来てくれないと依頼したこと」である。

一方、佐治(1991:254)は「の」の前の述語の表す内容、およびその述語がまとめあげる種々の成分と述語によって描かれることがらを客体的に固定化するものである」と述べている。また、佐治(1991:229)は「「～のだ」の「の」は、その前の述語の連体形によって表わされる判断をいったん固定化し、「だ」はそれをもう一度主観的に断定するものである」と述べている。「のだ」の構文的な機能は、「の」を用いて文を客体化し、それを「だ」によって断定することである。この構文的な機能はすでに多くの先行研究で指摘されおり、本研究もこの立場を取る。また、「のだ」の文は「主題－解説」の構造をもち、「のだ」で締め括った叙述部(Y)が題目部(X)に対して説明する関係にある。以上の例からは、「のだ」は後項の事象(Q)を前項の事象(P)を成立させる原因、理由、根拠などとしていったん客体化¹⁴し、それを話し手の説明として提示することが分かる。また、奥田(1990:180-181)は、「因果関係 causality をひろく解釈して、原因ばかりではなく、条件、理由、動機、根拠、契機などをもそこにふくめるとしても、因果関係をあかみにだすことだけに《説明》をしぼれば、そこからはみだす論理的なむすびつきがたくさんでくる。しかし、《説明》を因果関係の説明に限定しようとする傾向がつよいことから、因果関係の追求の、説明のなかにおける位置のおおきさがおもわれる」と述べている。本研究が収集した5793例の「のだ」には、事象(Q)と事象(P)の間に時間的な継起関係が見られ、広い意味での結果・原因の関係(P=Q)を持つ例が一番多く、延べ996例であった。この広義の因果関係の「説明」は、同じ意味項目に属するものとみなされよう。そこで、本研究は「のだ」が前接する事象が表す「原因、条件、理由、動機、根拠、契機、目的、由来など」をまとめて、「背後の事情」と称する。そして、このような「のだ」の意味を「ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する」とまとめる。「のだ」の「ある事象を、他の事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味は、多くの辞典で第一の意味として記載されている。抽出した「のだ」の実例には、この意味の「のだ」の例が一番多い。他の意味と比べ、「のだ」のこの意味が

¹⁴ 本論文では「客体化」を以下のように定義しておく。

「客体化」の定義：他の人たちと共に、操作可能になったゆるぎのないもの、主体の意志・認識・行為などの対象となる客観的なものにする。

基本的であり、使用頻度が高い、認知されやすいと言える。以上のことから、「ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味を「のだ」のプロトタイプの意味と認定する。

「のだ」のプロトタイプの意味：ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する。

4.1.4 拡張義1

「のだ」には、前節で挙げた例(8)のように、前の事柄の内容をより具体的に言い換えるものもある。

- (13) 八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。

<=例(8)> (安部公房『砂の女』)

- (14) 確かに、私は変わりました。それまでとは違った生き方を試みて、泥のような男に成り下がり、生活疲れを引きずった、艶のないやつれた人間になったのです。

(宮本輝『錦繡』)

- (15) 私は半月前中隊を離れた時、林の中を一人で歩きながら感じた、奇妙な感覚を思い出した。その時私は自分が歩いている場所を再び通らないであろう、ということに注意したのである。

(大岡昇平『野火』)

- (16) むろん、そんな金だけにいつまでも頼っているわけにはいきませんから、わたしは、ちょうどすすめる人があったので近くの町にある信用金庫に勤めに出ようかと考えました。ところがこれには珠子が反対しました。勤めなどせず、もっと絵の勉強をすべきだというのです。

(筒井康隆『エディプスの恋人』)

- (17) 場末の小さな美容院の、豚みたいに太った女主人が、私の説明を聞いているうちに突然怒り出したときは驚きました。彼女は遠廻しに、あることを要求しているのです。自分を「先生」と呼ぶべきだというのです。

(宮本輝『錦繡』)

例(13)は、「休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまった」という事象(Q)で、「男が行方不明になった」という事象(P)の詳細を具体的に説明している。例(14)は、事象(P)について、具体的に私はどのように変わったのかを事象(Q)「それまでとは違った生き方を試みて、泥のような男に成り下がり、生活疲れを引きずった、艶のないやつれた人間になった」で説明している。例(15)は、「奇妙な感覚を思い出した」という事象(P)をより詳しく具体的に「私は自分が歩いている場所を再び通らないであろう、ということに注意した(のを思い出した)」という事象(Q)で説明している。例(16)は、「珠子が反対しました」という事象(P)の具体的な反対の内容、意見を事象(Q)で説明している。例(17)は、「あることを要求している」という事象(P)の具体的な要求の内容を事象(Q)で説明している。

このように、「のだ」はある事象(P)が表している内容をより具体的に事象(Q)で説明する。このような「のだ」の構文には、事象(P)において、「思う」、「考える」などの思考活動を表す動詞、「反対する」「要求する」などの態度、意志を表す動詞がしばしば現れる。一方、事象(Q)においては、思考活動の内容が現われる。また、「というのだ」がよく使われ、「意見」「要求」の具体的な発言内容を引用して説明する。

例(13)～(17)とは反対に、ある事象(P)が表している内容を具体化するのではなく、事象(P)を要約して事象(Q)で説明している例も多い。構文上、「つまり、すなわち、要するに、結局、簡単にいえば、一言で言えば」などと共起する場合が多い。

- (18) 自分には、禍のかたまりが十個あって、その中の一個でも、隣人が脊負ったら、その一個だけでも十分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思った事さえありました。
つまり、わからないのです。 隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかないのです。

(太宰治『人間失格』)

- (19) 「康子さんのおはなしさ。伯母さんもようやく決心がついたんだろうね。司法試験もすんだことだし、この辺で一つ正式に話をきめたいと思うけど、どうだろうって言う御相談よ

「ふむ。そう来るだろうと思っていたよ。要するにあの試験の結果を待っていたんだ。 僕が落第したら、それっきり。合格したら縁談を進めよう。……まあ、それが当り前かも知れんな。世間なんてみな計算高いからね」

(石川達三『青春の蹉跎』)

また、事象(P)が表している内容をより正確に言い換え、事象(Q)で説明する例も見られる。構文上、「というより、むしろ」などと共起する傾向がある。

- (20) 私は何もかもつまらなくなつて呆然としていると、宿の娘は私を心配してくれている。何も考えてやしない。何も考えようがないのだ。

(林芙美子『放浪記』)

- (21) しかし恋の相手にぶつかる位は、学問をした片手間で沢山だ。又毎日の仕事をした余暇で沢山だ。むしろ逢わないでよそうと思つても、つい逢う程、彼女は世界にごろごろしているのだ

(武者小路実篤『友情』)

- (22) みるみる乳房は全体との聯関を取戻し、……肉を乗り越え、……不感のしかし不朽の物質になり、永遠につながるものになった。

私の言おうとしていることを察してもらいたい。又そこに金閣が出現した。というよりは、乳房が金閣に変貌したのである。

(三島由紀夫『金閣寺』)

「のだ」のある事象(P)が表している内容をより具体的に事象(Q)で説明する用法、事象(P)を要約して事象(Q)で説明する用法、事象(P)をより正確に言い換え、事象(Q)で説明する用法は連続して用いられる場合もある。以下の例(23)では、事象(P)を「わからない」で要約した後、さらに「わからない」の内容をより具体的に事象(Q)「隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかない」で説明している。例(24)では、事象(P)「自分は、空腹という事を知りませんでした」をまず具体的に事象(Q)「自分には「空腹」という感覚はどんなものか、さっぱりわからなかった」で説明して、また言い換えて「おなかが空いていても、自分でそれに気がつかない」で説明している。

- (23) 自分には、禍のかたまりが十個あって、その中の一個でも、隣人が脊負つたら、その一個だけでも十分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思った事さえありました。

つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかないのです。

<=例(18)> (太宰治『人間失格』)

- (24) また、自分は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」という感覚はどんなものだか、さっぱりわからなかったのです。
へんな言いかたですが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです。

(太宰治『人間失格』)

事象(P)が表している内容をより具体的に説明するにしても、事象(P)を要約したり、より正確に言い換えて説明するにしても、すべて事象(P)を別の角度、視点から捉え直して説明していると言える。よって、これらの説明の例を同じ意味項目に属するものとして捉える。このような「のだ」の意味(以下、拡張義1と呼ぶ)を「ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」とまとめる。

野田(2002:230)は、説明について「一般に、ある事物や状況について、聞き手が十分に理解出来ていないとき、あるいは十分に理解出来できないだろうと予想されるとき、話し手は、わかりやすくかみくだいて述べたり、詳しい事情などを述べたりして、聞き手の理解を助けようとする。そして、そういった行為は、説明と呼ばれる」と定義している。「のだ」のプロトタイプの意味は、ある事象を成立させる原因、理由など背後の事情を説明しているのに対して、拡張義1はある事象をわかりやすく、別の角度から説明している。本研究は、「のだ」のプロトタイプの意味から拡張義1への意味拡張は、類似性に基づくメタファー展開であると考えられる。プロトタイプの意味と拡張義1は、「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」という点において共通している。プロトタイプの意味では、事象(P)と事象(Q)の間には、広い意味での因果関係が認定されている。しかし、拡張義1では、事象(P)と事象(Q)の間には、論理的な繋がりが薄くなり、漠然としている。同じ事象を違う角度、視点から見たことから得る事象(P)と事象(Q)は、同じ事象の表と裏の関係であるにすぎない。拡張義1と比べて、プロトタイプの意味はより具体性を持つと言える。そこで、本研究では「ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味をプロトタイプとし、「ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味をその拡張事例として周辺的な意味として認定する。また、プロトタイプの意味と拡張義1が共有するスキーマとして、「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味が抽出できる。以上の意味分析を以下の図4-1で示す。

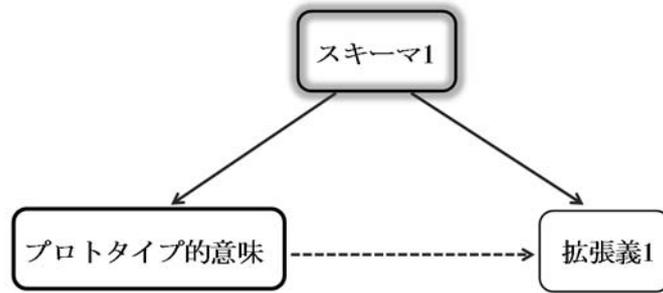


図 4-1 スキーマ 1 とプロトタイプの意味、拡張義 1 の関係
及びプロトタイプの意味と拡張義 1 の拡張関係

「のだ」のプロトタイプの意味：ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 1：ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」のプロトタイプの意味と拡張義 1 が共有するスキーマ 1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

つまり、スキーマ 1 とプロトタイプの意味、拡張義 1 の関係はそれぞれシネクドキーの関係にあり、プロトタイプの意味と拡張義 1 の拡張関係はメタファーに基づく意味の拡張である。

4.1.5 拡張義 2

以下の例 (25)～(29) は野田 (1997) でスコープの「のだ」と呼ばれている例である。本研究は益岡 (2007:86) と同様に、「のだ」を用いるかどうかは表現のタイプの違いの問題であり、スコープ・フォーカスの問題は二次的な問題にすぎないと捉え、スコープの「のだ」とムードの「のだ」を二分化すべきではないと考える。

(25) 「(前略)二人で生きるものは仕合せだと云う言葉は本当だ」

「それは誰が云ったのだ」

「あの人云ったのだ」

(武者小路実篤『友情』)

(26) 島村も頬が火照るようで、さっさと通り過ぎると、直ぐに駒子が追っかけて来た。 (中略)

「顔を赤くしたり、ばたばた追っかけて来たりすれば、なお困るじゃないか。」
「かまやしない。」と、はっきり言いながら駒子はまた赤くなると、その場に立ち止まってしまって、道端の柿の木につかまった。

「うちへ寄っていただこうと思って、走って来たんですわ。」

(川端康成『雪国』)

(27) (北岡夫人から電話が渡されて)

「柳か、どうした？」と北岡が出て来る。

「あ、ニュースをご覧になりましたか？」

「ニュース？ 見とらんよ。何しろうちのやつ、俺が専務に戻るまではTVを見せてくれんのだ。自分は一日中見とるのに、だぞ。今だってCMだったから、電話に出たんだ。俺は一家の主だというのに——」

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

(28) 後で見ると、竹筒が舷から食みだしていた部分は、半面だけ黒く焦げていた。

閃光かまたは爆発で起った熱気のために焦げたのだ。

(井伏鱒二『黒い雨』)

例(25)は質問文に対する応答文に用いられる「のだ」である。例(25)では、事象(P)「誰かがそれを言った」を主題として、特定の要素「あの人」を新しい情報として事象(P)に付加して事象(Q)で述べ直し、それを話し手の説明として提示している。しかし、例(25)の質問文に対する応答文では、「のだ」を用いる例は少ない。以下の例(29)のように、特定の情報だけを答える場合が多い。

(29) 「荷物は持って行ってもいいが、お前、何処から這入って来たんだ」

「表の戸から」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

例(26)では、事象(P)「追っかけて来た」という状況を受けて、その特定の新しい情報「うちへ寄っていただこうと思って」(目的)を事象(P)に付加して事象(Q)で述べ直し、それを話し手の説明として提示している。例(27)では、事象(P)「女房が先電話に出た」という状況を受けて、その原因はほかでもない「今CMだったから」という特定の情報を状況に付加し、それを事象(Q)として客体化し、話し手の説明として提示している。例(28)では、事象(P)「焦げていた」を主題として、特定の新しい情報「閃光かまたは爆発で起った熱気のために」(原因)を事象(P)に付加して事象(Q)で述べ直し、それを話

し手の説明として提示している。これらの例はすべて、ある既定の事象を主題として、その事象に格成分、理由節、目的節など特定の要素を付け加えて述べ直しているものである。従って、この新しい特定の要素が自然に文の焦点(フォーカス)として現れてくる。本研究は例(25)～例(28)のような「のだ」の意味も同じ意味項目に属するものとして捉える。このような「のだ」の意味(以下、拡張義2と呼ぶ)を「ある事象を、ほかの事象に特定の要素を付加して述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」とまとめる。そして、この拡張義2はプロトタイプの意味からの拡張ではなく、拡張義1から類似性に基づくメタファーによって拡張されたと考える。拡張義1と拡張義2は、「ある事象を、ほかの事象を述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」という点において共通している。一方、拡張義1は、事象(Q)は事象(P)全体を別の角度から述べ直すものであるのに対して、拡張義2は、事象(Q)は事象(P)に特定の要素を付加して述べ直すものである。拡張義1は、事象(P)と事象(Q)の間には、 $P=Q(P')$ の関係が見られる。拡張義2は、事象(P)と事象(Q)の間には、 $P=Q(XP)$ の関係があると考えられる。拡張義1と拡張義2の拡張関係を以下の図4-2で示す。

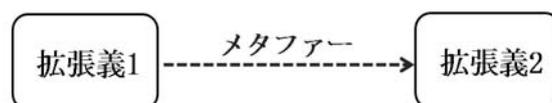


図4-2 拡張義1と拡張義2の拡張関係

「のだ」の拡張義1：ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義2：ある事象を、ほかの事象に特定要素を付加して述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

さらに、「のだ」のプロトタイプの意味と拡張義1、拡張義2に共通するスキーマとして、「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味が抽出できる。この「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」という意味が、「のだ」の(局所的)スキーマ(以下、スキーマ1と呼ぶ)であることになる。プロトタイプの意味、拡張義1、拡張義2は(局所的)スキーマ1が特殊化して成立したものであり、(局所的)スキーマ1とそれぞれシネクドキーの関係にある。プロトタイプの意味と拡張義1はメタファーの関係にあり、拡張義1と拡張義2の拡張関係はメタファーに基づく意味の拡張である。以上の意味分析をネットワークとしてまとめると、以下の図4-3のようになる。

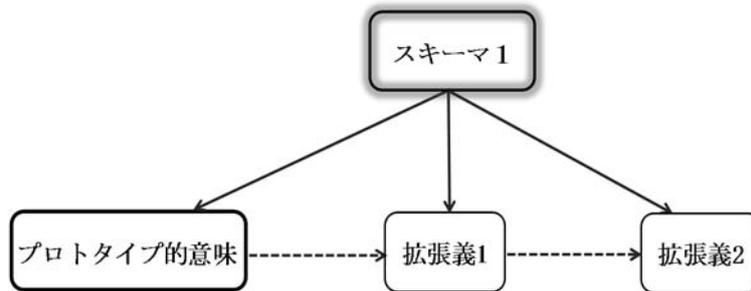


図 4-3 スキーマ 1 とプロトタイプの意味、拡張義 1、拡張義 2 の関係
及びプロトタイプの意味と拡張義 1、拡張義 1 と拡張義 2 の拡張関係

「のだ」のプロトタイプの意味：ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 1：ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 2：ある事象を、ほかの事象に特定要素を付加して述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

(局所的) スキーマ 1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

4.1.6 拡張義 3

「のだ」の表現効果と多機能に関する先行研究では、「のだ」は「説明」以外に、「告白」、「教示」、「強調」、「命令」、「決意」など様々な機能を有していると記述されている。以下の(30)～(35)の「のだ」の例を検討してみよう。

(30) 「見れば見るほど、へんな顔をしているねえ、お前は。ノンキ和尚の顔は、実は、お前の寝顔からヒントを得たのだ」

(太宰治『人間失格』)

(31) 「そりゃ、天井に砂が積っちゃ、具合わるいだろうな……だからと言って、砂で梁が腐るってのはおかしいじゃないか。」

「いいえ、くさります。」

「しかし、砂ってやつは、もともと、乾燥しているものなんだよ。」

(安部公房『砂の女』)

(32) 「もう少しですよ」

刑事がのんびりと答える。

「一時間前からそう言ってるじゃないか！」

「本当にすぐなんですよ」

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(33) 「純子、会社を辞めなさい」

「ええ？」

今度は純子が驚く番だ。「何よ、出しぬけに」

「すぐに辞めるんだ!」

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(34) 男は私を抱き伏せると、お前も俺と同じような病気にしてやるのだ。そう云って、肺の息をフウフウ私の顔に吐きかけてくる。

(林芙美子『放浪記』)

(35) 「ところで浜田君、僕は聞きたいことがあるんだ」

と、私は頃合を見計らって、一段と膝を進めながら、

「ヒドイ仇名がナオミに附いていると云うのは、一体どんな仇名ですか？」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

以上の例(30)～(34)の「のだ」は先行研究でそれぞれ、「告白」、「教示」、「強調」、「命令」、「決意」という用法と機能を表すとされる。野田(1997)は、これらの用法を非関係づけの対人的ムードの「のだ」と分類している。対人的ムードの「のだ」の基本は、聞き手は認識していないが、話し手は認識している既定の事態Qを、聞き手に認識させようという話し手の心的態度を表すことである。そこから、告白、教示、強調といったニュアンスが生じるとされている。また、野田(1997:94)は、「これらのニュアンスは、はっきり区別できるものではない」と指摘している。つまり、「告白」、「強調」、「教示」などの意味、ニュアンスは語用論的に生じて来るものだと言える。「決意」と「命令」に共通するものについて、田野村(1990:24)は「話し手の意識の中に、自分が行くこと、相手が行くことが、実現すべきことがらとしてすでに定まっているということであり、そこから意志の表明や命令といった意味合いが出てくるものと思われる」と述べている。また吉田(1988a:50)は、「決意」、「命令」について「のだ」は「決意や命令の直接的な標識ではないと考えるべきであろう」と述べ、「これから為そうとすることがらをあえ

て一つのコトとして言葉にして聞き手に向かって決然と示し、「聞き手が為すべきことがらを一つのこととして指定」することから「決意」、「命令」というニュアンスが生じている。従って、「決意」、「命令」という意味も語用論的に生じて来るものだとと言える。本研究は「告白」、「教示」、「強調」、「命令」、「決意」は「のだ」が本来持っている意味論的な意味ではなく、語用論的に生じて来るものだと考える。日本語教育現場では、「告白」、「強調」、「教示」、「命令」、「決意」という用語を使ってそのまま教えると、学習者がこれらを「のだ」の表す意味だと誤解する恐れもある。以上の例(30)～例(34)の「のだ」自体の意味を明らかにしなければならない。

田野村(1990:5-8)は、 $\alpha (=P)$ が具体的に存在するかどうかによって、「のだ」の基本的な意味・機能を「あることがらの背後の事情を表す」と「ある実情を表す」に分けている。「あることがら α を受けて、 α とはこういうことだ、 α の内実はこういうことだ、 α の背後にある事情はこういうことだ、といった気持ちで命題 $\beta (=Q)$ を提出する場合の「のだ」は、「あることがらの背後の事情」を表すとされている。また、 α が具体的に特定しがたい、ある具体的な α をうけているとは考えられない場合もあると指摘し、その内容の具体性を失った場合の「のだ」は「ある実情」を表すとされている。そして、その場合は「すべての者には必ずしも容易には知り得ないにせよ、すでに定まっていると想定される事情 α が話し手の念頭に問題意識としてあり、それが β である(かどうか)ということが問題とされている」と述べている。例(30)～例(34)では、事象(Q)が受けている事象(P)は抽象的、漠然的となり、先行文脈として現れておらず、明示的な主題の表現も伴っていない。「のだ」に前接する事象(Q)は「ノンキ和尚の顔は、実は、お前の寝顔からヒントを得た」「砂ってやつは、もともと、乾燥しているものだ」「本当にすぐだ」「すぐに辞める」「お前も俺と同じような病気にしてやる」「僕は聞きたいことがある」というような、話し手の内心、個人的なこと、話し手が持っている知識あるいは知っていること、現実の事態、話し手の意識などを表す事象である。「の」を用いて、「の」に前接する事象(Q)を話し手の発話時の判断、独自の考えとしてではなく、すでに定まったこと、定まった事実として示している。例えば例(31)では、話し手がまず「のだ」に前接する事象(Q)「砂ってやつは、もともと、乾燥しているものだ」をすでに定まった事実として客体化し、その後、それを話し手の断定・主張として相手に提示することになる。つまり、話し手が「のだ」を使用することによって、ある事象を既定の事象として客体化し、それを自分の断定・主張として提示しているのである。例(33)では、「すぐに辞めるんだ」は「純子、会社を辞めなさい」という命令文の後に出現している。聞き手がすでに話し手の要求を承知している上で、話し手は辞めることをすでに定まっていることとして客体化し、それを話し手の断定・主張として提示することによって、間接的に聞き手に当該行為の実行を促しているのである。田野村(1990:25)は「聞き手が話し手の要求をすでに承知している状況こそ、「のだ」が命令に

用いられやすいことになる」と述べている。これは、「の」が前接する事象(Q)を既定の事象として客体化することに由来すると考えられる。「命令」「決意」などの語用論的意味に関して、次節で詳しく考察する。

本研究は例(30)～例(34)の「のだ」の本来の意味論的意味と例(35)のような「のだ」の意味を同じ意味項目に属するものとして捉える。そして、このような「のだ」の意味(以下、拡張義3と呼ぶ)を「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」とまとめる。拡張義3は(局所的)スキーマ1からメタファーによって拡張されたと考えられる。拡張義3と(局所的)スキーマ1は「ある事象を客体化し、それを提示する」という点において共通している。両者に共通するスキーマとして、「ある事象を客体化し、それを提示する」という意味が抽出できる。(局所的)スキーマ1と拡張義3の拡張関係を以下の図4-4で示す。

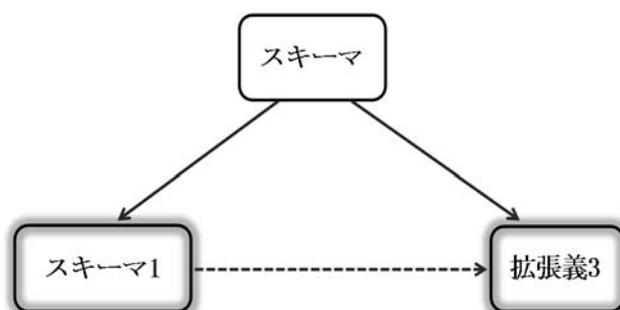


図4-4 スキーマと(局所的)スキーマ1、拡張義3の関係
及び(局所的)スキーマ1と拡張義3の拡張関係

(局所的)スキーマ1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義3：ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する。

(局所的)スキーマ1と拡張義3が共有するスキーマ：ある事象を客体化し、それを提示する。

つまり、スキーマと(局所的)スキーマ1、拡張義3の関係はそれぞれシネクドキーの関係にあり(局所的)スキーマ1と拡張義3の拡張関係はメタファーに基づく意味の拡張である。

4.1.7 拡張義 4

「のだ」には、次の例(36)～(40)のような例もある。この場合、「のだ」の意味は「説明」という用語には当てはまらない。

(36) 家の前までやって来ると、私の忌まわしい想像はすっかり外れて、アトリエの中は真っ暗になっており、一人の客もないらしく、しーんと静かで、ただ屋根裏の四畳半に明りが灯っているだけでした。

「ああ、一人で留守番をしているんだな、——」私はほっと胸を撫でました。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

(37) そう云えば勝手口の方の障子も、今しがた誰かがそこから出て行ったらしく、矢張り明け放しになっていました。と、私の注意は、勝手口から地面へさしている仄かな明りを伝わって、つい二三間先のところに裏門のあるのを発見しました。門は扉がついていない古い二本の木の柱で、柱と柱の間から、由比ヶ浜に砕ける波が闇にカッキリと白い線になって見え、強い海の香が襲って来ました。

「きっと此処から出て行ったんだな」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

(38) ブスツとして腕組みしたまま座っているのだが、その額やら頬っぺたに、白いバンソウコウが痛々しく鮮やかだった。

きっと奥さんに引っかけられたんだわ、と伸子は昨日の尾島夫人の剣幕を思い出して、同情しながらも、ついおかしくなった。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(39) 「前任者は駄目だよ。あの人は遠くへ転任したし、ここでの任期は四年足らずだった。でもその前の人は警官をやめてから農協の守衛になっている。農協の隣りの家に奥さんと住んでいるよ。任期も長かったそうだし、あの人なら何か知っている」彼はくすくす笑った。どぎまぎしていたためにそんなことを思い出せなかった自分がおかしく、七瀬の役に立てそうなのが嬉しかったのだ。

(筒井康隆『エディプスの恋人』)

(40) 「晩飯を食ってから又出かけたのは、何時頃でしたらうか？」

「さあ、あれは、八時十分でございましたでしょうか、……………」

「じゃ、もう二時間にもなるんだ」と、私は覚えず口へ出して云いました。

例(36)と例(37)では、事象(P)は周りの状況、物事の状態を表し、事象(Q)は話し手が事象(P)の表すことに導かれて、それを根拠に推論し、「一人で留守番をしている」「きっと此処から出て行った」と認識・判断した事態を表している。例(38)と例(39)では、話し手は事象(P)が表している人の外形、表情、動作、行為などから、読み取り、判断した生理的あるいは心理的な状態¹⁵（「きっと奥さんに引っかかれた」「……が嬉しかった」）を事象(Q)で表している。例(40)の話し手は、事象(P)が表している「さあ、あれは、八時十分でございましたでしょうか」という発言から、事象(Q)「もう二時間にもなる」という帰結を導き出している。例(36)～例(40)のような「のだ」は構文上「きっと」、「おそらく」、「とすると」、「じゃ(あ)」などと共起する場合が多い。野田(1997:84-86)では、例(36)～例(39)のような例を<事情の把握>とし、例(40)のような例を<意味の把握>としている。また、「Pの事情を把握しているのか意味を把握しているのかは、明確に区別できるものではない」と指摘し、以下の例(41)で「QはPの事情とも意味とも考えられる」と根拠付けている。

(41) タエ子「スキー得意なの、トシオさん」

トシオ「いやあ、大したことはないけど、冬はここで指導員のバイトやってるから」

タエ子「わー指導員、じゃあ上手なんだ」

野田(1997:86)

さらに、野田(2002:250-251)では、「対人的「のだ」の、<事情の提示>と<意味の提示>に比べると、対事的「のだ」の、<事情の把握>と<意味の把握>の区別は難しい」と述べ、以下の例(42)～(45)をあげて、「対事的「のだ」の場合、話し手はPをもとに、Qを導き出して把握するという認知の道筋(⇒)と、PとQの命題間の関係(「←事情」「→意味」)が重なるため、区別が難しくなる」と解説している。

(42) 明日は休みます。用事があるんです。

<事情の提示>

P ← 事情 Q (Qという事情でPが生じている)

(43) 引っ越します。大学に近くなるんです。

<意味の提示>

P → 意味 Q (Pという事態はQを意味する)

¹⁵ 奥田靖雄(1990)を参照。

(44) 純がない。きっと用事があるんだ。 <事情の把握>

P ← 事情 Q (Q という事情で P が生じている)

⇒ (話し手が P をもとに Q を導き出す)

(45) 純が引っ越すのか。きっと大学に近くなるんだ。 <意味の把握>

P → 意味 Q (P という事態は Q を意味する)

⇒ (話し手が P をもとに Q を導き出す)

野田 (2002:250)

「事情の把握」であれ「意味の把握」であれ、いずれにしても事象(Q)は事象(P)を根拠にして導き出されている認識、判断、帰結、結論である。従って、本研究では、例(36)～(40)、例(41)、例(44)、例(45)の「のだ」の意味を同じ意味項目に属するものとして捉える。以下の例(46)(47)も同じ意味項目に属するものである。

(46) 東京の賃貸シアパートでは、日光のよく当る部屋は高くて、北向きの部屋は安い。日光はもはや経済的価値に換算されているのだ。

(石川達三『青春の蹉跎』)

(47) もちろん砂は、液体ではない。だから浮力に期待するというわけにはいかない。たとえ、砂より比重の軽い、コルク栓のようなものでも、ほうっておけば、自然に沈んでしまう。砂に浮べる船は、もっとちがった性質をもっていなければならないのだ。

(安部公房『砂の女』)

例(46)では、事象(P)という現実から事象(Q)「日光はもはや経済的価値に換算されている」という一般化の判断が導き出されている。例(47)では、事象(P)が表している状況から、事象(Q)「砂に浮べる船は、もっとちがった性質をもっていなければならない」という必然的な判断が導き出されている。いずれも、事象(P)を根拠にして、判断を引き出しているのである。本研究では、このような「のだ」の意味(以下、拡張義4と呼ぶ)を「ある事象を、ほかの事象から導き出されているものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する」とまとめる。

「のだ」の拡張義4: ある事象を、ほかの事象から導き出されているものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

4.1.8 拡張義5

以下の例(48)～(51)のような「のだ」は従来「発見」、「再認識」「確認」と呼ばれている用法である。

(48) 自分で思っているより、ずっと疲れていたに違いない。伸子はソファで、いつしか眠りに落ちていた。

そして……どれくらいたったのか、伸子は目を覚ました。

「ああ……眠っちゃったんだわ」

伸子はそう呟いて、思い切り伸びをした。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(49) 期待し過ぎてはいけない。尾島にしてみれば、解雇したつもりでいるのかもしれない。それに——そうだ、あのマンションを抵当に入れて、叔父が五百万という金を借りているのだ。それを逆に請求されないと限らない。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(50) 「伊達が勝ったって」

「へーえ、伊達が勝ったんだ」

野田 (1997:88)

(51) たいした日常の誇りだよ、と僕はいった。

便器にまたがったまま、紅潮した顔をむりに振りかえって学生がいった。

そうなんだ。

(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)

例(48)のような「のだ」は、発話時に既存の事象に気付き、その結果に用いられることが多い。例(49)のような「のだ」は、以前知っていた事態、認識していたことに再度出会い、あるいは思い出して、それを口にする場合に用いられる。例(50)と例(51)のような「のだ」は、聞き手の発話をそのまま繰り返したり、捉えたりして、自ら納得していることを聞き手に示している。同時に、聞き手の発話をそのまま繰り返したり、捉えたりすることによって、話し手の聞き手へ確認の発話意図も見られる。このような「のだ」は構文上「あ(あ)、へえ、なんだ、そうだ、そうか」などと共起する場合が多い。

本研究は例(48)～例(51)のような「のだ」の意味が同じ意味項目に属するものとして

捉える。例(48)では、状況としての事象(P)をそのまま事象(Q)「眠っちゃった」で捉え、それを話し手の認識・判断として示している。吉田(1988a:53)は、「《再認識》は、失念していた事態に再び遭遇(自ら思い出すというあり方での遭遇を含む)し、その事態を言語化することによってそれを再び納得するという表現であった」と述べている。例(49)は話し手が以前知っていた事象(P)を思い出して、それをそのまま事象(Q)としてあらためて捉え、話し手の認識・判断として示している。例(50)と例(51)では、先行する発言の事象(P)をそのまま事象(Q)「伊達が勝った」、「そう(たいした日常の誇り)だ」で捉え、それを話し手の認識・判断として示している。従って、このような「のだ」の意味(以下、拡張義5と呼ぶ)を「ある事象を、ほかの事象をそのままの形で捉えるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する」とまとめる。拡張義4と拡張義5は、「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する」という点において共通している。一方、異なる点も存在する。拡張義4の場合、事象(Q)は事象(P)を根拠にして、導き出されているものである。事象(P)と事象(Q)の間には、広い意味での因果関係 $P \Rightarrow Q$ が認定される。それに対して拡張義5では、事象(Q)と事象(P)が同一の事象を指し示し、 $P=Q$ の関係になっている。つまり、二つの意味が類似の関係にある。そして、拡張義4と拡張義5が共有するスキーマとして、「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する」という意味が抽出できる。この「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する」という意味が、「のだ」の(局所的)スキーマ(以下、スキーマ2と呼ぶ)であることになる。以上の意味分析をネットワークとしてまとめると、以下の図4-5のようになる。

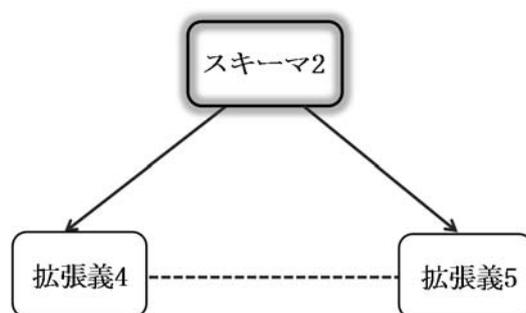


図4-5 スキーマ2と拡張義4、拡張義5の関係
及び拡張義4と拡張義5の拡張関係

「のだ」の拡張義4：ある事象を、ほかの事象から導き出されているものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

「のだ」の拡張義5：ある事象を、ほかの事象をそのままの形で認識するものとして客
体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

(局所的)スキーマ2：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それ
を話し手の認識・判断として提示する。

つまり、拡張義4と拡張義5は(局所的)スキーマ2とそれぞれシネクドキーの関係にあり、(局所的)スキーマが特殊化して成立したものである。拡張義4と拡張義5の拡張の方向性は特定できないため、その方向性は示していない。

また、「のだ」のプロトタイプの意味と拡張義1、拡張義2に共通する(局所的)スキーマ1「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」と拡張義4と拡張義5に共通する(局所的)スキーマ2「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する」の拡張関係であるが、(局所的)スキーマ2は(局所的)スキーマ1から類似性に基づくメタファーによって拡張されたと考えられる。この二つの意味には、「ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを提示する」という共通点がある一方、「話し手の説明として提示する」と「話し手の認識・判断として提示する」という異なる面もある。このことは二つの意味がメタファーによる拡張であることを示唆する。従って、この二つの意味はメタファーの関係にある。(局所的)スキーマ1と(局所的)スキーマ2の拡張関係を以下の図4-6で示す。

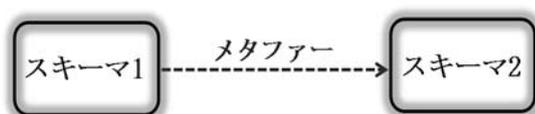


図4-6 (局所的)スキーマ1と(局所的)スキーマ2の拡張関係

(局所的)スキーマ1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それ
を話し手の説明として提示する。

(局所的)スキーマ2：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それ
を話し手の認識・判断として提示する。

さらに、(局所的)スキーマ1と(局所的)スキーマ2、拡張義3に共通するスキーマとして、「ある事象を客体化し、それを提示する」という意味が抽出できる。この「ある事象を客体化し、それを提示する」という意味が、「のだ」のスーパースキーマであることになる。(局所的)スキーマ1、(局所的)スキーマ2、拡張義3はスーパースキーマ

が特殊化することによって成立したものであり、スーパースキーマとそれぞれシネクドキーの関係にある。(局所的)スキーマ1と拡張義3はメタファーの関係にあり、(局所的)スキーマ1と(局所的)スキーマ2の拡張関係はメタファーに基づく意味の拡張である。以上の意味分析をネットワークとしてまとめると、以下の図4-7のようになる。

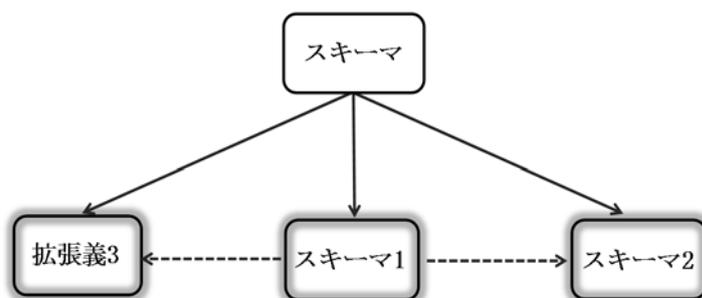


図4-7 スーパースキーマと(局所的)スキーマ1、(局所的)スキーマ2、拡張義3の関係及び(局所的)スキーマ1と(局所的)スキーマ2、拡張義3の拡張関係

(局所的)スキーマ1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

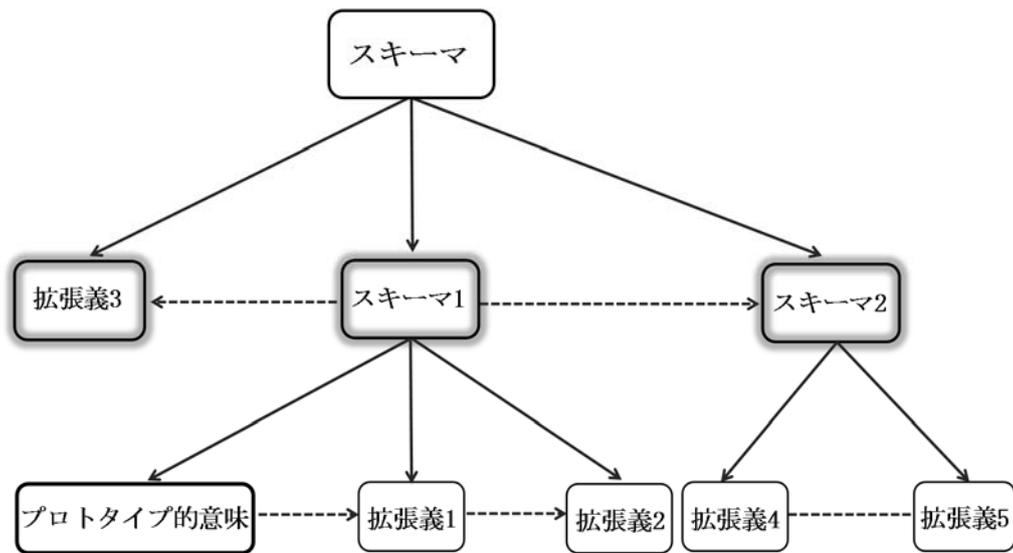
「のだ」の拡張義3：ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する。

(局所的)スキーマ2：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

スーパースキーマ：ある事象を客体化し、それを提示する。

4.1.9 文末の「のだ」の多義構造

以上の文末の「のだ」の意味分析に基づき、その多義構造をまとめると、以下の図4-8のようになる。



(破線の矢印は拡張関係(メタファー)を表し、実線の矢印はスキーマ関係(シネクドキー)を表す)

図 4-8 「のだ」の多義構造

「のだ」のプロトタイプ的意味：ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 1：ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 2：ある事象を、ほかの事象に特定要素を付加して述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 3：ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する。

「のだ」の拡張義 4：ある事象を、ほかの事象から導き出されているものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

「のだ」の拡張義 5：ある事象を、ほかの事象をそのままの形で認識するものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

(局所的)スキーマ 1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

(局所的)スキーマ 2：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

スーパースキーマ：ある事象を客体化し、それを提示する。

4.2 文末の「のだ」の語用論的意味

前節では、認知言語学の理論的枠組に基づき、「のだ」の多義構造を分析した。本節では、その認知意味論的な考察を基に、「のだ」の「命令」「決意」などの語用論的な意味と「のだ」が帯びる様々なニュアンスについて考察する。

4.2.1 「命令」と「決意」

本研究は「決意」「命令」という意味は「のだ」が本来持っている意味ではなく、「のだ」の拡張義3「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」という意味論的な意味から、語用論的に生じて来るものだと考える。以下の例(52)～例(55)は語用論的に「命令」と解釈される例である。

(52) 彼の太い手が下りて来て、襟首をつかまえて、私を立たせた。しかし命ずる声はやはり温かく、やさしかった。

「踏め。踏むんだ」抵抗しがたく、私はゴム長靴の足をあげた。

(三島由紀夫『金閣寺』)

(53) 「純子、会社を辞めなさい」

「ええ？」

今度は純子が驚く番だ。「何よ、出しぬけに」

「すぐに辞めるんだ!」

<=例(33)> (赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(54) 私は意を決してまだ動き回っている鈴木に「帰ります。さようなら」をいい、鈴木は「気をつけて帰るんだよ」という。

(高野悦子『二十歳の原点』)

(55) 女は両手で顔を覆うて、部屋を駈けて出た。

柏木はというと、立ちすくんだままの私の顔を見上げて、異様に子供っぽい微笑をうかべて、こう言った。

「さあ、追っかけて行くんだ。慰めてやるんだ。さあ、早く」

(三島由紀夫『金閣寺』)

「のだ」は、ある語用論的な条件を満たしている文脈で発話されると、聞き手が語用

論的推論より「決意」、「命令」といった意味を導き出す。田野村(1990:25)は「聞き手が話し手の要求をすでに承知している状況こそ、「のだ」が命令に用いられやすいことになる」と述べている。また吉田(1988a:49-50)は、決意と命令を表す「のだ」について、「文面上は或る動作を指し示しているだけの表現であるが、その他に、その動作が今はまだ実現されていないこと、その動作を実現させるべき(だと話し手が考えている)人物が話し手(または聞き手)自身であること、などの背景的情報を文脈などから得ることができる。そして、そのような情報が総合されることによって、これらの表現は決意や命令の表現たり得ているのであると思われる」と述べている。

上記の先行研究を参考にしながら、「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」を表す「のだ」が「命令」と解釈される語用論的条件を次の四つにまとめた。

- ①「のだ」に前接する事象が、聞き手が「実行可能な行為」を含んでいるもの。
- ②話し手にとって望ましいと見なす当該行為がまだ実現されていない。
- ③「実行可能な行為」に関し、話し手が聞き手に当該行為を実行してほしいという願望が含まれているもの。
- ④聞き手が話し手の要求を何らかの形ですでに承知している場合、命令と解釈されやすい。

例(52)～例(54)は、①～④をすべて満たしており、「命令」の意味と解釈される。例(52)の「踏むんだ」と例(53)の「すぐに辞めるんだ」は「踏め」、「純子、会社を辞めなさい」という命令文の後に出現している。聞き手がすでに話し手の要求を承知している上で、話し手は「辞める」、「踏む」という実現されていない実行可能な行為をすでに定まっていることとして客体化し、それを話し手の断定・主張として提示することによって、間接的に聞き手に当該行為の実行を促しているのである。聞き手が語用論的推論より「命令」の解釈が導き出される。例(54)の「気をつけて帰るんだ」は、命令のあとに続いているものではないが、一般的に定まっていることを「のだ」で示している。一般的に定まっていることは、聞き手も通常承知しているものと考えてよい。話し手は「気をつけて帰る」という実現されていない実行可能な行為を、すでに定まっていることとして客体化し、それを話し手の断定・主張として聞き手に提示する。そして聞き手は語用論的な推論を経て、「気をつけて帰るべきだ」と解釈する。例(55)の「追っかけて行くんだ」、「慰めてやるんだ」も命令のあとに続いているものではなく、一般的に定まっていることでもないが、「さあ」という促し、急ぎ立てのサインがあるので、条件と①②③と合わせて、聞き手に「命令」と解釈される。

また、「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提

示する」を表す「のだ」が「決意」と解釈される語用論的条件は次の三つにまとめられる。

- ①「のだ」に前接する事象が、話し手が「実行可能な行為」を含んでいるもの。
- ②話し手にとって望ましいと見なす当該行為がまだ実現されていない。
- ③「実行可能な行為」に関し、話し手が話し手自身で当該行為を実行したいと望んでいるもの。

以下の例(56)～例(58)は語用論的に「決意」と解釈される例である。

(56) 純子は、五千円札を渡して、真由美と別れた。——胸が高鳴っている。

谷口へこれを見せてやるんだ!

早く見たい気持ちをわざと押し殺して、喫茶店へと戻る。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(57) 男は私を抱き伏せると、お前も俺と同じような病気にしてやるのだ。そう云って、肺の息をフウフウ私の顔に吐きかけてくる。

<=例(34)> (林芙美子『放浪記』)

(58) それから自分は、これもまた実に思いがけない滑稽とも阿呆らしいとも、形容に苦しむほどの失言をしました。

「僕は、女のいないところに行くんだ」

(太宰治『人間失格』)

例(56)～例(58)は、①～③をすべて満たしており、「決意」の意味と解釈される。例(56)では、話し手が「谷口へこれを見せてやる」という実現されていない実行可能な行為をすでに定まっていることとして客体化し、それを話し手の断定・主張として自分自身に言い聞かせている。読み手はそこから話し手の強い決意を読むことができる。例(57)(58)では、話し手が「お前も俺と同じような病気にしてやる」、「女のいないところに行く」という実現されていない実行可能な行為をすでに定まっていることとして客体化し、それを話し手の断定・主張として聞き手に告知し、聞き手には話し手の強い意志の表明と解釈される。前後の文脈がなく、単に「谷口へこれを見せてやるんだ」という文だけでは、話し手が実行するか、聞き手が実行するかは判断しかねる。条件①と条件②を満たしている場合、「命令」と解釈されるか、「決意」と解釈されるかは条件③によって分かれる。また、「のだ」が「命令」と解釈される語用論的条件④は必須条件では

ないが、この条件があれば「のだ」を「命令」と解釈することが容易になると考えられる。

4.2.2 そのほかの語用論的意味

「決意」、「命令」という意味だけではなく、「強調」、「告白」、「教示」などのニュアンスも「のだ」の拡張義³「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」という意味論的な意味から、語用論的に生じて来るものだと考える。

吉田(1988a: 48)は、「聞き手が(一度は聞いていながら)まだ納得していない情報を話し手が再び提出する」時に用いられる「のだ」の表現効果を「強調」と呼んでいる。野田(1997: 93)は、「話し手は、聞き手がなかなか認識してくれないことを、認識しよう訴えかけている」時に用いられると「強調のように感じられる」と論じている。以下の例を見られたい。

(59) 「もう少しですよ」

刑事がのんびりと答える。

「一時間前からそう言ってるじゃないか！」

「本当にすぐなんですよ」

<=例(32)> (赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(60) 「ヨシちゃん、ごめんね。飲んじゃった」

「あら、いやだ。酔った振りなんかして」

ハッとしました。酔いもさめた気持でした。

「いや、本当なんだ。本当に飲んだのだよ。(後略)」

(太宰治『人間失格』)

以上の2例は確かに吉田(1988a)と野田(1997)で述べられたような「強調」の表現効果あるいはニュアンスをもつ「のだ」である。しかし以下の例(61)では、「のだ」は聞き手が「まだ納得していない」「なかなか認識してくれない」というような状況で使用されているのではなく、聞き手がすでに「納得している」「認識している」というような状況で使用されているのである。

(61) 新垣「—前文省略—彼女が乗り込んできたことも、事故にあうことも、すべては運命」

名嶋(2007)は例(61)のような「のだ」を「念押しのノダ文」と呼んでいる。例(59)(60)(61)はいずれも「のだ」が前接する事象に聞き手が何らかの形(話し手から聞いているあるいは聞き手自身が認識した形)ですでに承知している事象が含まれている。これらの例では、話し手は、聞き手が何らかの形ですでに承知している事象を既定の事象としてあらためて断定・主張し、聞き手に当該事象を十分認識するよう働きかけている。そこから「強調」のニュアンスが生まれるのである。また、「のだ」は以上の例のように繰り返して発話する場合に、「本当に」「確かに」「どうしても」などの副詞と共起する場合が多い。こういった副詞も「強調」というニュアンスの伝達機能を担っていると考えられる。さらに、以上の例(59)～(61)を見ると、終助詞の「よ」と共起していることがわかる。「よ」はそれが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明し、聞き手が知っているべき情報を示し、注意を促すという機能がある¹⁶。「よ」と共起することによって、聞き手向けの機能が更に強化されており、訴えの強さの度合いも上がってくる。

また、「のだ」は話し手が秘密にしていたことや心の中で思っていたことを打ち明ける時にもよく用いられる。これらの事象は話し手だけが知っているはずのことで、聞き手には簡単に知りえないことである。また、前ぶれもなく突然発話される場合が多い。「のだ」がこのような場面で用いられる時、「実は」、「本当は」などの副詞・副詞句と共起し、「告白」のニュアンスを帯びる。

(62) そういうお達しを聞いてきたのは藤本で、彼はすこし慚然とした顔でぼくを喫茶店に誘い、「じつはここだけの話だけど、自分もあと半年ぐらいで会社やめるつもりなんだよ」と、ひくい声で言った。

(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

(63) 離婚の理由が、この縁談を反古にするものとは思えない。俺は主人の反応に少し腹を立ててそう言った。本当はどこの馬の骨かわからぬ安月給取りの大学の講師に、娘をやる気など俺にはないのだとまで言ってやった。

(宮本輝『錦繡』)

(64) お茶を淹れて来ると、伸子は自分でも、ゆっくりとそれをすすって、「大邸宅が

¹⁶ 白川(1992)、日本語記述文法会(2003)を参照。

建てられなかったわ」

「二人で住むなら六畳一間だって充分さ」

「二人？——いつかは三人か四人になるのよ」

「そのときはそのときさ」

と昌也は笑って、「ね、僕、大学やめて働こうかと思うんだ」

伸子の顔がこわばった。

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

例(62)、例(63)はそれぞれ「じつは」「本当は」と共起している。例(62)では、話し手が今まで秘密にしていた「自分もあと半年ぐらいで会社やめるつもりだ」ということを既定の事象として聞き手に提示し、聞き手はその情報を全く持っていないので、告白の調子を感じさせやすい。例(63)では、話し手が心の中で思っていた「どこの馬の骨かわからぬ安月給取りの大学の講師に、娘をやる気など俺にはない」ということを、既定の事象として聞き手に打ち明けている。例(62)より訴えかける感じが強い。例(64)では、「のだ」がなければ単なる事実を淡々と陳述することになる。「のだ」を使用することによって、話し手が前から心の中にある「大学やめて働こうかと思う」という内心のことを既定の事象として断定し、聞き手に特に伝えようとする働きが出てきているので、例(64)のような場面で告白のニュアンスを帯びやすい。

さらに、話し手は聞き手が知らないことを教えるという立場に立ち、話し手が持っている知識や経験などを聞き手に教え示し、言い聞かせる場合にも「のだ」がしばしば用いられる。

(65) 「おれはまだ二十七だ。当然、まだ独身でいい筈なんだよ。それが君、子供が二人も居て、生活に追われて、なさけないね。子供なんて、早く持つもんじゃない。三十過ぎてからで沢山だ。女房も三十過ぎてからでいいんだ。」

(石川達三『青春の蹉跎』)

(66) 「ぼくは、砂のことについちゃ、これでも、ちょっとばかり、くわしいんでね……いいですか、砂ってやつは、こんなふうに、年中動きまわっているんだ……その、流動するってところが、砂の生命なんだな……」

(安部公房『砂の女』)

例(65)の話し手は聞き手の従兄である。話し手が経験者の立場から「女房も三十過ぎてからでいい」という人生経験をすでに定まった事実として断定し、聞き手に提示している。聞き手には、「あなたは経験していないから知らないはずで、私は経験者の立場

からどうしていいかを教えてやる」というようなニュアンスを感じさせやすい。例(66)では、話し手は砂に関する知識を聞き手より詳しく知っている。「のだ」を用いて、話し手は砂に関して知っていることが定まった事実であるということを断定し、聞き手に主張している。よって、聞き手に教え聞かせるような口調が見受けられる。

田野村(1990:41-45)は、「のだ」の多用は、好意的に受け止めれば、話し手の知識の深さ、悪く考えれば、熟知や精通を装ったり、問題無用で信用を強制したり、自分が知的に優位にあることを誇示したり、權威の影をちらつかせたりしようとする話し手の姿勢を感じさせることが多い」と述べている。また、「のだ」がどのような印象を与えるかは、話の内容、話し手の口調、話し手と聞き手の関係、聞き手の側の受け止め方などにも依存する。したがって、「のだ」の多用が、必ず押し付けがましきや教え聞かせるような調子を感じさせるというわけではない」と述べている。以上の例(59)～例(66)と4.2.1の分析からも、「のだ」がどのようなニュアンスを表すか、聞き手にどのような印象を与えるかは発話状況、発話意図などといった語用論的な要因、条件と深く関わっていることが分かる。「のだ」の「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」という意味論的な意味は、これらの語用論的な要因や条件と結びつき、様々な語用論的な意味が生じてくるのである。

4.3 文末の「のだ」と終助詞「よ」との共起

文末の「のだ」は終助詞「よ」と共起し、多様な場面で頻繁に使われている。「のだ」と終助詞「よ」のそれぞれの先行研究の数は多いが、両者の関連性、共起する際の機能について言及するものは非常に少ない。

4.3.1 「よ」に関する先行研究

従来終助詞「よ」に関する先行研究は終助詞「ね」と対比して行われてきた。その数は膨大であるため、本研究は代表的なものを簡単にまとめておく。

大曾(1986:91)は、『ね』は原則として話し手と聞き手の情報、判断の一致を前提とする。『よ』は話し手と聞き手の情報、判断の食い違いを前提にしている」と指摘している。

益岡(1991:102)は、「ね」は、話し手自身が「有する知識や意向のあり方が聞き手が持っている」と想定される知識や意向のあり方と一致方向にある」との判断を示し、「一致型の判断」を表す時に用いられる。「よ」は、話し手自身が「有する知識や意向のあり方が聞き手が持っている」と想定される知識や意向のあり方と対立する方向にある」との判断を示し、「対立型の判断」を表す時に用いられる。

蓮沼(1995:391)は、「よ」は、認識上の何らかのギャップが存在する文脈で、認識能力の発動を促し、認識形成を誘導する標識である」と示している。

白川(1992:42)は、「よ」の機能について、「よ」はそれが付加された文の発話が聞き手に向けられていることをことさら表明する」という仮説を提案している。

野田(2002:276-277)は、「のだ」との共起を参考にして、伝達を表す終助詞の性質を確認した。「対人的「のだ」に自然に接続するのは、「よ」「ぞ」「ぜ」である。「よ」「ぞ」は、文の内容を聞き手に認識させようとする性質をもっており、「のだ」と共通性がある。「ぜ」は、積極的に聞き手の認識に影響を与えようとはしないが、「わ」や「さ」とは異なり、断定したことを聞き手に対して提示するものなので、「のだ」とともに用いられうるのだと考えられる」と述べている。また「教示的な指示や命令の「のだ」に自然に接続するのは、「よ」と「ぞ」である。いずれも、聞き手の認識に影響を与えようとする終助詞である」と述べている。しかし、野田(2002)はどの伝達の終助詞が「のだ」と共起できるか、伝達の終助詞と「のだ」の共通の性質について触れているだけで、「のだ」と「よ」の共起が具体的にどのような機能をもっているかについては深く考察していない。

本研究は先行研究を踏まえ、「よ」の機能を「発話の内容を聞き手が認識すべき情報として示し、それに対する注意を促し、その内容を認識すべきだという話し手の心的態度を表す」とまとめる。そして、「のだ」と「よ」の関係性、共起する際の機能に重点を置き、「のだ」の各用法における「よ」との共起が一体どのような機能をもっているかを明らかにし、両者の共起関係を解明する。

4.3.2 「のだ」と「よ」が共起する際の機能

本研究は、文学作品『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』の18冊の小説から「のだ」+「よ」の実例を370例抽出した。「のだ」の各形式と共起する数と割合は次の表4-2にまとめられる。

表 4-2

「のだ」+「よ」の数と割合

	のだ	んだ	のです	んです	その他	計
a. のだよ	15 (4.1%)	149 (40.3%)	43 (11.6%)	163 (44%)		370 (100%)
b. のだ	2148	1275	947	690	733	5793

a/b	0.7%	11.7%	4.5%	23.6%		
-----	------	-------	------	-------	--	--

表 4-2 で示したように、今回収集した「のだ」＋「よ」には、「んだよ」、「んですよ」の出現率が高い。「のだ」＋「よ」が口語的表現で多用されることがうかがえる。

「のだ」は 4.1.8 で考察した拡張義 5 以外に、「よ」と共起することができる。「のだ」のプロトタイプの意味、拡張義 1 と拡張義 2 が「よ」と共起するそれぞれの例は以下の例 (67)～(69) である。

(67) いかにも浜の食事らしく、それはいいのだが、食べはじめた彼の上に、女が番傘をひらいて、さしかけて来たのである。

「なんなの、それは……?」 なにか、この地方の、特別な風習なのだろうか?
「ええ……こうしないと、砂が入るんですよ、ご飯の中に……」

(安部公房『砂の女』)

(68) 思うに大学は大学で自分の正義をもっているし、学生にも学生側の正義はある。つまり正義と正義とが喧嘩をしているんだよ。

(石川達三『青春の蹉跎』)

(69) 玄關の靴とそっくりの、つまりちょっと薄汚れて、くたびれた感じの男が二人、座っていた。(中略)

「犯人は分かりましたの?」

「それを調べるために今日うかがったんですよ」

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

「のだ」は事象を成立させる背後の事情を説明したり、事象を別の角度から述べ直して説明したり、事象に特定要素を付加し述べ直して説明したりすることによって、聞き手に当該事象を理解、認識、納得させるために用いられる。「よ」は「発話の内容を聞き手が認識すべき情報として示し、それに対する注意を促し、その内容を認識すべきだと話し手の心的態度を表す」という機能をもっているため、両者は機能上共通しているところがあり、共起しやすい。例(67)～(69)では、「よ」は下降のイントネーションで発話される。「よ」を付けると、文の意味内容は変わらないが、当該事象の原因、意味などを聞き手にことさら主張し、認識してほしいというニュアンスが強く表される。よって、「のだ」のプロトタイプの意味、拡張義 1 と拡張義 2 が「よ」と共起する際、聞き手向けの機能がさらに強化され、情報の共有を促す働きがあると考えられる。

例(70)は「のだ」の拡張義4が「よ」と共起する例である。

(70) ところが、裸の女を抱いているというのに、どうも態勢が整わん。焦れば焦る程どうにもならん。そのときの情なさがお前に判るか。おい、俺は本当に哀しかったぞ。「それはきっと緊張してたんですよ。とにかく恋をしてたんですから。よくあることです。こんどはうまく行きますよ」と私は可笑しさをこらえて、慰めたり励ましたりしました。

(宮本輝『錦繡』)

拡張義4の「のだ」は独話に用いることができ、必ずしも聞き手が必須ではないので、基本的に聞き手を意識せず、丁寧さを考慮しない「んだ」「のだ」といった形をとっている。しかし、「よ」と共起して「のだ」は「んです」という形を取ることもできる。例(70)では、話し手は「ところが、裸の女を抱いているというのに、どうも態勢が整わん。焦れば焦る程どうにもならん」という事象をもとに、「それはきっと緊張していた」という認識、判断を導き出したことを「よ」を伴うことになり、聞き手に明示的に提示している。拡張義4が「よ」と共起する際には、話し手は確かな情報を持っていないが、事象をもとに導き出した認識、判断を聞き手により明確に提示するという機能が見られる。

「のだ」の拡張義3の語用論的な意味「強調」「告白」「教示」が「よ」と共起する際の例は以下である。

(71) 「でも、表に行ってみたって、べつにすることもないし……」
「歩けばいい！」
「歩くって……？」
「そうさ、歩くんだよ……ただ、歩きまわるだけで、充分じゃないか……」

(安部公房『砂の女』)

(72) そういうお達しを聞いてきたのは藤本で、彼はすこし無然とした顔でぼくを喫茶店に誘い、「じつはここだけの話だけど、自分もあと半年ぐらいで会社やめるつもりなんだよ」と、ひくい声で言った。

<=例(62)> (椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

(73) 「そりゃ、天井に砂が積っちゃ、具合わるいだろうな……だからと言って、砂

で梁が腐るってのはおかしいじゃないか。」

「いいえ、くさります。」

「しかし、砂ってやつは、もともと、乾燥しているものなんだよ。」

<=例(31)> (安部公房『砂の女』)

(74) 「(前略)中隊にゃお前みてえな肺病やみを、飼っとく余裕はねえ。見ろ、兵隊はあらかた、食糧収集に出動している。味方は苦戦だ。役に立たねえ兵隊を、飼っとく余裕はねえ。病院へ帰れ。入れてくんなかったら、幾日でも坐り込むんだよ。まさかほっときもしねえだろう。どうでも入れてくんなかったら——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんじゃないぞ。それが今じゃお前のたった一つの御奉公だ」

(大岡昇平『野火』)

例(71)～(74)からわかるように、「のだ」の拡張義3の「のだ」が「よ」と共起する際、聞き手向けの機能がさらに強化し、聞き手に認識してほしいというニュアンスがより強く表されている。特に、例(71)と例(73)のような例においては、「のだ」が「よ」と共起することによって、聞き手向けの機能が更に強化されており、情報の共有が促され、訴えの強さの度合いも上がってくる。「よ」も「強調」「教示」といったニュアンスの伝達機能を担っていると考えられる。

一方、「命令」を表す「のだ」が「よ」と共起する際、例(74)のように命令を和らげる効果が出てくる例がある。森山(2000:73-75)では、命令のプロトタイプを「現場命令」と「命令内容の告知」の二つを挙げている。「現場命令」を「その現場での行為実行を求めるものである」とし、その下位分類を「よし、行け」のように、「きっかけサイン」として使われるものと、「こら、座れ」のように、相手が逸脱していることを前提として、「違反矯正」として使われるものがある」と述べている。一方、「命令内容の告知」は「当該現場での行為実現の要求ではなく、要求の意図を告知することに重点が置かれたものである」としている。また、「のだ」は合図としての「きっかけサイン」(よし、今だ。行くんだ)と「違反矯正」(何をしている、さあ、はやく行くんだよ)で使われることができると述べている。また、命令形の「違反矯正」や「命令内容の告知」が「よ」と共起する際の意味と機能について論じているが、命令を表す「のだ」と「よ」と共起する際の意味と機能については言及していない。名嶋(2007:201)は森山の分類をもとに、「のだ」は「現場命令」だけではなく、「命令内容の告知」の場合でも用いられると述べている。そして、「命令内容の告知」の場合は「のだ」が必須で、「のだ」を用いないと例(77)のように、「話し手がある行為を行うコトを宣言している」ことになると指摘している。

- (75) 何かあったら呼んで下さいね。
(76) 何かあったら呼ぶんだ／呼ぶんですよ。
(77) #何かあったら呼ぶ／呼びます。

名嶋(2007:201)

名嶋(2007)は「のだ」の使用条件について考察しているが、「のだ」+「よ」の機能については論じていない。そこで、本研究は森山(2000)と名嶋(2007)を踏まえ、命令を表す「のだ」と「よ」が共起する際の機能について詳しく考察する。

まず、「現場命令」を表す「のだ」と「よ」の共起状況を見てみよう。

- (78) よし、今だ。行くんだ。(森山 2000:75)
(79) よし、今だ。行くんだよ。(?)
(80) 何をしている、さあ、はやく行くんだよ。(森山 2000:75)

例(79)のように、「きっかけサイン」の「現場命令」を表す「のだ」に「よ」をつけると、座りの悪い文になり、「よ」と共起する許容度は極めて低い。例(80)のように、「違反矯正」の「現場命令」を表す「のだ」は「よ」と共起することができる。森山(2000:73)では、「よ」(下降のイントネーション)が例(81)のような「違反矯正」の「現場命令」と共起すれば、「相手に特に強く要求するという意味になり、聞き手が現在違反状態にある、あるいは、話し手の要求が相手の意向とずれているという意味が強くなる」と述べている。

- (81) しゃべらないでくださいよ。

例(80)は(81)の命令形と同じく、下降のイントネーションを取る。聞き手が現在違反状態にある場合、「のだ」は「よ」と共起することによって、「はやく行くことが実行する行為としてすでに定まっている」という断定を聞き手に向けてさらに強く主張し、念を押すことになる。実行を促すというニュアンスがより強く出てくる。以上のように、「きっかけサイン」の「現場命令」を表す「のだ」は「よ」と共起する許容度は低い。一方、「違反矯正」の「現場命令」を表す「のだ」が「よ」と共起する際には、聞き手向けの機能がさらに強化され、「実行可能な行為」を相手により強く提示し、即実行するよう促す効果が見られる。

次に、「命令内容の告知」を表す「のだ」と「よ」の共起状況を検討してみよう。

(82) 私は意を決してまだ動き回っている鈴木に「帰ります。さようなら」をいい、鈴木は「気をつけて帰るんだよ」という。

<=例(54)> (高野悦子『二十歳の原点』)

(83) 「(前略)中隊にゃお前みてえな肺病やみを、飼っとく余裕はねえ。見ろ、兵隊はあらかた、食糧収集に出動している。味方は苦戦だ。役に立たねえ兵隊を、飼っとく余裕はねえ。病院へ帰れ。入れてくんなかったら、幾日でも坐り込むんだよ。まさかほっときもしねえだろう。どうでも入れてくんなかったら——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんじゃないぞ。それが今じゃお前のたった一つの御奉公だ」

<=例(74)> (大岡昇平『野火』)

森山(2000:73)では、「命令内容の告知」は「現場での行為に直接反映しなくても、聞き手はその話し手の要求する意図を理解するだけでよい。特に、確認や伝達に関わるといふ終助詞、「よ(H)¹⁷」や「ね」が付加する場合、命令の意図の伝達という意味になることが多い」と述べている。「気をつけて帰るんだ」という文には、「気をつけて帰る」という行動の発話現場での即実行を要求するのではなく、「発話時以降のある時点」において実現することが望ましい¹⁸という発話意図が表されている。例(82)では、「よ」は上昇のイントネーションになっている。「よ」をつけずに「気をつけて帰るんだ」にすると、聞き手に冷たい感じを与える。「よ」を用いることによって、聞き手との親近感をもたらす、親切に聞こえる効果がある。例(82)とは違って、例(83)の「よ」は下降のイントネーションを取る。「よ」が付加されない「幾日でも坐り込むんだ」「死ぬんだ」という文は定まっている行為を話し手の断定として提示し、発話時ではなく、病院へ帰る時点において行動の実現が望ましいということを表している。「よ」を使用することによって、聞き手に話し手の要求の意図への注意を促し、教示的に行為の指示をしている。相手への働きかけの度合いから見れば、「命令内容の告知」を表す「のだ」+「よ」は「教示」を表す「のだ」と「命令」を表す「のだ」の間に位置することができる。大曾(1991:47)は「命令」の「のだ」の文に「よ」が付いて「前もって注意を与えるという意味になる」と指摘している。以上の例からもわかるように、「命令内容の告知」を表す「のだ」+「よ」は聞き手に話し手の要求の意図への注意を促し、「命令」の気持ちを和らげる効果がある。

上に挙げた「のだ」+「よ」の機能は、以下のようにまとめることができる。

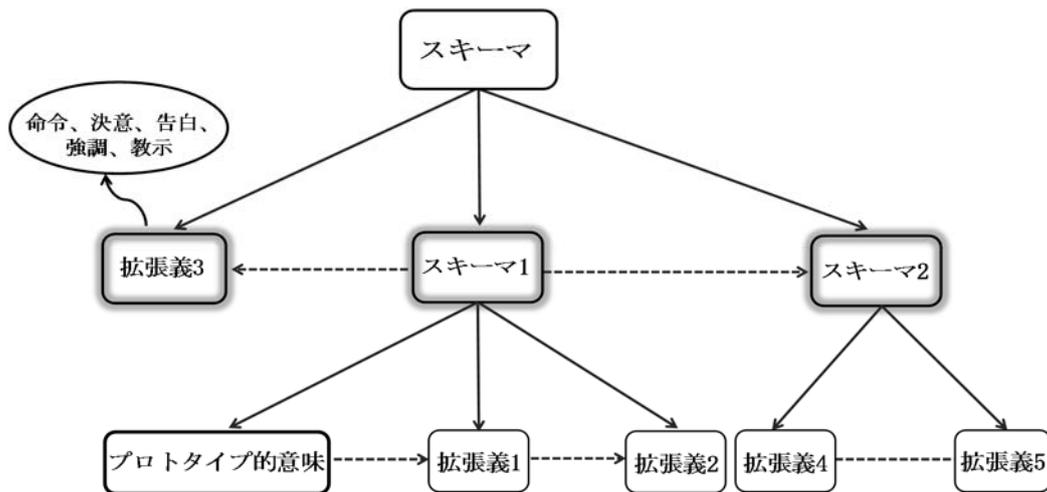
¹⁷ Hは上昇のイントネーションである。

¹⁸ 名嶋(2007:201)を参照。

- ① プロトタイプの意味、拡張義 1、拡張義 3 (拡張義 3 の語用論的意味「強調」「告白」「教示」を含む)、拡張義 2 の「のだ」＋「よ」
⇒ 聞き手向けの機能をさらに強化し、情報の共有を促す働きがある。
 - ② 拡張義 4 の「のだ」＋「よ」
⇒ 話し手の認識、判断を聞き手により明確に提示する機能を持つ。
 - ③ 「違反矯正」の「現場命令」を表す「のだ」＋「よ」
⇒ 聞き手向けの機能をさらに強化し、「実行可能な行為」を相手により強く提示し、即実行するよう促す効果がある
 - ④ 「命令内容の告知」の「のだ」＋「よ」
⇒ 命令の気持ちを和らげる効果がある
- 聞き手への働きかけの度合い：
「教示の「のだ」」→「命令内容の告知」の「のだ」＋「よ」→「命令の「のだ」」
→「違反矯正」の「現場命令」を表す「のだ」＋「よ」

4.4 まとめ

本章では、「のだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学のアプローチによって、「のだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、各意味間の拡張プロセスを考察した上で、「のだ」が有する複数の意味の拡張ネットワークの構造を明らかにした。また、「のだ」が「命令」「決意」と解釈される語用論的な条件を解明し、ほかの「強調」「告白」「教示」などの語用論的意味、機能についても考察し、「のだ」の「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」という意味論的な意味が、語用論的な要因、条件と結びつき、様々な語用論的な意味を生むことを明らかにした。さらに、「のだ」と終助詞「よ」と共起する際の機能について考察し、「のだ」＋「よ」は聞き手向けの機能をさらに強化する効果、話し手の認識、判断を聞き手に明確に提示する機能と命令の気持ちを和らげる機能をもっていることを確認した。「のだ」の意味論的意味と語用論的意味のネットワークを示した意味構造は以下の図 4-9 である。



(破線の矢印は拡張関係<メタファー>、実線の矢印はスキーマ関係<シネクドキー>を表し、
波線の矢印は語用論的な派生関係を表す)

図 4-9 「のだ」の意味構造

「のだ」のプロトタイプの意味：ある事象を、ほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 1：ある事象を、ほかの事象を別の角度から述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 2：ある事象を、ほかの事象に特定要素を付加して述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

「のだ」の拡張義 3：ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する。

「のだ」の拡張義 4：ある事象を、ほかの事象から導き出されているものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

「のだ」の拡張義 5：ある事象を、ほかの事象をそのままの形で認識するものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

(局所的)スキーマ 1：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する。

(局所的)スキーマ 2：ある事象を、ほかの事象と関係づけるものとして客体化し、それを話し手の認識・判断として提示する。

スーパースキーマ：ある事象を客体化し、それを提示する。

第5章 「ものだ」の意味の認知言語学的・語用論的考察

「のだ」と成り立ちが類似している助動詞に「ものだ」がある。「のだ」と「ものだ」はそれぞれ複数の意味と用法があり、組成が類似しているだけでなく、意味、用法の面においても類似している。「のだ」と対照させるには、「ものだ」が適切な選択だと考える¹⁹。本章は肯定平叙文文末の助動詞「ものだ」を取り上げ、認知言語学と語用論の観点を援用し、「ものだ」の意味について分析する。まず5.1では、認知言語学の理論的枠組に基づき「ものだ」の多義構造を分析する。5.2では、「ものだ」の「当為」「詠嘆」などの語用論的意味について考察し、特に「当為」と解釈される語用論的な条件を究明する。5.3では、「のだ」と「ものだ」の類似する意味、用法について考察し、その共通点と相違点を明らかにする。5.4は本章のまとめである。

5.1 文末の「ものだ」の多義構造

本節では、まず5.1.1で「ものだ」の文と名詞述語文との関係を確認し、「ものだ」の文の構造を明らかにする。次に、5.1.2で国語辞典における「ものだ」の意味の記述を確認する。最後に、5.1.3～5.1.8で「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を記述し、各意味の相互関係についても考察した上で、「ものだ」の複数の意味をネットワークとして示す。

5.1.1 文末の「ものだ」の文と名詞述語文との関係

「ものだ」は形式名詞の「もの」に断定を表す助動詞「だ」が後接し、それが一語化して、一つの助動詞として用いられているモダリティ形式である。「もの」は、実質的な意味を有する名詞から形式名詞、助動詞などの機能語へと変化しており、典型的な文法化の一例である。「ものだ」の意味を考察する前に、「ものだ」の文と名詞述語文の「PはQものだ」との関係を確認する必要がある。

日本語記述文法会(2003:192-193)は、「もの」は名詞として用いられているのか、助

¹⁹ 「のだ」と似た組成をもつ助動詞に「ことだ」もあるが、意味、用法のいずれにおいても、「ことだ」より「ものだ」のほうが「のだ」に類似している。また、実際の日本語の会話、文章においては、「ことだ」の使用条件が狭く(忠告と感心・あきれの用法しかない)、使用回数も少ない。

動詞の「ものだ」として用いられているのかという区別が困難な場合があると指摘している。

- (1) これは、手紙の封を切るものだ。
- (2) これは、手紙の封を切る道具だ。
- (3) 人間というのは、孤独なものだ。
- (4) 人間というのは、孤独な生き物だ。
- (5) うれしいときには、うれしそうな顔をするものだよ。

日本語記述文法会(2003:192-193)

例(1)から例(2)のように、「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えても意味が変わらず、「ものだ」に「もの+だ」という意味以外の特別の意味合いが感じられない場合は、名詞の「もの」であるとされている。つまり、例(1)のような「ものだ」文は名詞述語文で、「もの」は代名詞的に機能している。また、例(3)の「ものだ」は、例(4)のように「もの」を実質的な名詞で置き換えることはできるが、「ものだ」に「もの+だ」という意味以外の特別の意味合い(本質や傾向を表すなど)が感じられ、中間的ではあるが、助動詞の「ものだ」であるとされている。さらに、例(5)の「ものだ」の「もの」をほかの実質的な名詞で置き換えることができない場合は、助動詞の「ものだ」と述べている。

本研究では日本語記述文法会と同じ立場に立ち、例(3)のような「ものだ」を助動詞とする。例(1)のような名詞述語文の「ものだ」は、主題Pが「これ」という指示代名詞、また例(6)の「この壁の油絵」、例(7)の「この石柱」は特定のものを指す名詞、つまり個体を表すものである。「もの」はそれぞれ「道具」、「油絵」、「石柱」で置き換えても意味が変わらない。

- (6) この壁の油絵は、ここにいた生徒が描いたものです。

(立原正秋『冬の旅』)

- (7) いつか大牟呂さんが、この石柱は何代か前の先祖が建てたものだと云っていた。

(井伏鱒二『黒い雨』)

例(3)のような非特定の総称的な名詞「人間」になる場合、「ものだ」は「本質や傾向を表す」という「もの+だ」以外の意味をもつようになる。従って、本研究は例(3)のような「ものだ」は形式名詞から助動詞へと変化する文法化の過程において生じた中間的なタイプだと認定する。「PはQものだ」には、名詞述語文と助動詞文という二つのタ

イブの文がある。二者の間にははっきりとした線を引くことはできないだろう。とは言え、文末の「ものだ」を取っても文の成立に影響を及ぼさない、しかも「もの+だ」以外の特別な意味をもつ以上、助動詞として見なすべきであると考え。例(5) 例(8) 例(9) のような「ものだ」は助動詞として完全に文法化している。

(8) 人の話では、お妾は普通、用が無くなると、捨てられるものですって。
(太宰治『斜陽』)

(9) 「僕の位置にいれば君はそんなあつかましいことは出来なくなる」
「恋はあつかましくなければ出来ないものだよ」
「本当の恋はあつかましいものには出来ない」
(武者小路実篤『友情』)

5.1.2 国語辞典の「ものだ」についての記述

「ものだ」の多義構造を分析する前に、まず国語辞典における「ものだ」の意味の記述を確認する。本論文は、総合的な国語辞典から代表的なものを8冊選定し、「ものだ」の意味記述を調べた。詳細は以下の表5-1になる。

表5-1

辞典における「ものだ」の意味記述

出典	「ものだ」の意味記述
『国語辞典』第三版 集英社 (2012:pp. 1812-1813)	もの【物】 ⑧((形式)) (「一だ」の形を取って) ⑦当然そうすべきだの意を表す。 ④そういう事実が一般にあるという意を表す。 ⑤感動・強調の意を表す。回想・希望の語法をとることも多い。
『大辞泉』第二版下巻 小学館 (2012:p. 3611)	もの【物】□〔名〕 5他の語句を受けて、その語句の内容を体言化する形式名詞。 ④感動する気持ちを強調して示す。 ⑤(「…するものだ」の形で)それが当然であるという気持ちを示す ⑥(「…したものだ」の形で)過去を思い出してなつかしむ気持ちを示す。
『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店	もの【物】□〔名〕 ⑨《「…一だ」の形で、活用語の連体形を受けて》

(2010:p. 1733)	<p>㉞《助動詞的に》本性、当然、当為などを表す。</p> <p>㉟《助動詞的に》感動・詠嘆を表す。</p> <p>㊱《「…だ」の形で、過去の助動詞「た（だ）」を受けて、助動詞的に》過去の経験を感慨を込めて回想・確認する。</p>
『日本国語大辞典』 第二版第十三巻 小学館 (2008:p. 1356)	<p>もの-だ〔連語〕(名詞「もの」に断定の助動詞「だ」の付いたもの)活用語の連体形を受け、強調の気持ちをこめる。</p> <p>㊲《「…ものだ(もので)」、または「ものじゃ」の形で用いる。</p> <p>①物事を客観的に説明し、一般的にそうである、という意を強調する。</p> <p>②感慨をこめて物事を詠嘆的に述べる。</p> <p>①現在の事実や心境についていう場合。</p> <p>②過去の出来事や過去の習慣的なことなどを回想していう場合。</p> <p>③希望の「たい」や様態の「そうだ」などをを受けて、希望や推量の気持ちを強調する。</p> <p>④当然すべきである、または、そうしてはいけないという意を強調する。</p>
『小学館日本語新辞典』 第一版 小学館 (2004:p. 1678)	<p>もの㊳〔名〕</p> <p>㊴他の語句を受けて、これを名詞化する働きをする。</p> <p>㊵感慨、感動を表す。</p> <p>㊶(「…するものだ」などの形で)当然そうすべきであることを表す。</p> <p>㊷(「…したものだ」などの形で)過去のできごとの述懐を表す。</p> <p>㊸(「…するものだ」などの形で)一般的な事実であることを表す。</p>
『大辞林』第二版新装版 三省堂 (1999:p. 2561)	<p>もの【物】㊹(名) ㊺(形式名詞)</p> <p>①(「…ものだ(である)などの形で」)</p> <p>㉞普遍的な傾向。</p> <p>㉟なすべきこと。</p> <p>㊱過去にしばしば起こったこと。</p> <p>②(「…ものだ」の形で)感動・詠嘆を表す。…なあ。</p>
『学研国語大辞典』 第二版 学習研究社 (1998:p. 1951)	<p>もの【物】㊻《形名》</p> <p>①「そうなるのが」当然・普遍である意を表す。</p> <p>②感慨・感動の意を表す。</p> <p>③(「…した-」の形で)過去の事柄を述懐して言う語。</p>
『国語大辞典 言泉』 第二版 小学館 (1989:p. 2299)	<p>もの【物】㊼</p> <p>㊽他の語句を受けて、それを一つの概念として体言化し、話し手のさまざまな気持ちを表す。</p> <p>②感慨や感動の気持ちを表す。</p>

	<p>③ (「…するものだ」の形で) 当然そうであるという気持ちを表す。</p> <p>④ (「…したものだ」の形で) 過ぎ去った事柄を述懐する気持ちを表す。 何度もうり返し行われた行為について言うことが多い。</p>
--	---

以上の各辞典が記述している「ものだ」の意味を確認すると、各意味項目はほぼ国語学・日本語学の先行研究で指摘された「本質、本性、一般的傾向性」、「当為」、「回想」、「感慨・驚き」などと呼ばれている意味と合致している。「ものだ」の第一の意味として「本性、一般的傾向性」または「感慨・驚き」を記載している辞典が多い。また、「当為」などの「ものだ」の語用論的な意味について他の意味論的意味と混在して記述しているものがある。しかし、「感慨・驚き」を表すものには、例(10)のように、「一般的傾向性」に反する事態をそのまま表現し驚きを表すものもあるが、例(11)のように、「一般的傾向性」を再認識し、そこから語用論的に生じてくるものもある。

(10) それにしても大火傷をした身で逃げきって、よくも命びろいをしたものだ。

(井伏鱒二『黒い雨』)

(11) 「家は浅草の銘酒屋なんですよ、——彼奴に可哀そうだと思って、今まで誰にも云ったことはありませんがね」

「ああ、そうですか、やっぱり育ちと云うものは争われないもんですなあ」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

さらに、「当為」という意味は「ものだ」が本来持っている意味ではなく、ある語用論的な条件に満たしている文脈で発話される場合に、聞き手の語用論的推論より導き出されるものである。本章も日本語教育の立場に立ち、辞典に列挙された一つ一つの独立した意味がどのような形や動機づけで結ばれているかを明らかにし、「ものだ」のプロトタイプの意味を中心とする意味ネットワークを究明する。次節では、「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を記述し、その意味拡張のプロセスを考察した上で、「ものだ」の意味ネットワークを示す。

5.1.3 文末の「ものだ」のプロトタイプの意味

「ものだ」のうち最も実例が多い用法は、寺村(1981)が言う「本質・本性」の用法である。靱山(1992)は、この「ものだ」の意味を「本性、本質」等よりも<一般的傾向性>を表すと考えた方がよいとまとめている。奥田(2008)は、この「ものだ」は助動詞に相当する「ものだ」のうち最も使用例が多い用法であると述べている。本研究で収集し

た 1146 例の「ものだ」でも、この「ものだ」の例が一番多く、延べ 421 例あった。

- (12) その他、合算していけば、かなりの額になるはずである。信じられないといっても、事実なのだ。男は、女以上に、ものの破片や断片に耽溺する傾向があるものだ。

(安部公房『砂の女』)

- (13) 普通歲月というものはいったん過ぎ去ってしまえば、あっけないほど短く単純に感じられるものである。

(北杜夫『楡家の人びと』)

- (14) 「聞くつもりはなかったんだが、聞かないわけにはいかなかった。ずっとそばについていたものでね。熱にうなされると人はうわごとを言うものだ。べつに恥かしがることはない。(後略)」

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

- (15) 「先生、ぼくはなんだか不安なんです」
応接間に来て、加藤は立ったままでいった。
「話すがいい、立っていた方が話しよければ、そのままいうんだな、たいていのことは話してしまえばさっぱりするものだ」

外山は静かな眼を加藤に誘うように投げかけていった。

(新田次郎『孤高の人』)

- (16) 人は屢々、看護していた病人が最後の息を引き取る時とか、又は大地震に出っ会した時とかに、覚え知らず時計を見る癖があるものですが、私はその時ふいと時計を出して見たのも大方それに似たような気持だったでしょう。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

以上の例をみると、「ものだ」が前接するものがそれぞれ「男は、女以上に、ものの破片や断片に耽溺する傾向がある」、「普通歲月というものはいったん過ぎ去ってしまえば、あっけないほど短く単純に感じられる」、「熱にうなされると人はうわごとを言う」、「たいていのことは話してしまえばさっぱりする」、「人は屢々、看護していた病人が最後の息を引き取る時とか、又は大地震に出っ会した時とかに、覚え知らず時計を見る癖がある」というような一般的な出来事を表す事象である。「P は Q ものだ」という構文の構造が、「主語＋＜述語節(連体修飾節)＋もの＋だ＞」から「＜主語＋述語(節)＞

＋もの＋だ」に変更され、「ものだ」は命題に付加されるような形になる²⁰。本研究では、助動詞として一語化された「ものだ」の構文を「X(PはQ)ものだ」という構造で捉える。話し手は「ものだ」を使用することによって、以上の例の事象Xを「一般的にこうであるという存在」として捉え、それを自分の判断または主張として提示する。このような「ものだ」の主題Pは普通「男」「歳月」「人」のような非特定の総称的な名詞であり、つまりグループを表すものである。または例(5)のように、「うれしいときには」あるいは「～では」「～たら」などで表される状況である。

このような「ものだ」は助動詞として一語化されたとは言え、「もの」の影響が色濃く残されていると思われる。原田・小谷(1991)は「もの」を「不変的存在物」としている。坪根(1994:66)は、「もの」は個別的な特定の対象を指すのではなく、一般化された存在物である。それは時間軸とは関係なしに存在する、「不変的な一般的存在である」と述べている。また、揚妻(1991:9)は、「実質名詞の「もの」の表すものは、客観的世界に属していて、その属性もやはり客観的である。形式化した「ものだ」にもその性質は連なっている」と述べている。「もの」のこれらの意味特性は、助動詞化した「ものだ」にも現われている。例(13)では、話し手が前接する事象Xを「一般的に歳月というものはいったん過ぎ去ってしまえば、あっけないほど短く単純に感じられる存在」として捉え、例(14)では、話し手が前接する事象Xを「一般的に熱にうなされると人はうわごとを言う存在だ」として捉えている。「ものだ」は前接の事象Xを「一般的にこうであるという存在」として客体化し、それを話し手の判断・主張として相手に提示することになる。つまり、話し手が相手に提示しているのは自己判断ではなく、「ものだ」を借りて、客体化した一般論的なものを自分の判断・主張として提示している。「ものだ」を使うと客観的に聞こえるのはこれに起因していると考えられる。また、例(13)例(16)から、「ものだ」はよく「普通」「屢々」などの副詞的な要素と共起することがわかる。

本研究では以上の分析と先行研究を踏まえ、このような「ものだ」の意味を「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」とまとめる。「ものだ」のこの意味を第一の意味として記載している辞典が多い。その上で、他の意味と比べて使用数が最も多い。「ものだ」のこの意味は基本的であり、使用頻度が高いと言える。「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」という意味は、他の意味と比べて典型性を有しているので、この意味を「ものだ」のプロトタイプの意味と認定する。

「ものだ」のプロトタイプの意味：ある事象を一般的にこうであるという存在として客

²⁰ 井島(2012:115)を参照。

体化し、それを話し手の判断・主張として提示する。

5.1.4 拡張義1

「～たものだ」という形を取り、先行研究で「回想」、「追想」と呼ばれている例を検討してみよう。

- (17) 廓を流して行く焼栗屋のにぶい声を聞いていると、妙に淋しくなってしまうて、暗い部屋の中に私は一人でじっと窓を見ている。私は小さい時から、冬になりかけるとよく歯が痛んだものだ。まだ母親に甘えている時は、畳にごろごろして泣き叫び、ビタビタと梅干を顔一杯塗って貰っては、しゃっくりをして泣いている私だった。

(林芙美子『放浪記』)

- (18) 商売柄か親父は国民服をきらって背広にソフト、丸坊主にせず、痩せてはいたが身の丈六尺に近く、辰郎は一緒に歩く時、いつも誇らしく感じたものだ。

(野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』)

- (19) 日本にいた頃も、田舎にいる小学生の従弟の友達などは何十人いてもその名を全部覚えていたものだ。

(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

- (20) あの頃、町には城ヶ島の唄や、沈鐘の唄が流行っていたものだ。

(林芙美子『放浪記』)

例(17)～例(20)では、「X(PはQ)ものだ」における主題Pは個体である。例(17)、例(18)では、「ものだ」に前接しているXは「私は小さい時から、冬になりかけるとよく歯が痛んだ」、「辰郎と一緒に歩く時、いつも誇らしく感じた」という過去の繰り返しの行為、習慣的な行為である。また例(19)、例(20)では、「ものだ」に前接しているXは「日本にいた頃も、田舎にいる小学生の従弟の友達などは何十人いてもその名を全部覚えていた」「あの頃、町には城ヶ島の唄や、沈鐘の唄が流行っていた」という過去の継続的な状態である。例(19)のように、Pが一人称であれば、明示されないこともある。それに、このような「ものだ」は「いつも」、「よく」などの副詞と頻繁に共起し、過去を回想し、懐かしいという情緒があふれている。本研究は、このような「ものだ」の意味を「ある事象を過去の習慣的行為、継続的状态を持つ存在として客体化し、それを思い起こして

示す」とまとめる。このような「ものだ」は、「～たものだ」という形を取ることを除けば、プロトタイプの意味の「ものだ」と構文上同じ構造を成している。「ものだ」のプロトタイプの意味は現在の一般的、普遍的な事象に焦点を当てているのに対して、上記の「ものだ」の意味(以下、拡張義1と呼ぶ)は、現在の一般的、普遍的な事象から、概念上の関連性のある過去の習慣的行為、継続的状态へと焦点が移行している。つまり、「ものだ」のプロトタイプの意味から拡張義1への意味拡張は概念上の関連性による「メトニミー」である。プロトタイプの意味と拡張義1の拡張関係を以下の図5-1のように示す。

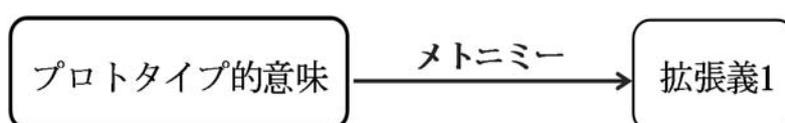


図 5-1 プロトタイプの意味と拡張義 1 の拡張関係

「ものだ」のプロトタイプの意味：ある事象を一般的にこうであるという存在として客
体化し、それを話し手の判断・主張として提示する。

「ものだ」の拡張義 1：ある事象を過去の習慣的行為、継続的状态を持つ存在として客
体化し、それを思い起こして示す。

例(21)の場合、主題 P は総称的な名詞「商家の娘」になっている。坪根(1994: 72)は、このような例は「過去における本性・性質を表す文」であるとも言えると述べ、また「単に事実として過去における習慣的事柄を述べる」と論じている。本研究では、このような例は「ものだ」のプロトタイプの意味が拡張義 1 へと拡張していくプロセスにおいて生じた中間的なタイプと見なす。

(21) おれんは娘の時代から、お針がうまかった。そのころの習いで、商家の娘はみんな、したて屋にお針のけいこに行ったものである。

(山本有三『路傍の石』)

5.1.5 拡張義 2

「あの人も年取ったものだ」のような、ある種の感慨を表す「ものだ」と、「よくあんなことが言えるものだ」のような、驚きを表す「ものだ」は、同じく話し手の抱いている感情・感慨を表すが、本研究ではこの二つの意味の拡張メカニズムは異なると考え、

別々に分析することにする。以下の「感慨」の例を検討してみよう。

- (22) 二十ばかりの書名がスクリーンにあらわれた。彼女はライトペンを使ってそのうちの三分の二ばかりを消した。そしてそれをメモリーしてから、こんどは『こっかく』という単語をうった。七つか八つの書名が出てきて、彼女はそのうちの二つだけを残し、前のメモリーぶんの下にそれを並べた。図書館も昔に比べれば変わったものだ。貸出しカードが袋に入って本のうしろについていた時代が夢のようだ。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

- (23) 「おまえも、お茶ぐらい、いっしょに飲んだらどうだ？」と言うと、「いいえ、欲しくないのよ」と答えて、顔も上げなかった。重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくを見た。女房も年齢をとったものだ。これくらいになると、亭主が飯を食っていても、茶のつき合いをする気もおこらぬらしい。

(松本清張『点と線』)

- (24) 「鉄橋にぶらさがって、先生に叱られた時のことなんか思うと夢のようです。」
「しかし、貴様も大きくなったものだなあ。」

(山本有三『路傍の石』)

この類の「ものだ」は一般的に、「<PもQ(なった、変わった)>ものだ」という構文で現れ、Pは個体である。以上の三つの例では、「ものだ」に前接するXはそれぞれ「図書館も昔に比べれば変わった」、「女房も年齢をとった」、「俺もずいぶんけちになった」という事象である。例(22)では、話し手は図書館の過去の「貸出しカードが袋に入って本のうしろについていた」という継続的な状態と対照し、過去の状態より変化した図書館の現在の状態に注目し、過去と比べてこのように変わっている、という感慨の感情が生まれている。例(23)で重太郎は昔女房の若かった様子、状態を思い出し、今は昔と比べて年をとったという変化に視点を移して、感慨の気持ちを表している。同様に、例(24)でも、聞き手の過去の様子と比べて今は大きくなったという感慨を表している。このような「ものだ」の意味を「ある事象を過去から状態が変化した存在として客体化し、それに対する話し手の感慨の気持ちを示す」とまとめる。「ものだ」の拡張義1の意味は過去の習慣的行為、継続的状态に焦点を当てているのに対して、上記の「ものだ」の意味(以下、拡張義2と呼ぶ)は、過去より変化した現在の状態に焦点が移行されている。「ものだ」の拡張義2はプロトタイプの意味からの拡張ではなく、拡張義1から時間的隣接性による「メトニミー」を通してさらに拡張されていると考える。その拡張関係を以

下の図5-2で表す。

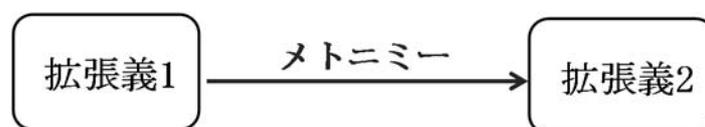


図 5-2 拡張義 1 と拡張義 2 の拡張関係

「ものだ」の拡張義 1：ある事象を過去の習慣的行為、継続的状态を持つ存在として客体化し、それを思い起こして示す。

「ものだ」の拡張義 2：ある事象を過去から状態が変化した存在として客体化し、それに対する話し手の感慨の気持ちを示す。

5.1.6 拡張義 3

次に、先行研究でいわゆる「驚き」と分類された例を検討してみよう。

(24) しかしそれにしても、ちょっとした植木鉢くらいの大きさのハニワが、よくも千五百年以上もの間、生き残っていたものだと思う。

(曾野綾子『太郎物語』)

(25) この登録上のマネージャーは、内藤が練習をさせてもらっている金子ジムに、ただの一度も足を運ぶことがなかった。金子に一言の挨拶もなく、内藤の練習を一回も見にこなかった。それでよくマネージャー面ができるものだ。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(26) それは入念に探された。しかし、どのポケットにも遺書らしいものはかくされていなかった。一万円たらずの現金、ハンカチ、靴ベラ、折りたたまれた昨日の新聞、皺になった列車食堂の受取証。

「列車食堂の受取証？妙なものを持っているもんだね」

(松本清張『点と線』)

(27) 強い力は加藤を新聞記者の囲みからひっぱり出すと、駅の前に待たせてある自動車におしこんだ。自動車に乗ってから、加藤は相手が藤沢久造であることを知った。

「えらいことをやったものだ」

藤沢久造は加藤にひとこといっただけだった。

(新田次郎『孤高の人』)

- (28) その頃中学生で鎌倉にいた私は、級友だった吉野氏の子息の吉野壮児からこのことを伝え聞いて凄い人がいるものだと感心した。

(小林秀雄『モオツァルト・無常という事』)

- (29) 「ひでえ親があるもんだな」あるきながら彼は呟いた、「話には聞いたこともあ
るが、本当にそんな親があるのかな」

(山本周五郎『さぶ』)

この類の「ものだ」は主に以下のような構文をなしているものからなる。

- A. < Pは/が(よく) Q(できる/できた、する/したなど) >ものだ。

(例(24)～例(27))

- B. < (世の中には) Pも/が Q(ある/あった、いる/いたなど) >ものだ。

(例(28)～例(29))

例(24)～例(27)では、「ものだ」に前接するXはそれぞれ「ちょっとした植木鉢くらい
の大きさのハニワが、よくも千五百年以上もの間、生き残っていた」、「(この登録上
のマネージャーは)それでよくマネージャー面ができる」、「妙なものを持っている」、「え
らいことをやった」という事象で、「一般的傾向性」と反する性質を持っている事象で
ある。坪田(1994)では、「一般的」とは「そうでないこともあり得るが、そういう傾向
が強い」ということであると述べている。例(24)～例(27)の裏側には「一般的に、ちょ
っとした植木鉢くらい大きさのハニワは千五百年以上もの間、生き残らないものだ」、
「普通マネージャーをする人はそれでマネージャー面はできないものだ」、「(普通の人
は)一般的に列車食堂の受取証を持ってないものだ」、「普通の人)一般的にこのよう
なことをしないものだ」がある。つまり、「ものだ」に前接するこれらの事象Xは「一
般的傾向性」に反する事実である。例外の事象を提示することによって、話し手の驚き
の気持ちを表しているのである。例(24)～例(27)では「ものだ」は動詞の非過去形・過
去形と可能表現に接続するが、副詞「よく」や「妙な」「えらい」などの常識との不
一致を表す評価表現、程度表現と共起している。「ものだ」に前接する事象Xが「一般的
傾向性」の例外的な事実、「一般的傾向性」に反する事象を示すためには、何らかの副
詞的要素、評価表現、程度表現と共起しなければならないと考えられる。

例(28)、例(29)では「ものだ」に前接する X はそれぞれ「凄い人がある」「ひでえ親がある」という事象で、これらも「一般的傾向性」に反する事象である。例(28)、例(29)の裏面には「世の中には一般的にこんな凄い人はいないものだ」、「世の中には一般的にこんなひどい親はいないものだ」がある。例(28)、例(29)も「凄い」「ひどい」のような程度表現と共起しなければならない。これもやはり「ものだ」に前接する事象 X を「一般的傾向性」に反する事象として示すためであろう。本研究はこのような「ものだ」の意味を(以下、拡張義 3 と呼ぶ)「ある事象を一般的傾向性と反する性質を持つ存在として客体化し、それに対する話し手の驚きの気持ちを表す」とまとめる。プロトタイプの意味が前接する事象 X と、上記の「ものだ」が前接する事象 X' は正反対の性質を持っており、概念上の関連性が見受けられる。拡張義 3 の意味の焦点が反対の性質を持っている事象に移行しているため、「ものだ」のプロトタイプの意味から拡張義 3 への意味拡張は、概念上の関連性による「メトニミー」である。以下の図 5-3 で示す。

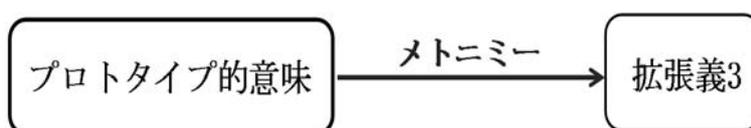


図 5-3 プロトタイプの意味と拡張義 3 の拡張関係

「ものだ」のプロトタイプの意味：ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する。

「ものだ」の拡張義 3：ある事象を一般的傾向性と反する性質を持つ存在として客体化し、それに対する話し手の驚きの気持ちを表す。

さらに、「ものだ」がイ形容詞の非過去形、ナ形容詞、状態動詞（困った、あきれたなど）に接続する時、「ものだ」の構文は以下の C 類の構文なる。

C. Q (ひどい、気の毒な、あきれたなど) ものだ。

(30) 「そしたら、そのホステス、何て言った？」

「そうよ、お客だから、こうしてガマンしてあげてんじゃないのと言ったんだ」

「ひどいもんだね」

(曾野綾子『太郎物語』)

(31) テレビの解説者は、はじめアリを批判し、もう齢だ、衰えがきているなどと言

っておきながら、次第に優勢になっていくにつれて、さすがにアリなどと讚め出す。いい加減なものだ。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(32) 「あの小娘の上に荷物を落っことしたり、ネズ公入りのチョコレートをプレゼントしたり……。みんなこの柳のやったことだ」

「呆れたものだな」大畑が柳をにらみつけた。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

例(30)～(32)では、話し手は一般的傾向性、普遍性に反する事象に対して直接評価を下している。これらの「ものだ」はそれぞれ「よくあんなひどいことが言えたものだね」、「よくこんないい加減なことができるものだ」「よくこんなことができるものだ」に書き換えられる。これらの例では、「よくあんなひどいことが言えた」「よくこんないい加減なことができる」「よくこんなことができる」は言語化されていないが、話し手の頭の中では存在している。C類の構文になると、「ものだ」は終助詞的な働きをもつようになり、終助詞に近づいていると考えられる。西田(1997)は「終助詞は、述語の終末部にあって、内容的、意味的なもとまりを形成した文の叙述や判断を受けて、それに対する話し手の感動や詠嘆を表出したり、疑問、希望、禁止などをつけ加えることによって聞き手への働きかけの態度を表明したりして、文を完結させる役割を担うものである」と終助詞を定義している。C類の「ものだ」は評価を表すイ形容詞の非過去形、ナ形容詞、状態動詞に接続し、話し手の感心、あきれを表出し、終助詞の「な(あ)」の機能に近づいていると考えられる。C類の「ものだ」はより文法化が進んでいるものとみなす。

5.1.7 「解説」の「ものだ」

従来の研究では、この「解説」の「ものだ」を助動詞とする立場と助動詞として認めず、名詞述語文あるいは名詞述語文に近いものに位置づける立場がある。前者は寺村(1984)、尾方(2000)、吉川(2003)などがあり、後者は揚妻(1990)、奥村(2005)、北村(2002)(2005)などが挙げられる。解説の「ものだ」は新聞記事でもっとも頻繁に用いられる。小説などには、少ないがまれに使われることもある。以下、新聞記事と小説に用いられた例を挙げて検討しよう。

(33) イスラエル側には、ガザからの一方的な撤退案をパレスチナ側と協力して進めるよう改め、撤退の対象に西岸を含めるよう求めた。ガザ撤退を理由に西岸入植地を維持し続けるのではないかとの懸念に応えたものだ。

(朝日新聞2005. 2)

- (34) 記者会見で木村氏は、小穴氏の社長退任を「健康上の理由」と説明。落合氏が経営陣刷新を求めて臨時株主総会開催を請求している問題をめぐり、「小穴氏に過度な負担をかけるわけにはいかなかった」とも述べた。落合氏との対立がいまだに経営に影を落としていることを示唆したものだ。

(朝日新聞2005. 2)

- (35) 工場長は野辺送りした僕の報告を聞くと、在木カネの介抱していた充田タカという被爆者が死んだので、僕に葬式のお経を読めと云った。充田タカという女は、従来この工場の炊事場へ広島市内から浅蜷や雑魚を売りに来ていた闇屋である。それが一昨日の空襲で被爆して顔と両手に傷を受け、今朝がた在木カネを頼ってここの炊事場へ辿りついたものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

- (36) 聞けば、シゲ子たちが広島から帰って来ると、二人の客が縁側にしょんぼり腰をかけていたと云う。僕らの安否を気づかって、山奥の村からわざわざやって来たものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

「解説」の「ものだ」は基本的に「～たものだ」という形を取る。寺村(1984:302)は、その用法を「既に起った事件、現象、状態について、どういう成り行きでそうなったのか、その原因は何か、その背後の事情は何か、などを解説的に述べる」と説明している。例(33)について、「(前略)撤退の対象に西岸を含めるよう求めた」という事象の原因、背後の事情は、「ガザ撤退を理由に西岸入植地を維持し続けるのではないかとの懸念に応えた」という事象になると解説している。例(36)について、「二人の客が縁側にしょんぼり腰をかけていた」という事象の背後の事情は、「僕らの安否を気づかって、山奥の村からわざわざやって来た」という事象であると解説している。これらの「解説」の「ものだ」の例では、Pは先行文脈に示された事象であり、文中に主題が名詞の形で示されていない。また、「もの」を実質的な名詞で置き換えることはできない。その上、「ものだ」は統語的な制約を受けることなく、省略しても文は非文にならない。例えば例(34)の文末の「ものだ」を省略した場合、「落合氏との対立がいまだに経営に影を落としていることを示唆した」という陳述文になり、単に事実を述べているだけである。「ものだ」が付いていると、客観的な解説をしていることを提示しているように見受けられる。従って、本研究は「解説」の「ものだ」を文法化されたものとみなし、助

動詞的な機能を果たしていると考え。その意味を「ある事象を他の事象の背後の事情という存在として客体化し、それを話し手の解説として提示する」とまとめる。

さらに、「解説」の「ものだ」は、以上で考察した「ものだ」のプロトタイプの意味と拡張義から派生されたものではなく、名詞述語文の「ものだ」から派生されたものであると考える。具体的には、以下の例(37)、例(38)のような名詞述語文から派生されたものと考えられる。

(37) いつか大牟呂さんが、この石柱は何代か前の先祖が建てたものだと云っていた。
(井伏鱒二『黒い雨』)

(38) そんな突拍子もないハチマキを、自分で作るバカはいないから、それは、女の子から贈ってもらったものだ、ということは一目瞭然であった。
(曾野綾子『太郎物語』)

例(37)、例(38)のような名詞述語文の「ものだ」は、主題Pが「この石柱」、「これ」のような特定のものを表す名詞、指示代名詞である。その主題Pが個体を表すものから先行文脈で言語化された一つの事象になると、「ものだ」は助動詞的な機能を獲得し、「解説」という意味を表すようになる。これまで文法レベルで「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を考察したが、「解説」の「ものだ」は他の意味と異なり、テキストレベルで「解説」という機能を果たしている。また5.1.1で考察したように、名詞述語文の「ものだ」の主題Pが個体を表すものから非特定の総称的な名詞、グループを表すものになる場合、「ものだ」は助動詞化されて、「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」という意味をもつプロトタイプの意味となる。名詞述語文の「ものだ」と「解説」の「ものだ」と「ものだ」のプロトタイプの意味の構文的な派生関係は以下の図5-4で示すことができる。

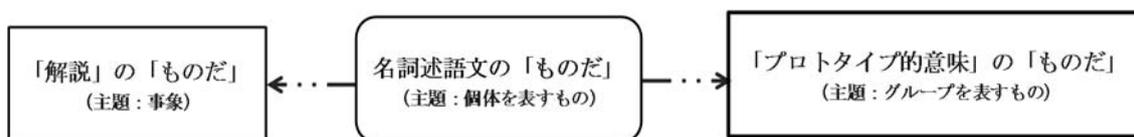


図5-4 三者の構文的派生関係

5.1.8 文末の「ものだ」の多義構造

以上の文末の「ものだ」の意味分析に基づき、その多義構造をまとめると、以下の図5-5のように示す。

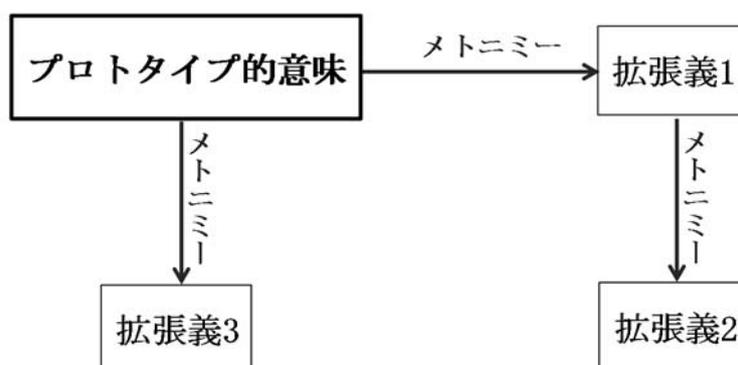


図5-5 「ものだ」の多義構造

「ものだ」のプロトタイプの意味：ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する。

「ものだ」の拡張義1：ある事象を過去の習慣的行為、継続的状态を持つ存在として客体化し、それを思い起こして示す。

「ものだ」の拡張義2：ある事象を過去から状態が変化した存在として客体化し、それに対する話し手の感慨の気持ちを示す。

「ものだ」の拡張義3：ある事象を一般的傾向性と反する性質を持つ存在として客体化し、それに対する話し手の驚きの気持ちを表す。

「ものだ」の意味拡張を考察した結果、メトニミーによる意味拡張は見られたが、メタファーとシネクドキーによる意味拡張は見られなかった。助動詞の「ものだ」の意味は必ずしもプロトタイプの意味から拡張されたものではない。形式名詞の「もの」が助動詞「ものだ」へと文法化する過程で、名詞述語文の「ものだ」から構文的に「解説」の「ものだ」と「本質・一般的傾向性」を表す「ものだ」が派生する。さらに、「本質・一般的傾向性」を表す「ものだ」はプロトタイプの意味として、各意味へと拡張していく。

5.2 文末の「ものだ」の語用論的意味

前節では、認知言語学の理論的枠組に基づき、「ものだ」の多義構造を分析した。本節では、その認知意味論的な考察を基に、「ものだ」の「当為」「教示」「詠嘆」などの語用論的意味について考察する。

5.2.1 「当為」

5.2.1.1 「ものだ」の「当為」の意味に関する先行研究

「ものだ」の「当為」の意味に関する研究には、高梨(2006)、北村(2010)、靱山(1992)、野田(1995)などがある。高梨(2006)は「ものだ」はすでに助動詞として文法化したものと認め、「当為」の「ものだ」を評価のモダリティの中でどのように位置づけるかを検討している。また、「当為」の「ものだ」と解釈される要件を以下のようにまとめている(p.6)。

- ①当該事態が一般的に、もしくは、その場面において望ましいものである。
- ②行為者の意志によって実現可能な事態である。
- ③その場面で問題になっている個別の行為者が当該事態を実現していないという状況がある場合、当為と解釈されやすい。

北村(2010)は、「ものだ」文の「当為」の解釈について、「適当」と「働きかけ」に下位分類し、それぞれの解釈に関わる諸条件を考察した。「ものだ」文が「適当」と解釈されるための条件を以下のようにまとめている(p.53)。

- a. モノダ文で表される事態が遂行可能である。
- b. モノダ文で表される事態に関し、話し手または想定される聞き手が当事者である。
- c. モノダ文で表される事態の成立に関し、一般性を有するとともに一義的なものではない。
- d. モノダ文で表される事態が望ましいものであるとき、《適当》の解釈となりやすい。

また、「ものだ」文が「働きかけ」と解釈されるのは「共在という場」と「事態が未実現」であるという場合においてのみ成立すると述べている。さらに、「ものだ」文におけるそれぞれの解釈の意味的な関連性として<一般的傾向>—《適当》—《働きかけ》であると述べている。つまり、解釈のための条件として<一般的傾向>に《適当》の条

件が加われば《適当》の解釈に、＜一般的傾向＞＋《適当》の条件に《働きかけ》の条件が加われば《働きかけ》の解釈となるという関係にあると論じている。

梶山(1992:25)は「ものだ」が「当為」の意味に解釈される条件を以下のように提案している。

- (a) モノダに先行する部分に「実行可能な行為」を表す表現を含む。
- (b) (a)の「実行可能な行為」が、一般に「好ましい」と考えられることである。

野田(1995:258)は「ものだ」の当為の用法は本来的性質・傾向をあらわす用法と隣り合っているとし、「モノダは、XであればYという行為を実行することが望ましいという一般的な通念(と話し手が考えていること)を大前提として提示することによって、間接的に、当該の場面で聞き手がYをとという行為を実行することを促す」とまとめている。

「当為」と解釈される「事態が実現・遂行可能」と「事態が一般的に望ましいもの」という二つの条件はすでに多くの先行研究で言及されている。特に、「事態が実行可能」という条件は「ものだ」が「当為」と解釈される必須条件になっている。本研究は以上の二つの条件について異論はないが、高梨(2006)の条件③は必須条件ではなく、ほかの必須条件があるのではないかと考える。北村(2010)に関しては、「当為」の解釈について、さらに「適当」と「働きかけ」という下位分類をする必要があるのかという疑問があり、本研究は「当為」を下位分類しない立場を取る。

5.2.1.2 「当為」と解釈される語用論的条件

本研究は「当為」の意味は「ものだ」が本来持っている意味ではなく、「ものだ」のプロトタイプの意味「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」という意味論的な意味から、語用論的に生じて来るものだと考える。つまり、「ものだ」はある語用論的な条件を満たしている文脈で発話されると、聞き手の語用論的推論によって「当為」の解釈が導き出されるということである。

高梨(2006:6)は条件③「その場面で問題になっている個別の行為者が当該事態を実現していないという状況がある場合、当為と解釈されやすい」に関して、「このファクターはどちらの解釈になりやすいかの方向付けはするものの、絶対的に決定するものとは言えないだろう」と述べている。また、以下の例(39)は「当為の意味に解釈できるが、外で遊んでいる(当該事態は実現している)子供に対する発言として、決して用いられないとは言えないからである」と論じている。

(39) 「子供は外で遊ぶものだ。どんどん遊びなさい」(高梨 2006:6)

「当為」と解釈されるには、「当該事態を実現しているかどうか」によるものではなく、「話し手が聞き手に当該実態を実行してほしいかどうか」によるものだと考えられる。

(40) だから二人の女は、知らない彼女の一部分を偶然に発見した思いで、衝動をうけたのだろう。

「どんな男か、あのホームまで行って窓からのぞいてやるわ」

八重子がはずんだ声で言った。

「よせ、よせ。他人のことは放っとくものだ」

安田が言った。

(松本清張『点と線』)

(41) それを、吹き乱れた苜蓿につけた。

「あら、風流なお手紙は、たいてい、紙の色と同じ花の枝に、おつけになるものですわ」女房たちがいうと、

「そうですか。どうも私は、そういうことにうとくて。どんな花がいいのか、よくわからないのです」

(田辺聖子『新源氏物語』)

例(40)では、「他人のことは放っとく」という事態は実現していないとはいえ、「よせ、よせ」という発話から判断すると、話し手の安田が聞き手としての二人の女に当該実態を実行してほしいという願望の表れが明らかになっているので、「ものだ」の意味は「当為」と解釈される。例(41)では、「紙の色と同じ花の枝につける」という事態は実現されていないが、文脈から判断すると、話し手の女房たちが聞き手に当該実態を実行してほしいという願望は明らかではない。むしろ、聞き手に一般的な通念を教え示し、言い聞かせるという教示のニュアンスが強い。従って、「ものだ」が「当為」と解釈される一つの語用論的条件として、「実行可能な事態」に関し、話し手が聞き手に当該事態を実現してほしいという願望が含まれているもの」とまとめる。

また、高梨(2006)の条件①「当該事態が一般的に、もしくは、その場面において望ましいものである」も修正する必要があると考える。野田(1995:257)は、「ものだ」で表される一般的な通念というのは、「話し手が一般的な通念だと考えているということであり、実際に一般的あるとは限らない」と述べている。以下のような実例がある。

(42) 「中馬君、飲む時は吐きながらでも、徹底的に飲むもんだ」(野田 1995:257)

上記の例では、「飲む時は吐きながらでも、徹底的に飲む」という事態は一般的には望ましくないことであるが、この文脈においては、話し手が一般的に望ましいことだという判断を下している。以上の分析から、「もんだ」が「当為」と解釈されるもう一つの語用論的条件を「実行可能な事態」が一般的に望ましいもの、或いは文脈において話し手が一般的に望ましいと判断するものである」とまとめることにする。

本研究は先行研究を踏まえ、プロトタイプの意味の「もんだ」が「当為」と解釈される語用論的条件を次の四つにまとめる。条件④は必須条件ではないが、この条件があれば、「もんだ」の「当為」の解釈が判断しやすくなると考えられる。

- ① 「もんだ」に前接する事象が「実行可能な事態」を含んでいるもの。
- ② 「実行可能な事態」が一般的に望ましいもの、或いは文脈において話し手が一般的に望ましいと判断するもの。
- ③ 「実行可能な事態」に関し、話し手が聞き手(或は第三者)に当該事態を実行してほしいという願望が含まれているもの。
- ④ 「実行可能な事態」がまだ実現されていない場合、当為と解釈されやすい。

以下の例(43)はプロトタイプの意味の「もんだ」で、例(44)はプロトタイプの意味の「もんだ」が以上の語用論的条件に満たしている文脈で発話され、「当為」の意味が導き出されている。例(45)～例(47)も同様である。

(43) 母「今日の道徳の授業では何を勉強したの？」

子「子どもはお年寄りを敬うもんだって先生が言ってたよ」

(44) 母「ほら、たくさんお年寄りの方が乗っていらしたわよ」

子「ママ、ぼく座っていたいよ」

母「子どもはお年寄りを敬うもんだって学校で習ったでしょ？」

(45) 「そりゃ不可」と大日向は笑いながら言葉を添えた。「こういう時には召上るものです。真似でもなんでも好う御座んすから、一つ御受けなすって下さい」

(島崎藤村『破戒』)

(46) 「いいえ、私は沢山です」と省吾は幾度か辞退した。

「そんな、君のような——」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人が呈げるッて言うものは、貰うもんですよ」

「はい、難有う」と復た省吾は辞退した。

(島崎藤村『破戒』)

- (47) 「局長様に会いたいのならそのように、きちんと御約束してから来るものだ。ただちょっと用事というだけでは御忙しい局長様が女子に会ったる暇はなからう。ここをどこだと考えとる」

(渡辺淳一『花埋み』)

以上、「当為」と解釈される語用論的な条件をまとめたが、その語用論的条件を基に、「当為」と解釈されるプロセスを考察してみる。例(47)を例として考察する。

話し手が発話する「ものだ」の意味：一般的に、局長様に会いたいのならそのように
きちんと御約束してから来る。

コンテキスト：きちんと御約束してから来るのが一般的に望ましい、話し手がそうしてほしい。

聞き手の「ものだ」の解釈：私が局長様に会いたかったら、直接局長に面会にくるのではなく、きちんと御約束してから来るべきだ。

このように、「ものだ」のプロトタイプの意味から、聞き手がその意味論的意味とコンテキストとを組み合わせることによって「当為」の意味が導き出される。

5.2.2 「教示」

話し手は聞き手が知らないことを教えるという立場に立ち、話し手が持っている知識、一般常識、道理などを聞き手に教え示し、言い聞かせる場合も「ものだ」が用いられる。特に親と子供、上司と部下、先生と学生のような片方が知識上、経験上優位に立つ関係において使われることが多い。終助詞「よ」「わ」と共起することもよく見られる。

- (48) 「信夫」貞行は本をたたみの上においた。あらたまった声である。

「はい」信夫もあらたまって返事をした。

「人間には、命をかけても守らなければならないことがあるものだよ。わかるか？」

(三浦綾子『塩狩峠』)

- (49) 「俺はニューギニヤからずっとあの班長と一緒にだ、こき使われるばかりで、何もして貰った覚えはねえ。班長ってのは、兵舎じゃ可愛がってくれるが、前線じゃ、なまじ戦争を知ってるだけに、冷たいもんだよ。」

(大岡昇平『野火』)

例(48)では、話し手と聞き手は父親と息子の関係である。話し手が人生を十分に経験しているものとしての立場から、「人間には、命をかけても守らなければならないことがある」ということを一般的道理として息子に教え示している。例(49)では、話し手と聞き手は先輩と後輩の関係である。話し手が先輩の立場から「前線では、班長というものは冷たいものだ」という経験を後輩に示している。いずれも聞き手に教え聞かせるような口調が見受けられる。「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味は、語用論的な要因と結びつき、教示の意味が生じてくるのである。

5.2.3 「詠嘆」

話し手が個別の体験を通してある一般的な事柄を再度認識する場合に「ものだ」が用いられることがある。その個別の体験が一般論と一致し、話し手が一般論を再度認識し、感情的な詠嘆が誘発され、語用論的に感慨の意が生じたのである。

- (50) (主人が亡くなって急に肥り出してしまった先輩の妹恭子さんについて)
少し離れたところに立っていた伊木に、井村が歎息するように話しかけた。
「おどろいたねえ、女というものはいつどう変わるか分らないもんだなあ」
「それにしても、恭子さんの場合は、特別だな」

(吉行淳之介『砂の上の植物群』)

- (51) 「さあ、これからどんどん墮落して行くばかりでしょうね。(中略)」
「家は浅草の銘酒屋なんですよ、——彼奴に可哀そうだと思って、今まで誰にも云ったことはありませんがね」
「ああ、そうですか、やっぱり育ちと云うものは争われないもんですなあ」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

- (52) 夜食が終るのは八時だ。それから、経文の筆記であった。就寝十時。慈念の生活をみていると、禅寺の修行というものはつらいものだな、と里子は思わざる

を得ない。

(水上勉『雁の寺・越前竹人形』)

例(50)～(52)は「ものだ」のプロトタイプの意味の構文「PはQものだ」をとっているが、語用論的に詠嘆、感慨の意味を表している。例(50)では、話し手は主人が亡くなって急に肥り出してしまった先輩の妹恭子さんにあって、「女というものはいつでもどう変わるかわからない」という一般的な事柄を再認識し、眼前の事実が一般的な真実と一致していることに詠嘆の感情が誘発されている。例(51)では、話し手はどんどん墮落して行く女性を通して、「育ちと云うものは争われない」という一般的な通念を再認識し、詠嘆、感慨の意味合いが生じた。例(52)では、慈念のつらい修行生活を見て、「禅寺の修行というものはつらい」という一般的な性質を再認識し、詠嘆の感情が誘発されている。「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味は、個別の体験を通してある一般的な事柄を再度認識する場合に用いると、語用論的に詠嘆、感慨の意味合いが生じてくる。

以上、「ものだ」の「当為」「教示」「詠嘆」の語用論的意味について考察した。「ものだ」の意味は発話状況、発話意図といった語用論的な要因、条件と深く関わっていることがわかる。「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味が語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的意味が生じてくることが明らかになった。

5.3 「のだ」と「ものだ」の対照

本節では、まず5.3.1で「のだ」と「ものだ」の相違について考察する。次に、5.3.2で「のだ」と「ものだ」の類似する意味用法について考察する。

5.3.1 「のだ」と「ものだ」の相違について

「のだ」は先行する部分を体言化する機能をもつ準体助詞の「の」が断定を表す助動詞の「だ」と結びついて一語化した助動詞である。「ものだ」は形式名詞の「もの」に断定を表す助動詞「だ」が後接し、それが一語化して、一つの助動詞として用いられているモダリティ形式である。「のだ」と「ものだ」の根本的な差異は「の」と「もの」の違いによるものである。佐治(1993)は「準体助詞」の「の」を以下のように三つに分

例(57)のように、「ものだ」は非特定の総称的な名詞 P を主題として、その本質や一般的な傾向性を Q で表している。

(56) これは、手紙の封を切るものだ。 <=第5章例(1)>

X Y

(57) 普通歲月というものはいったん過ぎ去ってしまえば、あっけないほど短く単純

P Q

に感じられるものである。 <=第5章例(13)>

プロトタイプの意味の「のだ」と「ものだ」は構造的に類似しているが、表している意味は異なる。また、プロトタイプの意味の「のだ」は文文法とテキスト文法の範疇で機能するものであるのに対して、プロトタイプの意味の「ものだ」は文文法範疇のみで機能するものである。例えば、「のだ」のプロトタイプの意味を表す例(54)は「P は Q のだ」という構造を有しており、P(外デ音ガスル)という事象について、その由来、原因、事情を事象 Q(鳩ガ啼イテイル)で説明している。それに対して、「ものだ」のプロトタイプの意味を表す例(57)は「P は Q ものだ」という構造を有しており、P(歲月というもの)の本質や一般的な傾向性を Q(いったん過ぎ去ってしまえば、あっけないほど短く単純に感じられる)で表している。加えて、プロトタイプの意味の「のだ」には、例(54)のように「P のは Q のだ」という一文で機能するものがあり、例(55)のように「(P <発話・状況>) Q のだ。」という連文で機能するものもある。それに対してプロトタイプの意味の「ものだ」は、例(57)のように「P は Q ものだ」という一文でしか機能しない。

以上「のだ」と「ものだ」との違いを大まかに述べたが、「のだ」の各用法と「ものだ」との異同を次節で具体的に見ていく。

5.3.2 「のだ」と「ものだ」の類似する意味用法について

本節では、「のだ」と「ものだ」の類似する「説明」と「解説」、「命令」と「当為」の意味用法について考察する。

5.3.2.1 「説明」と「解説」

プロトタイプの意味「ある事象をほかの事象を成立させる背後の事情として客体化し、それを話し手の説明として提示する」を表す「のだ」と、「ある事象を他の事象の背後の事情という存在として客体化し、それを話し手の解説として提示する」という意味を

表す「ものだ」は構文、意味、用法上類似している。形式的にプロトタイプの意味の「のだ」と「解説」の「ものだ」はテキストレベルで同じく「主題—解説」の構文を成している。また意味、用法上、共にある事象を成立させる原因、背景、事情を説明している。しかし、形式、意味、用法の面で異なる点も存在している。

形式上、以下の例(58)～(60)からわかるように、「のだ」の主題 P は言語化されている先行文脈、あるいは言語化されていない状況両方の場合があるのに対して、「ものだ」の主題 P は必ず言語化されなくてははいけない。

(58) (外デ音ガスル。) 鳩ガ啼イテイルノデス。

<=第4章例(7)>

(59) 九州の福岡市もにぎわっていた。大相撲の一行が巡業にやっていたのである。

<=第4章例(9)>

(60) イスラエル側には、ガザからの一方的な撤退案をパレスチナ側と協力して進めるよう改め、撤退の対象に西岸を含めるよう求めた。ガザ撤退を理由に西岸入植地を維持し続けるのではないかとの懸念に応えたものだ。

<=第5章例(33)>

また、基本的に「解説」の「ものだ」は「～たものだ」の形をとっているが、次の例が示すように、「のだ」は未来に起こる確定の事態について言及することもあるので、「～たのだ」の形に限定されない。

(61) 花子は毎日ピアノの練習をしている。今度の演奏会に参加するのだ。

益岡(1991:143)

用法上、「ものだ」は新聞の解説記事、ニュース報道など客観性が高い文体に多用されている。文学作品にもみられるが、数は少ない。「のだ」にはこのような制限がなく、会話の場面、小説などの地の文などでよく用いられ、話し言葉でも、書き言葉でも、幅広く使用されている。しかし、「のだ」は客観的な報道のテキストでは用いられていない。これは「もの」と「の」の意味・機能的差異に関係する。名詞の「もの」が助動詞の「ものだ」へと文法化する過程で、「もの」の実質的な意味は稀薄になるが、抽象的な「存在」という意味は残っている。準体助詞の「の」はもともと機能語であり、名詞化の機能をもっているだけで、実質的な意味を持たない。「ものだ」は前接する事象を

客観的な存在として捉えるので、客観的な解説を提示することになるように見受けられる。つまり、客観的な解説をしていることを前面に出していると言える。「のだ」は前接する事象を客体化し、話し手の判断で、二つの事象の因果関係を認定するので、話し手の断定で説明するという意味合いが強く表れている。客観性の高い文体に「のだ」を用いるのは相応しくないと考えられる。こうして、「ものだ」と「のだ」が用いられる文体の差異が明らかになる。

5.3.2.2 「命令」と「当為」

「のだ」の「命令」という意味は「のだ」の「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」（拡張義3）という意味論的な意味が語用論的な条件と結びつくことによって生じて来るものである。また、「ものだ」の「当為」という意味は「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味が語用論的な条件と結びつくことによって生じて来るものである。両者の根本的な違いはもとの意味論的な意味によるものである。「のだ」はすでに定まっている確実な事態を判断として提示することによって、間接的に行為の実行を促すのに対して、「ものだ」は一般的な通念、一般的にこうであると判断として提示することによって、間接的に行為の実行を促す。典型的な例としてそれぞれ以下の例(62)(63)、例(64)がある。

(62) 彼の太い手が下りて来て、襟首をつかまえて、私を立たせた。しかし命ずる声はやはり温かく、やさしかった。

「踏み。踏むんだ」抵抗しがたく、私はゴム長靴の足をあげた。

<=第4章例(52)>

(63) 私は意を決してまだ動き回っている鈴木に「帰ります。さようなら」をいい、鈴木は「気をつけて帰るんだよ」という。

<=第4章例(54)>

(64) 「これ、お作や」と細君の児を叱る声があった。「どうしてそんな悪戯するんだい。女の児は女の児らしくするもんだぞ。(後略)」

(島崎藤村『破戒』)

「命令」「当為」と解釈される語用論的な条件から見れば、「前接する事象に「実行可能な事態」を含んでいるもの」と「話し手が聞き手に当該事態を実行してほしいという

願望が含まれているもの」という二つの条件が共通している。「実行可能な行為」がまだ実現されていない」という条件は「のだ」が「命令」と解釈される必須条件であるが、「ものだ」が「当為」と解釈される必須条件ではない。「ものだ」は例(65)のように「実行可能な行為」がすでに実現している場合にも用いられる。

(65) (外で遊んでいる子供に対して)

「子供は外で遊ぶものだ。どんどん遊びなさい」(高梨 2006:6)

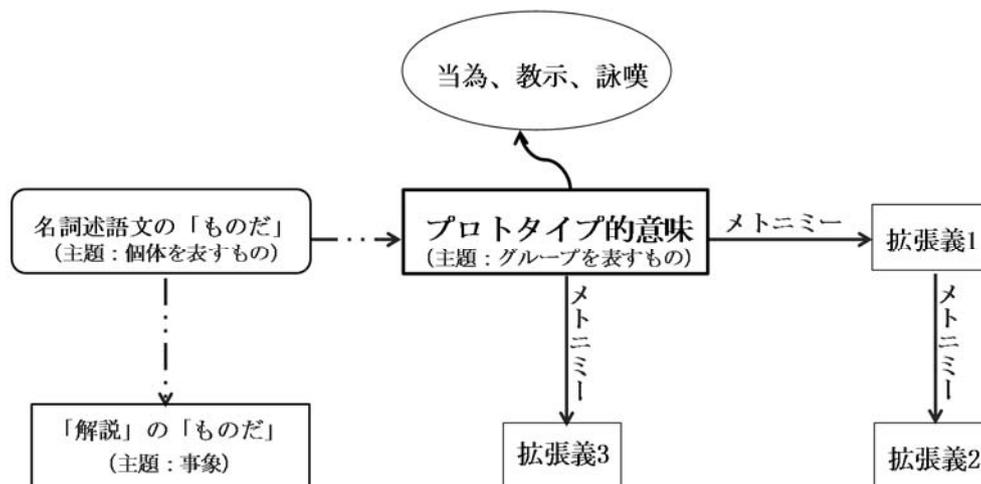
また、「命令」と解釈される「のだ」の「実行可能な行為」は話し手にとって望ましいものである。しかも、その「実行可能な行為」がすでに命令されていること、あるいは一般的に定まっていることである場合に「のだ」が用いられやすい。例えば、例(62)と例(63)では、「踏む」と「気をつけて帰る」という「実行可能な行為」は話し手にとって望ましいものである。「のだ」による命令は、例(62)のように「踏め」という命令文の後に、または例(63)のように「気をつけて帰る」が一般的に定まっていることである場合に用いられやすい。それに対して、「当為」と解釈される「ものだ」の「実行可能な行為」は「一般的に望ましいもの、或いは文脈において話し手が一般的に望ましいと判断するもの」である。例えば例(64)では、「女の児は女の児らしくする」という「実行可能な行為」は一般的に望ましいものである。

「命令」を表す「のだ」は、例(62)のように即行為を実行するよう求めるものがある。また例(63)のように前もって注意を与え、将来のある時点で実行するよう求めるものもある。しかし、「ものだ」は例(64)のように基本的に行為を即実行するということをも求めているのではなく、そうすることが一般的な通念だから、実行すべきだという意味合いが強い。例(63)の「のだ」に前接している「気をつけて帰る」ということも一般的に定まっているが、「のだ」を用いるとやはり個人的な判断の意味合いが強い。

5.4 まとめ

本章では、まず「ものだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学の理論的枠組に基づき、「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、「ものだ」の複数の意味の拡張ネットワークを示した。また、「解説」の「ものだ」はプロトタイプの意味とその拡張義から派生されたものではなく、「～たものだ」の形をとっている名詞述語文の「ものだ」から構文的に派生されたものであることが確認された。さらに、「ものだ」の「当為」「教示」「詠嘆」などの語用論的意味について考察し、「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味は、語用論的な要因や条件と結びつく

ことによって、様々な語用論的意味が生じてくることが判明した。名詞述語文の「ものだ」と助動詞の「ものだ」の意味構造は以下の図5-6で示すことができる。



(点線の矢印は構文的な派生関係、実線の矢印は拡張関係<メトニミー>を表し、
波線の矢印は語用論的な派生関係を表す)

図5-6 「ものだ」の意味構造

第6章 「のだ」「ものだ」に対応する中国語

中国の日本語学習者にとって、「のだ」「ものだ」はかねてより習得の難しい項目となっている。そこで、中国語の中の「のだ」「ものだ」と類似する文あるいは「のだ」「ものだ」に対応する形式と比較しながら説明すれば、学習者はもっと習得しやすいのではないかと考えた。本研究は、日本語と中国語との対照という新たな視点から、「のだ」「ものだ」と中国語の対応関係を解明し、その意味と用法を明らかにしていきたい。また、「のだ」「ものだ」に対応する中国語が表している語気と「のだ」「ものだ」が表しているモダリティにどのような差異があるのかについても分析したい。さらに、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」がそれぞれどのように扱われているかを考察する。その上で、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時の注意点をまとめ、中国の日本語教育現場の問題点を解決するための対策を考えていきたい。

そこで、本章ではまず、6.1では「のだ」に対応する中国語の翻訳の傾向、およびその表す語気を分析する。6.2では、「ものだ」に対応する中国語の翻訳の傾向、およびその表す語気について詳述する。6.3では、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を基に、「のだ」「ものだ」の取り扱い方の実態と問題点を明らかにする。6.4では、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時の注意ポイントをまとめる。6.5は本章のまとめである。

6.1 「のだ」に対応する中国語

本節では、「のだ」に対応する中国語の翻訳の傾向、およびその表す語気を分析する。日本語のモダリティに対応するものとして、中国語では「語気」がある。賀(1993:157)は、「語気(modality)は文法の形式によって命題に対する話し手の主観を表すもの」とであると定義している。また、語気が有する二つの特徴に関して、以下のように述べている。

- (I) 意味から見ると、1つの文は命題と語気の2つの部分に分けられる。命題は物事或いは出来事そのものに対する叙述であるが、語気は文の命題に対する再叙述である。語気は命題を述べる話し手の目的、命題に対する話し手の態度・評価等、もしくは命題に関わる話し手の感情を表す。

(Ⅱ)形式から見ると、語気は文法形式によって表される文法的意味である。

(賀 1993:157-158)

さらに、賀(1993:158)は、中国の書き言葉における語気を識別する形式標記には主に以下のようなものがあると述べている。

- ① 文末においてイントネーションを示す文章記号
- ② 特殊な文の形式
- ③ 共起制限、即ち特定の語気と他の言語成分との共起制限
- ④ 助動詞およびその否定形式と認められるもの
- ⑤ 語気副詞およびその否定形式と認められるもの
- ⑥ 語気助詞
- ⑦ 感嘆詞

本章では以上の各形式標記によって表されている中国語の語気と「のだ」の対応を考察する。6.1.1では「のだ」に対応する中国語の傾向を分析する。6.1.2では「のだ」に対応する中国語が表す語気を分析する。

6.1.1 「のだ」に対応する中国語翻訳の傾向

『中日対訳コーパス』の日本小説11篇のテキストから3256例の「のだ」を収集した。「のだ」に対応する中国語の語気を表す形式標記があるものは356例だけである。ほかは全て無標識の文²¹になっている。対応する中国語の語気形式がある356例の中、「是……的」に対応する例は182例、「是……」に対応する例は11例、「要」などの助動詞に対応する例は15例、「啊」「了」「呢」「呗」「吧」などの語気助詞に対応する例は148例である。また、無標識の文のうち意識によって接続詞、副詞などに訳されたものは66例であった。

6.1.1.1 「のだ」と「是……的」の対応

「のだ」の拡張義3「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」と拡張義2「ある事象を、ほかの事象に特定要素を付加して述べ直すものとして客体化し、それを話し手の説明として提示する」には「是……的」に対

²¹ 「無標識の文」とは「中国語の語気を表す形式標記が含まれていない中国語文」を指す。

応するものがある。

- (1) a. ナオミ、ナオミ！己はどうして今夜彼女を置き去りにして来たのだろう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。

＜拡張義 3＞(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

- b. 纳奥米、纳奥米！今晚为什么丢下她来了。纳奥米不在身边是不行的，这是最糟糕的事。

(谷崎润一郎《痴人之爱》)

- (2) a. 後で見ると、竹筒が舷から食みだしていた部分は、半面だけ黒く焦げていた。閃光かまたは爆発で起った熱気のために焦げたのだ。

＜拡張義 2＞(井伏鱒二『黒い雨』)

- b. 后来一看，竹筒露出船槓的那部分，只有一面被灼焦了。这是被闪光或爆炸时散发的热气灼焦的。

(井伏鱒二《黒雨》)

劉等(2001)は構文と機能から「是……的」を「是……的」(一)と「是……的」(二)という二つのタイプに分けている。以下の例(3)と例(4)をそれぞれ「是……的」(一)と「是……的」(二)に分類している

- (3) 我们是坐公共汽车去的。／私達はバスに乗って行ったのです。

- (4) 这个问题我们也是很注意的。／その問題に関してはわれわれも関心をいざいとるところだ。

劉(2001:762-781)は「是……的」(一)と「是……的」(二)の機能について以下のよう

“是……的”句(一) 是一种带“是……的”标志的动词谓语句。一般用于这种情况：表示动作已在过去实现或完成，并且这一事实已成为交际双方的共知信息。使用“是……的”句(一)时，说话人要突出表达的重点（也就是全句的表达焦点）并不是动作本身，而是与动作有关的某一方面，如时间、处所、方式、条件、目的、对象或施事者等。

“是……的”句(二) 是指带“是……的”标志的一部分动词谓语句和形容词谓

语句。“是”和“的”都表示语气。这类句子多用来表示说话人对主语的评议，描述或描写，全句往往带有一种说明情况、阐述道理、想使听话人接受或信服的肯定语气。……用“是……的”时，语气肯定，口气委婉缓和，有说理的意味，目的是要让人相信。

拙訳：

「是……的」(一)は「是……的」を用いる動詞述語文である。一般的に以下のような場合に用いられる。述語文にある動作がすでに実現、あるいは完成し、しかもこの情報は話し手と聞き手双方の共有情報になっている。「是……的」(一)を用いる時、文の説明する焦点(文のフォーカス)は動作そのものではなく、動作に関わっている諸要素である。例えば、時間、場所、方法、条件、目的、対象、動作者など。

「是……的」(二)は「是……的」を用いる一部の動詞述語文と形容詞述語文である。「是」と「的」は共に「語気」を表す。この構文は話し手が主語に対する評価、叙述あるいは描写を表す。状況を説明し、道理を述べ、聞き手に認識してほしいあるいは確信してほしいという肯定語気を表す。…「是……的」を用いる時、肯定の語気を表したり、婉曲、緩和の語気を表したりしている。説得の意味合いがあり、相手に確信させようとする。

「のだ」が対応している「是……的」は「是……的」(一)と「是……的」(二)両方である。「のだ」の拡張義2には「是……的」(一)に対応するものがあり、拡張義3には「是……的」(二)に対応するものがある。

「のだ」の拡張義2は、既定の事象を主題として、その事象に格成分、理由節、目的節など特定の要素を付け加えて説明するものである。その新しい特定の要素が文の焦点(フォーカス)として現れてくる。この点では、「是……的」(一)のすでに実現、あるいは完成した動作に関わっている諸要素を説明の焦点とする機能に共通するところがある。「のだ」が対応している「是……的」(一)には、拡張義2に対応する例が一番多い。しかし、対応する「是……的」(一)と「のだ」の文の焦点は文中の成分として必ずしも一致しているとは限らない。例(2)では、「のだ」文の焦点「閃光かまたは爆発で起った熱気のために」は理由節になっているが、「是……的」(一)文の焦点「被閃光或爆炸时散发的热气」は加動者になっている。一方、例(5)と例(6)のaとbの焦点は文中の成分として一致している。

(5) a. 「おや、まアちゃん、いつ来たの？」

「今日来たんだよ——てっきりお前にちげえねえと思ったら、やっぱりそうだった」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

(時点を表す「今日」がフォーカスになっている)

b. “今天来的呀。—我想准是你，果然没错儿。”

(時点を表す「刚才」がフォーカスになっている)

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

(6) a. 「薄情者！俺を置いてゆくのか。君のためにこんなざまになったんだぞ！」

(三島由紀夫『金閣寺』)

(目的を表す「君のために」がフォーカスになっている)

b. “你简直一点人情都不懂！想扔下我就走吗？我可是为了你才摔成这个样子的！”

(三島由紀夫《金閣寺》)

(目的を表す「为了你」がフォーカスになっている)

拡張義3には「是……的」(二)に対応するものがある。拡張義3はある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示し、聞き手に認識させようとする機能がある。「是……的」(二)は、語気副詞「是」と語気助詞「的」からなり、主に話し手が自分の主張、見解、態度などを表す場合に用いられ、聞き手に認識してほしい、あるいは確信してほしいという肯定語気を表す。機能上、「のだ」の拡張義3と「是……的」(二)と共通するところがある。

(7) a. ナオミ、ナオミ！己はどうして今夜彼女を置き去りにして来たのだろう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。

<=例(1)> (谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. 纳奥米、纳奥米！今晚为什么丢下她来了。纳奥米不在身边是不行的，这是最糟糕的事。

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

(8) a. 「これもやっぱり親の罰だ。親を欺して面白い目を見ようとしたって、ロクな事はありゃしないんだ」と、私はそんな風に考えました。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “这也是父母的惩罚。欺骗父母还想得到好结果，根本不会有好事的！”我这样思

付着。

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

- (9) a. 「おれには分っている……本当だとも……いまにきっと、そんな目にあわされるんだ…」

(安部公房『砂の女』)

- b. “咱知道得可清楚呢……真的呢……眼下肯定会让我们难堪的……”

(安部公房《砂女》)

大河内康憲(1975)は“是”は話し手の主体的態度の表明であり、ムードであると述べている。また、ある種の副詞との不可欠な共起といい、文頭の副詞との強調など、いずれも話者の主体性の表明、主張の必要を補うものと見られていると指摘している。「是」は肯定を強く押し出し、話し手の主体的態度を表明する語気副詞である。また、助詞「的」は、小野(2001)で述べた「モノ化機能」の他、よく文の末尾に置かれて、その確実さを強調する表現として肯定的な語気を表す。「是……的(一)」の「是」はほとんど省略できるが、「的」は必要で省略することができない。「是……的(二)」は「是」と「的」を同時に省略することができる。しかし、「是……的(二)」から「是」と「的」を省略したら、ふつうの動詞述語文と形容詞述語文になり、聞き手に認識してほしいあるいは確信してほしいという肯定の語気がなくなる。この点については、「のだ」の拡張義3は「是……的(二)」と類似している。例(9)aから「のだ」を取ると、ふつうの動詞述語文になり、聞き手が認識していないことを認識させようというモダリティがなくなる。例(9)bから「的」を取ると、聞き手に認識・確信してほしいという肯定の語気がなくなる。

一方、主題部分に対する説明を表す「のだ」のプロトタイプの意味、拡張義1は「是……的」に対応する例は非常に少ない。広い意味での因果関係の説明を表している「のだ」のプロトタイプの意味とある事象をわかりやすく、別の角度から説明する拡張義1は「是……的」というより、ほとんど例(10)(11)のような「無標識の文」に対応している。

- (10) a. 「ねえ、ワタナベ君、どうしたの?あなたなんだか漠然とした顔してるわよ。目の焦点もあっていないし」「旅行から帰ってきて少し疲れてるんだよ。べつになんともない」

(村上春樹「ノルウェイの森」)

- b. “咦，渡边君，怎么搞的？表情好像有点发呆，眼珠也聚不起光来。”“刚旅行回来，有点累。其实没什么。”

(村上春树《挪威的森林》)

- (11) a. 八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。

(安部公房『砂の女』)

- b. 八月里的一天，一个男人失踪了。他利用休假去海边，听说那地方坐半天火车即可到达，谁知他一去便查无音信。

(安部公房《砂女》)

「是……的」(一)はすでに実現、あるいは完成した動作という構文上の制限があり、事象(P)と事象(Q)の間には、広い意味での因果関係あるいは表裏の関係を認定する「のだ」より、用いられる範囲が狭い。また、プロトタイプの意味と拡張義1は主にテキスト文法レベルで主題に対して説明しているのに対して、「是……的」は主に文法レベルで主語に対して説明している。従って、「のだ」と「是……的」とは形式的に類似しているにも関わらず、対応しない部分が多い。

6.1.1.2 「のだ」と「是……」の対応

劉等(1982)は「是……」は状況、原因の説明にも用いられ、弁解の語気を表す場合があると述べている。「のだ」の拡張義2は「是……」に対応するものがある。

- (12) a. それにしても、このしめっぽさは、やりきれない。いや、むろん砂がしめっぽいのではなくて、自分の体がしめっぽいのだ。

(安部公房『砂の女』)

- b. 即使这样，这番湿漉漉的感觉也着实让人吃不消。当然，不是沙子湿漉漉，而是自己的身体混漉漉。

(安部公房《砂女》)

- (13) a. その二つが矛盾しているのは、(おれが矛盾しているのではない、現実そのものが矛盾しているのだ) ……

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

- b. 这两方面自相矛盾着（不是自我矛盾，而是现实本身就有的矛盾）……

（谷崎潤一郎《痴人之愛》）

拡張義2は「のではない」と組み合わせて使用される場合、「是……」に対応している。朱徳熙(1982)は“是”の後ろに来る目的語が述詞である場合は、しばしば対比を表すと述べている。拡張義2に対応する「是……」は「不是……」と対比して用いられることが多く、弁解の語気を表す場合がある。例(13)の場合、「是……」による肯定の意味と「没……」による否定の意味を組み合わせて用いられることによって、弁解のニュアンスが出てくる。

6.1.1.3 「のだ」と語気助詞の対応

収集したテータには、「のだ」と「啊」「呢」「呗」などの語気助詞に対応する例は148例である。特に、拡張義3には語気助詞に対応する例が多い。以下のような例がある。

- (14) a. 「早く言ってくれよ。僕はいそいでるんだ」

（石川達三『青春の蹉跎』）

- b. “你快说啊，我还有急事呢！”

（石川达三《青春的蹉跎》）

- (15) a. 「一厘も残りなく償わずば、という言葉もあるし、或者には五タラント、或者にはニタラント、或者には一タラントなんて、ひどくややこしい譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ。」

（太宰治『斜陽』）

- b. “还有‘倘若不一厘钱都偿清的话’这类词句，又有很复杂的比喻，说什么‘一个给了五千，一个给了二千，一个给了一千’，看来耶稣也挺会算帐啊，”

（太宰治《斜阳》）

- (16) a. 「しかし、浜田君、僕にはまだよく分っていないんだ。君はナオミから鍵を貰って、此处へ何しに来ていたと云うんです？」

（谷崎潤一郎『痴人の愛』）

- b. “可是，浜田，我还没搞清这件事呢。你从纳奥米那里拿到钥匙，到这儿来干什么？”

(谷崎润一郎《痴人之爱》)

「のだ」が表す説明、主観的判断のモダリティは中国語の気持ち表出の「語気助詞」に訳されている。「啊」は話し手の感情を表し、「呢」は事実を相手に確認させる働きをする。例(14)はプロトタイプの意味の「のだ」が語気助詞の「呢」に対応する例である。例(15)(16)は拡張義3の「のだ」がそれぞれ語気助詞の「啊」「呢」に対応する例である。

「命令」を表す「のだ」に対応する中国語表現は以下の例(17)(18)のように、無標識の命令文になることが最も多いが、例(19)(20)のように語気助詞「吧」「呗」を伴ったものもある。また、次節で述べる助動詞「要(～なければならない)」に対応する例もある。

- (17) a. 「声を出すな……乱暴はしない……静かにしているんだ……」

(安部公房『砂の女』)

- b. “别出声……我不会胡来……你安静一点……”

(安部公房《砂女》)

- (18) a. 「(前略)さあ行け。一番下まで、ゆっくり行くんだ……」

(石川達三『青春の蹉跌』)

- b. “往下，慢慢地滑……”

(石川达三《青春的蹉跌》)

- (19) a. 柏木はというと、立ちすくんだままの私の顔を見上げて、異様に子供っぽい微笑をうかべて、こう言った。「さあ、追っかけて行くんだ。慰めてやるんだ。さあ、早く」

(三島由紀夫『金閣寺』)

- b. 柏木立刻抬头看了看呆立着的我，那脸又变得象个孩子似地笑起来。他对我说：“哟！快去追吧！要安慰她一下！还不快去！”

(三島由紀夫《金閣寺》)

- (20) a. 「そりあ、そうだが——お前は要領がいいから羨しい。俺なんか……」
「なんとか工面して来るんだよ」

(大岡昇平『野火』)

- b. “是啊，但我佩服你手腕高，像我这样的……”
“想点办法呗。”

(大冈升平《野火》)

中国語には「文法形式」としての「命令文」がなく、主語が第2人称“你／你们”の平叙文をそのまま、あるいは、その主語を省略して使用する。語気助詞の「呗」「吧」は語気を和らげる働きをしている。勧告・懇願・誘いなどの文によく用いられる。「呗」「吧」は命令文の文末に加わると強制的なニュアンスが弱められることになる。「のだ」はすでに定まっている確実な事態を判断として提示することによって、間接的に行為の実行を促す。「のだ」の「命令」の意味は語用論的に導き出されるものである。例(18)(19)のように、語気助詞「呗」「吧」によって表されているのは、その命令が間接的であることを考慮したものと言えよう。

6.1.1.4 「のだ」と助動詞の対応

「命令」と「決意」を表すの「のだ」は助動詞の「要(～なければならない)」に対応する例がある。

- (21) a. 「おい、僕の潜る通りに潜って来い。絶対に線に触れるな。僕が線を取除けるからな。もし僕が倒れたら、服以外には手をかけるな。よいか、ズボンの端を掴んで引きずるんだ」

(井伏鱒二『黒い雨』)

- b. “喂！按我的钻法钻过来，绝对不要碰线。因为我在排除电线，如果我倒下了，除了衣服以外，别的地方都不要碰。知道吗？要抓住裤脚边往外拽。”

(井伏鱒二《黒雨》)

- (22) a. 「いや、我々は再起をはかるんだ、突破口を見つけるんだ」

(井伏鱒二『黒い雨』)

- b. “不，我要重新努力，闯过这一关。”

(井伏鱒二《黒雨》)

「要」は助動詞であり、「(必要・義務的に) しなければいけない」「…する必要がある」という意味を表す。日本語の「命令」を表す「のだ」に対応する中国語の表現は語彙的に「当為」の意味を表す助動詞であり、日本語の「のだ」のようにその「命令」の意味が語用論的に導き出されたものではない。「命令」の意を表す「のだ」は、それぞれ意味上では類似性のある助動詞と語気助詞に訳され、あるいは無標識の命令文に訳されてはいるが、それらの「命令」、「当為」的な意味は当該形式に備わった語彙的なものであり、日本語の「のだ」のように語用論的な条件が満たされた結果を表されたものではない。また「要」は「意志語気」を表し、「～したい」という意味を表す。日本語の「決意」を表す「のだ」に対応する中国語の表現も語彙的に意志を表す助動詞に訳され、日本語の「のだ」のように「決意」の意味が語用論的に導き出されたものではない。

6.1.1.5 「のだ」とその他の中国語の対応

「のだ」に対応する無標識の文には、意識によって接続詞、副詞などに訳されたものは以下のような例がある。

- (23) a. 書記の主張に部落長が反駁して、村には黒大兵を捕虜として収容する力がないということを作りかえした。しかもあの遠い山道を危険な黒大兵を護送することも村の人間たちの力では難しいだろう。長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にしたのだ。

(大江健三郎『飼育』)

- b. 村长不同意书记的说法，反复强调村里没有收容黑人俘虏的能力，更不用说押着这个危险的“猎物”翻山越岭，因为梅雨和洪水使一切都更加复杂困难。

(大江健三郎《飼育》)

- (24) a. 「大袈裟にいやがって、彼奴の足、結構役に立つんだ。ただ俺をこき使おうと思って、そら使ってやがるんだ」

(大岡昇平『野火』)

- b. “他就是装假，其实那家伙的脚相当好用。他就是为了逼我干活，才装病的。”

(大岡昇平《野火》)

例(23)はプロトタイプの意味の「のだ」が中国語の接続詞「因为」(…なので、…だから、…のために)に対応する例である。「のだ」はある事象の背後の事情、原因などを説明する意味があるため、中国語では原因や理由を表す「因为」に意識されている。また、例(24)のように、「実は」などのニュアンスを表す「のだ」は「其实」(実は、実際のところ)「确」(確かである、真実である)などの副詞に対応する例も見られた。これも意識によるものと考えられる。

6.1.2 「のだ」に対応する中国語が表している語気

前項では、「のだ」に対応する中国語の傾向性について分析したが、本項では、「のだ」に対応する中国語が表している語気について考察する。

賀(1993:176)は中国の書き言葉における語気の体系を以下の図 6-1 のようにまとめている。

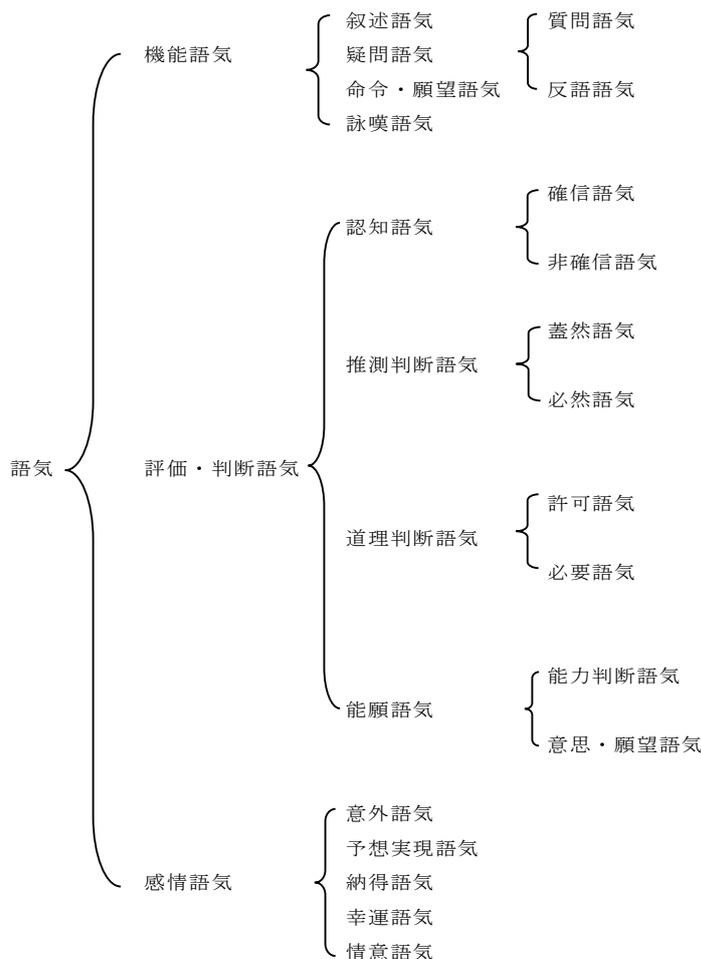


図 6-1 中国の書き言葉における語気の体系

賀(1993)は「是……的」構文が確信語気を表すことができると指摘している。李訥・安珊笛・張伯江(1998)は「的」を「確信伝達」を表す語気詞としている。「のだ」の拡張義3と拡張義2が「是……的」に対応する時、「のだ」は中国語の語気体系における確信語気に対応している。

また、「命令」を表す「のだ」が対応している助動詞の「要」(～なければならない)は賀(1993)の「道理判断語気」の「必要語気」に対応している。賀(1993:169)は「必要語気」は話し手が道義、情理または客観的環境の求めるところにより、文中の命題を実現することが必要であり、その命題を実現しないことを許さないと考えることを表すものである」と述べている。日本語の「命令」を表す「のだ」に対応する中国語の表現は語彙的に「当為」の意味を表す助動詞に訳されている。日本語の「のだ」のようにその「命令」の意味が語用論的に導き出されたものではない。「命令」を表す「のだ」は助動詞の「要」と語気助詞「呗」「吧」より、中国語の無標識の命令文あるいは文末に「！」が付く命令文に対応するものが多い。これは賀(1993)の分類によると、「命令・願望語気」に対応している。さらに、「決意」を表す「のだ」が意志を表す助動詞「要」(～したい)に対応しているものが多い。これは賀(1993)の「意思・願望語気」に対応している。しかし、「命令・願望語気」、「意思・願望語気」は意識によるもので、日本語の「のだ」のように語用論的な条件が満たされた結果を表されたものではない。

以上、「のだ」に対応する中国語は無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「命令・願望語気」、「意志・願望語気」「必要語気」などを表す形式、または語気副詞、語気助詞とその他の形式(接続詞、副詞)であることがわかった。しかし、対応できるものは「のだ」全体の十分の一くらいしかない。語気体系の対応から見れば、非対応関係になっていることが確認された。

6.2 「ものだ」に対応する中国語

本節では、「のだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を分析する。

6.2.1 では「ものだ」に対応する中国語の傾向性を分析する。6.2.2 では「ものだ」に対応する中国語が表す語気を分析する。

6.2.1 「ものだ」に対応する中国語翻訳の傾向

今回収集された171例の「ものだ」の中に、例(25)～例(30)のように無標識の中国語文に対応しているものは127例あった。

(25) a. 塩気を摂らない日が重なると、手にとまった蠅を叩こうとしても、叩く方の手首がぐにゃりとして蠅に届かないものだと中田君が云った。

<プロトタイプの意味> (井伏鱒二『黒い雨』)

b. 盐一天一天地变得贵重起来了，身体如果老是吸收不到盐分，即使想打停在手上的苍蝇，手腕子也会软绵绵地伸不到苍蝇身上去。

(井伏鱒二《黒雨》)

(26) a. 「讓治さん、あなた好い児ね、一つ接吻して上げるわ」と、彼女はからかい半分によくそんなことを云ったものです。

<拡張義 1> (谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “让治先生，你是个好孩子，吻你一下吧。”她经常半开玩笑地这样说。

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

(27) a. すると、あの空のにごりは、穴の内側だけの現象だったのだろうか？それとも、飛砂の流れを、霧ととりちがえたのだろうか？いずれにしても、まずいことになったものである。

<拡張義 2> (安部公房『砂の女』)

b. 原来天空的浑浊，难道只是洞穴内侧的现象吗？难道是把飞沙的流动与薄雾搞混淆了吗？反正事情变得有些棘手了。

(安部公房《砂女》)

(28) a. 「しかし、よく命令だけで動けるもんだね。あれだって一応命がけだからな」

<拡張義 3> (石川達三『青春の蹉跌』)

b. “可是，那些人都那么听命令，一有命令就拼命啊。”

(石川达三《青春的蹉跌》)

(29) a. 男は、不意をつかれる。まったく、妙な言いがかりもあったものだ。

<拡張義 3> (安部公房『砂の女』)

b. 男人冷不防吃了一惊。全是奇谈怪论。

(安部公房《砂女》)

(30) a. 聞けば、シゲ子たちが広島から帰って来ると、二人の客が縁側にしょんぼり腰をかけていたと云う。僕らの安否を気づかって、山奥の村からわざわざやって来たものである。

<解説>(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 茂子说她和矢须子从广岛回来时，就看见两位客人正无精打采地坐在走廊边发呆。因为他们很关心我们的安全情况，所以才特意从深山坳的村庄里来看望我们。

(井伏鱒二《黒雨》)

一方、プロトタイプの意味の一部、拡張義3の一部、解説、当為、詠嘆、教示を表す「ものだ」には中国語との対応関係が見られた例は44例あった。収集した実例を基に、文末の「ものだ」に対応する中国語をまとめると次の表6-1のようになる。

表6-1

「ものだ」に対応する中国語表現の出現数と出現率

	無標識の文	是……的 (1)	是……的 (2)	(应)该 要 得	居然 竟然 竟	!	啊(呀哇)、 哩など	計
プロトタイプ的意味	59 (80.8%)		14 (19.2%)					73 (42.7%)
拡張義1	28 (100%)							28 (16.4%)
拡張義2	1 (100%)							1 (0.6%)
拡張義3	36 (67.9%)				8 (15.1%)	2 (3.8%)	7 (13.2%)	53 (40%)
解説	1 (25%)	3 (75%)						4 (2.3%)
当為				5 (100%)				5 (2.9%)
詠嘆	1						4	5

	(20%)						(80%)	(2.9%)
教示	1 (50%)			1 (50%)				2 (1.2%)
計	127 (74.3%)	3 (1.7%)	14 (8.2%)	6 (3.5%)	8 (4.7%)	2 (1.2%)	11 (6.4%)	171

6.2.1.1 「ものだ」と「是……的」の対応

「のだ」のプロトタイプの意味は「是……的」(二)に対応する例は14例あった。残り59例は無標識の文に対応している。

(31) a. 若い女性の羞恥心というものは、時と場合によっては頑迷固陋の気性と隣合わせになるものだ、だから悲劇が起ることがある。梶田医師が云ったそうだ。

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 年轻女子的羞耻心根据时间和地点，是和顽固守旧的风气紧密相连的，所以有时会发生悲剧。梶田医生是这么说的。

(井伏鱒二《黒雨》)

(32) a. 「こだわりやしないわ。でも息子の愛人なんて、母親から見ると、憎いものだって言うわね。息子を取られるような気がするんだってさ」

(石川達三『青春の蹉跎』)

b. “不是怕。你想，儿子的情人，在母亲看来总是讨厌的，因为她把儿子夺走了，你说是不是？”

(石川达三《青春的蹉跎》)

プロトタイプの意味の「ものだ」はある事象は一般的にこうであるということを相手に提示し、認識してほしいというモダリティを表している。王(1997:207-208)は「是……的」(二)は話し手の主観的論理を明示する機能があるとしている。「是……的」(二)の主語は具体的な対象を指すのではなく、抽象化された一般概念を表すので、話し手の視界から離れた、事象の一般理論の対象となっている」と述べている。そのため、「具体的な描写から一般的な理論に組み込まれて、「一般論として……」、「常識では……」という含みももっている」と指摘している。このような含みがあるため、プロトタイプの意味の「ものだ」の一部は「是……的」(二)に対応するのではないかと考える。

「プロトタイプの意味」を表す「ものだ」に対応した中国語文は、「ものだ」に対応する表現を持たない無標識の陳述文(主に「主語＋述語＋(目的語)」という構成)になっている。「ものだ」は「多く」、「大概」、「普通」などの副詞と共起することが多い。これらの副詞が「ものだ」と共起する際、中国語訳文では以下の例(33b)(34b)のように、「一般(一般的に)」「大多(大多数、大部分)」などの副詞が出現している。(33b)「妇女嘛，一般都是这个样」と(34b)「小老婆一到无用的时候大多被人遗弃」の中国語文は一般的な傾向を示しているが、それは日本語の「多く」「普通」が語彙的に対応する中国語の副詞に訳された結果表されたものと言える。

(33) a. 「女というものは、多くああしたものだ」と自分で自分に言って見た時は、思わずあの迷信深い蓮華寺の奥様を、それからあのお志保を思出すのであった。

(島崎藤村『破戒』)

b. “妇女嘛，一般都是这个样。”丑松自言自语地说。这时，他不禁想起了莲华寺那位特别迷信的师母，还有那位志保姑娘。

(島崎藤村《破戒》)

(34) a. 人の話では、お妾は普通、用が無くなると、捨てられるものですって。

(太宰治『斜陽』)

b. 人们说，小老婆一到无用的时候大多被人遗弃。

(太宰治《斜陽》)

また、今回収集した4例の「解説」の「ものだ」の中で「是……的」(一)に対応する例は3例あった。

(35) a. 工場長は野辺送りした僕の報告を聞くと、在木カネの介抱していた充田タカという被爆者が死んだので、僕に葬式のお経を読めと云った。

充田タカという女は、従来この工場の炊事場へ広島市内から浅蜷や雑魚を売りに来ている闇屋である。それが一昨日の空襲で被爆して顔と両手に傷を受け、今朝がた在木カネを頼ってここの炊事場へ辿りついたものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 充田高这个女人过去是从广岛市把蛤仔和小杂鱼贩到这个厂里伙房来的黑市

販子。她在前天空袭中被炸，脸和双手受伤。今天早上才到这个伙房里来求在木金的。

(井伏鱒二《黒雨》)

(36) a. これはお化のような大きな火の玉が高空で閃く瞬間に、光の高熱が磨硝子の模様だけ残して廊下板を黒こげにしたのだろう。その板ぎれを爆風が吹きあげて川か海に撒き散らしたものだと判断して間違いない。

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 这可能是妖魔似的大火球在高空闪亮的那一瞬间，在光的高温照射下，把走廊上的木板烧得只留下毛玻璃花纹了的缘故吧。可以断定这些碎木片是被大风卷起之后，撒落在江里或大海里的。

(井伏鱒二《黒雨》)

「解説」の「ものだ」は「ある事象を他の事象の背後の事情という存在として客体化し、それを話し手の解説として提示する」という意味を表す。対応する中国語の例(35b)と例(36b)は「由来」「原因」などを説明の焦点とする「是……的」(一)の文になっている。

6.2.1.2 拡張義3に対応する中国語

第5章では、「ものだ」の拡張義3を3つの構文形式に分けている。それぞれ対応する中国語をまとめると次の表6-2のようになる。「ものだ」の拡張義3に対応する中国語の語気形式に語気副詞、語気助詞、強い感情を表す感嘆符「！」がある。ほかは全部無標識の文になっている。

表 6-2

拡張義3に対応する中国語

	陳述文	居然、竟(然)	！	啊(呀哇)、哩など	計
A	22(78.6%)	5(17.8%)		1(3.6%)	28
B	5(55.5%)	3(33.3%)	1(11.1%)	1(11.1%)	9
C	10(62.5%)		1(6.2%)	5(31.25%)	16

今回の観察によれば、種類Aと種類Bは例(37b)、(38b)のように「居然」「竟(然)」などの語気副詞に対応する例はそれぞれ5例、3例あった。「居然」は「(本来起こってはな

らないことや起こり得ないことが起こったり、容易になしえないことが実現したりする場合の) 意外にも, なんと, よくも, まあ」という意味で、「竟(然)」は「(思いがけない状況が発生した場合の) 意外にも, なんと, こともあろうに」という意味である。賀(1993)では、居然「竟(然)」などによって表される語気を感情語気の「意外語気」に分類されている。驚きを表す拡張義³の一部が中国語の「意外語気」に対応している。

(37) a. そんなカオスの中からよく致命的な伝染病が発生しなかつたものだと今でも僕は不思議に思っている。

(村上春樹「ノルウェイの森」)

b. 我现在还感到不可思议：在那般混浊状态中居然没有发生致命的传染病。

(村上春樹《挪威的森林》)

(38) a. 世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだと、私は、その時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいじらしく、哀れに思えてなりませんでした。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. 那时我痛切地感到，世上竟有如此不负责任的父母兄弟，因而也就更加觉得纳奥米可怜、值得同情。

(谷崎潤一郎《痴人之爱》)

また、種類 A、B、C に対応する語気助詞は以下の例(39b)(40b)に見られる「呀」、「哇」などがある。語気助詞「呀」²²、「哇」²³は感嘆を表す「啊」の一種の音便を表記するので、「啊」に相当する。

(39) a. 一とまず、納得すると、なにはさておき、まずタバコだ。一週間、よくも辛抱できたものだと思う。

(安部公房『砂の女』)

b. 暂且想通了，闲话休提，先来抽口烟吧。一星期了，可真够受哇。

(安部公房《砂女》)

²² 「啊」はその直前の音が i で終わる場合、その音に影響されて起こった音便 ya(呀)を表記する字。

²³ 「啊」は直前の u、ao、ou の音に影響されて wa(哇)と発音される。それを表記する字。

(40) a. いや、これは、おれの足の臭いだ……そうしてみると、急に親しみがわいてくるのだから、おかしなものだ……

(安部公房『砂の女』)

b. 不，这是咱的脚臭丫……这么一想，心理竟忽然涌起阵阵亲切感，真奇怪呀……
…(安部公房《砂女》)

一方、種類 A、B、C に対応する無標識の中国語文の一部は「副詞＋形容詞/動詞」のような陳述文になっている。種類 A に対応する無標識の中国語文はこのような構成のものが 3 例、種類 B は 2 例、種類 C は 8 例ある。

(41) a. 瓦の色も、焰の舌のように赤くなっているね。凄いものが出来たもんだ

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 瓦的颜色红得象火舌一样。真是厉害。

(井伏鱒二《黒雨》)

(42) a. 「しかし——奇異なことが有れば有るものだ。まあ、貴方の死んだ夢を見るなんて」

(島崎藤村『破戒』)

b. “可是，说怪也真怪，我怎么竟梦见你死了。”

(島崎藤村《破戒》)

(43) a. 「呆れたもんだね、まさに海豹に違いないね」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “真吓人，你简直是只海豹。”

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

「ものだ」に対応する中国語の感嘆符「！」は、以下の例(42)のように「副詞＋形容詞/動詞」の構成に付加される。話し言葉では感嘆符「！」がイントネーションや強勢の違いに対応する。この感嘆符がそのような話し言葉における違いを書き言葉において視覚的に表したものである。

(44) a. 「見事なもんだな。どこで習ったの」と私が訊いた。

(三島由紀夫『金閣寺』)

b. “真叫妙手高艺！从哪学来的？”我问。

(三島由紀夫《金閣寺》)

以上、拡張義3の「ものだ」と中国語の対応を分析した。拡張義3の「ものだ」は無標識の中国語文に対応することが多いが、一部の例においては中国語の「意外語気」に対応している。

6.2.1.3 「ものだ」と助動詞の対応

「当為」を表すの「ものだ」は以下の例(45)～例(47)のように、助動詞の「得(～なければならない)」「要(～なければならない)」「该(べきだ)」に対応していた。また、1例「教示」を表すの「ものだ」は例(48)のように、助動詞の「要(～なければならない)」に対応していた。

(45) a. 「そりゃ不可」と大日向は笑いながら言葉を添えた。「こういう時には召上るものです。真似でもなんでも好う御座んすから、一つ御受けなすって下さい」

(島崎藤村『破戒』)

b. “那可不行。”大日向笑着插话说，“今天你得喝，哪怕是意思意思，也得接过这一杯。”

(島崎藤村《破戒》)

(46) a. 「女の子はもう少し上品に煙草を消すもんだよ」と僕は言った。「それじゃ木樵女みたいだ。無理に消そうと思わないでね、ゆっくりまわりの方から消していくんだ。そうすればそんなにくしゃくしゃにならないですむ。」

(村上春樹「ノルウェイの森」)

b. “女孩子熄烟要熄得文雅一点。”我说，“那样熄，活象砍柴女。不要硬碾，从四周开始慢慢熄，那就不至于把烟头弄得焦头烂额的。”

(村上春樹《挪威的森林》)

(47) a. 「そんな、君のような——」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人が呈げるッて言うものは、貰うもんですよ」

(島崎藤村『破戒』)

b. “你这是怎么啦……”丑松望着省吾的脸说，“人家说送给你，就该收下嘛。”

(島崎藤村《破戒》)

(48) a. 「ふん、ない事があるもんか、女と男と勝負事をすりゃ、いろんなおまじないをするもんだわ。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “哼，不存在的事情哪会有呢！女的和男的赌钱，就要用各种绝招嘛。”

(谷崎潤一郎《痴人之爱》)

しかし、このような「ものだ」に対応した中国語表現を見ると、日本語の「ものだ」のような語用論的なものは見られない。「該」は助動詞であり、主語と述語である動詞の間に置かれ、(道理・人情などからして)「するのが当然である」「すべきである」という意味を表している。また、同じく「得」も助動詞であるが、これは主に話し言葉で用いられ、「(やむをえず)しなければいけない」「…する必要がある」という意味を表す。さらに、「要」も助動詞であり、「(必要・義務的に)しなければいけない」「…する必要がある」という意味を表す。以上のように、日本語の「当為」「教示」を表す「ものだ」に対応する中国語の表現はみな語彙的に当為の意味を表す助動詞であり、日本語の「ものだ」のようにその当為、教示の意味が語用論的に導き出されたものではない。「命令」を表す「のだ」の一部と同じく、賀(1993)の「必要語気」に対応する。

6.2.1.4 「ものだ」と語気助詞の対応

前項で述べたように、「ものだ」の拡張義3の一部は「呀」、「哇」などの語気助詞に対応する。また、「詠嘆」を表す「ものだ」は「啊」、「呀」などの語気助詞に対応する例も見られた。

(49) a. 一とまず、納得すると、なにはさておき、まずタバコだ。一週間、よくも辛抱できたものだと思う。

<=例(39)> (安部公房『砂の女』)

b. 暫且想通了，闲话休提，先来抽口烟吧。一星期了，可真够受哇。
(安部公房《砂女》)

(50) a. 「何故、新平民ばかりこの社会に生きながらえる権利が無いのであろう——
人生は無慈悲な、残酷なものだ。
(島崎藤村『破戒』)

b. 为什么独有新平民同样生在社会上却毫无权利呢？人生多么不仁，多么残酷啊！
(島崎藤村《破戒》)

(51) a. 路傍の樹木の枝。葉の一枚も附いていない枝、ほそく鋭く夜空を突き刺して
いて、「木の枝って、美しいものですわねえ」と思わずひとりごとのように言
ったら(後略)
(太宰治『斜陽』)

b. 路旁树木的树枝。一片树叶都没长的细长树枝，它们刺向夜空。“树枝真美呀，”
我情不自禁的嘟囔道。
(太宰治《斜阳》)

「ものだ」の拡張義3の一部と「詠嘆」を表す「ものだ」に対応する中国語は「啊」、
「呀」などの感情を表す語気助詞あるいは感嘆文になる。中国語の感嘆文は、以下が示
すように、主に副詞と文末の感嘆符から構成される。

主語 + (述語) + 副詞 + 形容詞(名詞) + 語気助詞 + 感嘆符(!)
例 人生 多么 残酷 啊 !
人生 は無慈悲な ものだ。

「ものだ」が対応しているものは、以上の構文から感嘆符(!)をとったものが多い。

(主語) + (述語) + 副詞 + 形容詞(名詞) + 語気助詞
例 树枝 真 美 呀
木の枝って、 美しい ものだ。

「詠嘆」を表す「ものだ」は話し手が個別の体験を通してある一般的な事柄を再度認
識する場合に用いられる。その個別の体験が一般論と一致し、話し手が一般論を再度認

識し、感情的な詠嘆が誘発され、語用論的に感慨の意が生じたのである。しかし、「詠嘆」を表す「ものだ」に対応する中国語は直接感情を表す感嘆文になっており、「ものだ」のような語用論的な解釈が見られなかった。

6.2.2 「ものだ」に対応する中国語が表している語気

「ものだ」のプロトタイプの意味と解説の「のだ」が「是……的」に対応する時、「ものだ」は中国語の語気体系における確信語気に対応している。また、「ものだ」の拡張義3の一部は「居然」「竟(然)」などの語気副詞に対応している。賀(1993:173)は「意外語気は話し手が文中の命題によって表される出来事を意外に思っていることを表す。この語気は語気副詞「竟/意外にも」、「竟然/意外にも」、「居然/意外にも」等によって表される」と述べている。「ものだ」の拡張義3の一部は賀(1993)が示した「感情語気」に含まれる「意外語気」に対応する。さらに、拡張義3の一部と「詠嘆」を表す「ものだ」は中国語の感嘆文に対応している。賀(1993:163)は「詠嘆語気によって表される話し手のコミュニケーション目的は話し手自身の感情である。文末に感嘆符「!」、文中に「太/あまりに」、「多ム/なんと」、「多/なんと」、「真/まことに」、「特別/特に」などの程度副詞、および「这ム/あんなに」、「那ム/あんなに」などの程度を表す指示代詞を伴っている文の機能は詠嘆であると見なされる」と述べている。拡張義3の一部と「詠嘆」を表す「ものだ」に対応する中国語の感嘆文は賀(1993)が分類した詠嘆語気を表す。そして、感情を表す語気助詞の「啊」、「呀」などによって構成された「树枝真美呀」のような文も詠嘆語気を表すと見なす。「当為」「教示」を表す「ものだ」は「必要語気」を表す助動詞の「该」、「得」、「要」に対応しているが、日本語の「ものだ」のようにその当為、教示の意味が語用論的に導き出されたものではない。

以上、「ものだ」に対応する中国語は無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「意外語気」、「詠嘆語気」、「必要語気」などを表す形式であることを判明した。しかし、対応できるものは「ものだ」全体の四分の一くらいしかない。「ものだ」と中国語の対応率は「のだ」に比べて高くなっているが、語気体系の対応から見れば、やはり非対応関係になっていることが確認された。

6.3 教科書に関わる問題

前節では、「のだ」「ものだ」と中国語の対応関係を明らかにした。本節では、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」がそれぞれどのように扱われているかを考察する。その上で、「のだ」「ものだ」の提示の仕方とその問題点を明らかにする。

今回選定した教科書は中国の日本語専攻の学生を対象とし、最も権威がある上海外国語大学編の『新編日語』と北京大学編の『総合日語』である。この二つの教科書は大学の日本語専攻で4年間にわたって履修される「総合日本語」という科目で、最も広く使用されている教材で、代表的な教材であると考えられる。上海外国語大学編の『新編日語』は、一課が基本的に前文、会話、単語、ファクション用語、解説、読解文、練習の7つの部分からなり、文法の紹介は主に解説の部分に集中している。前文と読解文の内容は学校生活から、家庭生活、社会、日本文化、風俗習慣まで広い範囲にわたっている。『新編日語』は四冊あり、第三冊から一課の構成が調整され、本文、会話、応用文、単語、言葉と表現、ファクション用語、練習の7つの部分になっている。文法の紹介は主に言葉と表現の部分に集中している。一方、北京大学編の『総合日語』は一課が基本的に学習目標、学習要点、会話、単語、解説・語彙、解説・文法、解説・表現、練習からなり、文法の紹介は主に解説・文法の部分に集中している。本文の内容は日常生活、日本文化を中心としており、全体的に日本語の自然性、文化要素、中国人の学習特徴を重視する点が特徴となっている。

6.3.1 中国の日本語教科書における「のだ」「ものだ」の提示の仕方

本節では、上海外国語大学編の『新編日語』と北京大学編の『総合日語』における「のだ」「ものだ」のそれぞれの提示の仕方とその問題点を扱う。

6.3.1.1 中国の日本語教科書における「のだ」の提示方法

○『新編日語1』(改訂版)(2009) 上海外語教育出版社

第一冊は20課からなる。

『新編日語1』第十三課 (pp. 229-230)

四、用言連体形+のです

「なにがほしいのですか。」「辞書がほしいのです。」

「の」是形式体言，也称准体助词，在句中起着使用言体言化的作用。名词后续「のです」时要变成「名詞なのです」。口语中常用「…んです」。「のですか」以某情形或前面交谈的内容为前提，要求对方做一个说明。「のです」用于对某情形的说明、解释。例如：(▲「の」は形式名詞であり、準体助詞とも呼ばれている。文を体言化する機能を果たしている。「のです」は名詞に接続する時「名詞なのです」になる。話し言葉では「んです」になることが多い。「のですか」はある状況や先に言った内容を前提に、相手の説明を求める。「のです」はある状況の説明、解釈に用いられる。例えば、)

▶「これ、おみやげです。」(这是送给你的礼物。)

「ありがとうございます。どこへ行ったんですか。」(谢谢。你去哪里了?)

在这组对话中，由于后者收到了对方赠送的礼物，所以才推论对方一定是去了哪里，并以此为前提提问「どこへ行ったんですか」。(▲この会話では、後者が相手からプレゼントをもらったので、どこかへ行ったのを推論し、それを前提に「どこへ行たんですか」と発話する。)再如：

▶ あっ、雨が降っているんですか。(哎呀，在下雨吗?)

这个问句的前提是对方手中在拿着雨伞等物，显示天在下雨。以此为前提，说话人问道「あっ、雨が降っているんですか」。(▲相手が傘などを持っていることから雨が降っていると推論したことを前提に、話し手が「あっ、雨が降っているんですか」と発話した。)

▶ その日は雨が降っているのです。(那天正下着雨。)

▶ わたしは肉がきらいなのです。(我是不爱吃肉的。)

▶ 「今日は会社に行きませんか。」(今天不去公司吗?)

「ええ、休みなのです」(是的，今天是休息天)

▶ 「陳さん、なにをしているんですか」(小陈，你在干什么呢?)

「手紙を書いています。」(在写信。)

▶ 牧野さん来月帰国するんですか。(牧野先生下个月要回去了吗?)

(▲が付いている () 内の文は筆者の訳である。以下同様)

○『新編日語 3』(改訂版)(2009) 上海外語教育出版社

第三冊は 18 課からなる。

『新編日語 3』第八課 (pp. 182-183)

七、「のだ」表示要求 (▲要求を表す)

細い棒でさしながら話をするんだね

「のだ」除了用于说明之外，还能表示要求，用于叙述在某种特定情况下，希望或不希望出现的行为。因此当讲话口气强调一些时，「のだ」就接近于命令、禁止。(▲「のだ」は説明のほか、相手に対する要求を表す時にも用いられる。ある特定の状況においての望ましい行為あるいは望ましくない行為を表す。話す口調が強い時、「のだ」は命令、禁止を表すことができる。)

▶ 食べる前には手を洗うのですよ。(吃之前要洗手。)

▶ ぶざけるんじゃない。(不要开玩笑。)

▶ もう少しじゃないか、がんばるんだ。(不是还差一点吗?再坚持一会儿。)

▶ そんなことは、早く忘れるんだ。(那种事，你还是快点忘了它。)

▶ これからお母さんのいうことをよく覚えておくんだよ。(今后你一定要牢牢记住妈妈我说的话呀。)

『新編日語 3』第十一課 (p. 246)

(1) 「のだ」表示讲话人的看法或疑问 (▲「のだ」は話し手の主張と疑問を表す)

「疑問詞+のだ」表示疑問。(▲「疑問文+のだ」疑問を表す)

何に迷うんだ？/どうして迷うんだ？

「のだ」承接含有疑問詞的句节表示希望得到对方的说明，或自言自语。有时会含有责备的语气。例如：(▲「のだ」は疑問詞を含める文を受け、相手の説明を求めたり、独白したりする。非難のニュアンスを表すこともある。例えば、)

- ▶あの人はいったいわたしの何が気に入らなんだ。(他究竟不满意我什么呢?)
- ▶こんな馬鹿みたいなことをしたのはだれなんだ。(是谁做了这么傻的事情呢?)

(2) 强调讲话人的看法等。(▲話し手の主張を強調する)

ぼくは、未来は好きなんだけど、どうも、そこんところが気に入らないんだ。

这种用法的「のだ」所表达的意思比较复杂。如例一，讲话人看到告示，这才明白明天有个会议要开。这种用法语法上称为「発見」即初次获得信息。又如例四表示讲话人强调自己的看法以说服自己。(▲この用法では「のだ」の意味は複雑である。例一では、話し手が掲示板を見て明日に会議があることに気づいた。この用法は「発見」と呼ばれ、初めて情報を獲得した場合に用いられる。また例四は話し手が自分の認識を強調し、自分自身を納得させるために使う。)

- ▶(掲示板を見て)あした会議があるんだ。(哦，明天要开会。)
- ▶(独り言で)納豆ってうまいんだ。(纳豆真不错。)
- ▶この絵、偽物なんだ。(这幅画，是贗品。)
- ▶ぼくはこんなに一生懸命勉強したんだ。試験に落ちるはずはない。(我这么努力学习，考试不可能不及格的。)

『新編日語3』第十二課 (p.268)

「のです」表示话题的开场白(▲「のです」は前置きを表す)

すみません、ちょっと電話したいのですが。

一个新的话题被提出时，往往会先找一个开场白。「のです」可以用来表示这样的开场白。用「のです」表示的开场白，下面要讲述的事情往往是听者不知情的。例如：(▲新しい話題を切り出す時、前置きが必要である。「のです」はこのような場合に用いられる。「前置き」として現れたことは聞き手の知らないことが多い。)

- ▶先生、お話があるので。お部屋に伺ってもよろしいでしょうか。
- ▶「実はわたし田中さんと結婚するんです。」「それはおめでとう」「それで、先生に仲人をしていただきたいのですが。」「(「其实我和田中君要结婚了。」「恭喜恭喜。」「所以我想请老师做我们的婚姻介绍人。)」
- ▶駅前で個展をやっているんですが、よかったら見に来てください。(我在车站附近办了个我个人作品展览会，可以的话请过来看看。)

○『総合日語 1』(改訂版)(2010) 北京大学出版社

第一冊は 15 課からなる。

『総合日語』第一冊 第 10 課 ユニット 1 (pp. 178-179)

5. ～んです (説明)

「ん (n)」是由「の (no)」变化而来(元音“o”脱落造成)的,一般口语中用「～んです」,而书面语中则用「のです」。「～んです」和「のです」接在动词,形容词等用词的连体形后面,用于说明情况;用于疑问句时,表示要求对方就所提的问题予以说明,解释,这时大多无需译出。「～んです」还可以接在名词后面,这时要采用「N な」的形式。例如:(▲「ん (n)」は「の (no)」から变化してきた(「o」の脱落)。一般的に話し言葉では「～んです」が用いられ、書き言葉では「のです」が使用される。「～んです」と「のです」は動詞、形容詞等の用言の連体形に接続し、状況の説明を表す。疑問文に用いられる時、質問に対する説明、解釈を求める。この場合は訳さなくてもいい。「～んです」は名詞に接続する時、「N な」の形をとる。例えば、)

(1) 王: 天安門正面には天安門広場があります。

父: 人民大会堂もここにあるんですか。

王: はい、人民大会堂は天安門の西側にあります。

(2) 王: 東京の冬(冬: 冬天)はあまり寒くないですね。北京の冬は寒いんですよ。

鈴木: ああ、そうですか。

(3) 王: 高橋さん、今ちょっといいですか。

高橋: すみません。これから「これから: 从现在开始」授業なんです。あとでいいですか。

(4) 今晚テレビを見ません。明日テストがあるんです。

『総合日語』第一冊 第 10 課 ユニット 3 (p. 197)

3. ～のである (説明)

「のである」与「のです」一样,接在用词的连体形以及「名詞+な」后面,用于对前文提到的内容进行具体说明。「のである」主要用于书面语。例如:(▲「のである」と「のです」は用言の連体形と「名詞+な」に接続し、先行する文に対して具体的な説明を述べる。「のである」は書き言葉に用いられることが多い。例えば、)

(1) それんぞれの国の国王は、国の周りに高い城壁を作った。それで外敵を防いだのである。

(2) 天安門広場は中国の象徴(象徴: 象征)なのである。

(3) わたしは来週、東京へ行く。東西大学のシンポジウムで発表するのである。

6.3.1.1 中国の日本語教科書における「ものだ」の提示方法

○『新編日語3』（改訂版）（2009） 上海外語教育出版社

『新編日語』第三冊第十課(pp. 223-224)

形式体言「もの」表示理應如此(▲形式名詞「もの」「当然～である」という意味を表す)

そんなかわいそうなことをするものではないよ。

「もの」接在动词、活用词连体形之后。用「ものだ」的形式结句，表示根据一般情况或社会常识得出的一般结论，是不考虑事物特殊性的一般见解。其否定形式有两种，「ないものだ」和「ものではない」前者表示不做是当然的，后者一般表示「不该做…」「不可能做…」。(▲「もの」は動詞、活用語の連体形に付く。文末で「ものだ」を用いて、一般的な状況や社会通念から導き出された一般論を表す。この一般論は物事の特異性を考えない一般見解である。否定形が「ないものだ」と「ものではない」の2種類がある。前者はしないのが当然であることを表し、後者は「すべきではない」「するのが不可能」を表す。)

- ▶年を取ると目が悪くなるものだ。(年级大了，眼睛自然就不好使了。)
- ▶楽しい思い出はなかなか忘れないものだ。(愉快的回忆是难以忘怀的。)
- ▶一度太ってしまうと、そう簡単にやせられるものではない。(胖了之后是很难瘦下来的。)
- ▶いくら美味しくても、そんなにたくさん食べるものではない。(不管味道怎么好，也不该吃那么多。)
- ▶弱者いじめはしないものだ。(不可以欺侮弱者。)

『新編日語』第三冊第十五課(p. 339)

「ものだ」表示感叹或回忆(▲「ものだ」は詠嘆、回想を表す)

月間発行部数一億八〇〇〇万冊というのは全く驚くべきもので、…

以前は勉強に疲れた時、気分転換のために漫画を眺めたものだけと、…

「もの」是形式体言。用「ものだ」的形式可以表示说话者的感叹。「ものだ」接在过去时后面时，可以表示对过去常做的事或某种经历的回忆。(▲「もの」は形式名詞である。「ものだ」は話し手の詠嘆を表す場合に用いられる。過去形に付いて、過去によくしたことあるいは経験したことの回想を表す。)

- ▶ジェット機というのは速いものですね。(喷气式飞机好快啊。)
- ▶日本人はよく働くものですね。(日本人真勤奋啊。)
- ▶学生時代にはよく遅くまで帰らなかったものだ。(学生时代我经常是很晚也不回家。)
- ▶その時、わたしはよくこの川で泳いだものだ。(那时，我常在这条河里游泳。)

○『総合日語 3』（改訂版）（2010） 北京大学出版社

第三冊は 10 課からなる。

『総合日語』第三冊 第 6 課 (p. 159)

2. ～ものだ〈事物的本质〉

「ものだ」接在用词的连体形后，表示说话人对事物的本质真理客观规律等的判断。含有“本来就是～”的语气，一般无法直译出来。例如：(▲「ものだ」は用言の連体形に接続し、物事の本質、客観的な規則などの判断を表す。「本来そうである」というニュアンスを帯びているが、翻訳に反映することが難しい。

(1) 茶碗というのは、いつかは割れるものなんですから。

(2) 人の心は変わりやすいものだ。

(3) 母語の特徴を知っておくと、外国語がもっと理解しやすくなるものだ。

(4) 自分の気持ちを外国語で伝えるのは難しいものだ。

6.3.2 教科書の問題点

中国の日本語教育現場で使用されている教科書における「のだ」の扱い方の問題点は以下のようにまとめられる。

- ① 中国の日本語教科書における「のだ」の記述には拡張義 1 と拡張義 4 の提示が見られなかった。『新編日語』は『総合日語』より詳しく記述しているが、この二つの拡張義についてまったく触れていない。
- ② 「のだ」の各用法の構文的構造が十分示されていない。「説明」についてはテキスト文法レベルでの提示がほとんどで、「～のは～のだ」という文法レベルでの文型の提示がなかった。「～のは～のだ」という文の数多くはないが、名詞述語文との関係を示すことと「のだ」は文法レベルとテキスト文法レベルにまたがるものとして示す際に重要な役割を果たすため、文型導入時に提示する必要がある。
- ③ 「のだ」は初級レベルで導入され、中級レベルでさらに様々な用法が提示されている。しかし、各意味と用法の繋がりが示されていないので、学習者にとって「のだ」の全体像がつかみにくい。プロトタイプを先に導入し、各意味の繋がりを示しながら、段階を分けて提示することが必要である。
- ④ 「命令」などの語用論的意味に関して、文脈と使用場面の提示が不十分である。特に、「命令」を表す「のだ」は聞き手が話し手の要求を何らかの形で承知している場合に用いられやすいが、「命令」の用法を扱った『新編日語 3』の例文にはこのような使用場面の提示がまったくなかった。「のだ」の語用論的意味を教える際、誤用を避けるために、語用論的な条件の提示、状況、文脈の詳しい説明が必

要である。

中国の日本語教育現場で使用されている教科書における「ものだ」の扱い方の問題点は以下のようにまとめられる。

- ① 中国の日本語教科書における「ものだ」の記述は「当為」「本質」「回想」「詠嘆」といったものに限定されている。意味と用法の記述に関して、各教科書にばらつきがあるが、いずれも意味と用法の提示が不足している。
- ② 「ものだ」の各用法の構文的構造が示されていない。特に「ものだ」の拡張義³は構文種類が多いにもかかわらず、中国の教科書ではまったく触れていないのが現状である。「ものだ」の文型導入が必要である。
- ③ 「ものだ」は中級レベルで導入するのが一般的であるが、その意味と用法は教科書の中でばらばらに導入され、各意味と用法の繋がりが示されていないので、学習者にとっては理解しにくく、「ものだ」の全体像を把握することは難しい。各意味と用法の繋がりを提示し、まとめて導入することを検討すべきである。
- ④ 「当為」、「詠嘆」などの語用論的意味に関して、文脈と使用場面の提示が不十分である。これらの意味を教える時、語用論的な条件の提示、十分な状況説明が必要である。

以上、中国の日本語教育現場で使用されている教科書における「のだ」「ものだ」の提示方法の問題点について指摘した。これらの問題点は「のだ」「ものだ」の習得に問題を生じさせる原因となりうる。これらの問題点を解決するため、「のだ」「ものだ」の基礎研究の強化が不可欠である。また、それに基づいて、効果的な教授法の開発が必要であると考えられる。

6.4 「のだ」「ものだ」の教授法への提案

前節では、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」のそれぞれの取り扱い方と問題点を明らかにした。本節では、その問題点を解決するため、第4章～第7章までの基礎研究を基に、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時の注意するポイント、教授法への提案をまとめる。

6.4.1 「のだ」の教授法への提案

- ① プロトタイプの意味の導入について。初級で「のだ」のプロトタイプの意味を導入

する際には、文レベルとテキストレベルの文型を両方提示すべきである。例えば、以下のような提示の仕方が可能である。

<p>△ P のは Q のだ。 地面が濡れているのは雨が降ったのだ。 △ (P<発話・状況>) Q のだ。 地面が濡れている。雨が降ったのだ。</p>
--

このように提示することによって、「のだ」の「主題—解説」の構造、文レベルとテキストレベルの繋がりがより明確的に示すことができる。

- ② 各拡張義の提示について。中級で各拡張義を提示する際、第4章でまとめた「のだ」の多義構造を援用し、意味と意味の間がどのように結ばれているかを学習者に理解させる。「のだ」の拡張義を段階に分けて、「のだ」のプロトタイプと同じ「主題—解説」の構造をもつ拡張義1と拡張義2、拡張義3、独白でも用いられる拡張義4と拡張義5という順で提示することを薦める。

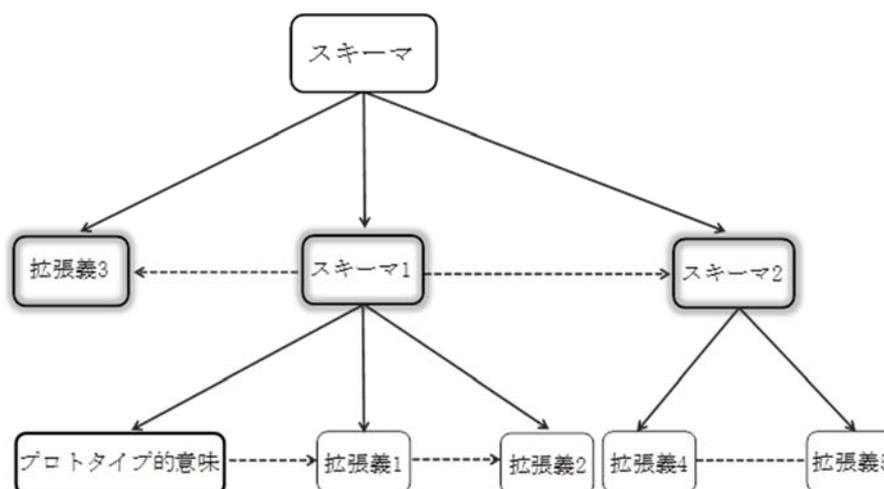


図6-2 「のだ」の多義構造

- ③ 語用論的意味の提示について。「のだ」の語用論的意味を提示する際、文脈、使用場面と語用論的な条件を提示し、「のだ」の意味は発話状況、発話意図などといった要因、条件と深く関わっていることを理解させる。例えば、「命令」を表す「のだ」を説明する時、以下の語用論的な条件を提示し、文脈、使用場面を分析しながら、詳しく説明する。

- ・「のだ」が前接する事象に「実行可能な行為」を含んでいるもの。
- ・話し手にとって望ましいと見なす当該行為がまだ実現されていない。
- ・「実行可能な行為」に関し、話し手が聞き手に当該行為を実行してほしいという願望が含まれているもの。
- ・聞き手が話し手の要求を何らかの形ですでに承知している場合、命令と解釈されやすい。

(52) 「純子、会社を辞めなさい」

「ええ？」

今度は純子が驚く番だ。「何よ、出しぬけに」

「すぐに辞めるんだ!」

- ④ 「のだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を学習者に提示する。両言語が非対応関係になっていることを理解させ、翻訳に反映できない「のだ」の意味、ニュアンスを上記述べた提示方法で学習者の習得を図る。

6.4.2 「ものだ」の教授法への提案

- ① プロトタイプ的意味の導入について。中級の段階で「ものだ」のプロトタイプ的意味を導入し、主題の特徴(グループを表すもの、状況)、文型(X<PはQ>ものだ)、意味特徴を提示し、文型練習などを通してプロトタイプ的意味の理解と定着を図る。
- ② 各拡張義の提示について。各拡張義を提示する際、第5章でまとめた「ものだ」の意味構造を援用し、各意味間の繋がりを学習者に理解させる。

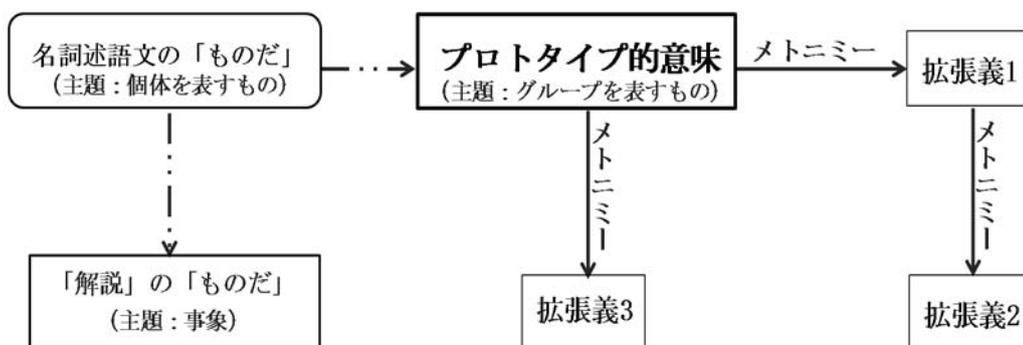


図 6-3 「ものだ」の意味構造

また、各拡張義を説明する際、構文的特徴を重視し、文型をそれぞれ提示し、練習させる。

拡張義1：PはQなものだ

拡張義2：PもQ(なった、変わった)ものだ

拡張義3：A. Pは/が(よく)Q(できる/できた、する/したなど)ものだ。

B. (世の中には)Pも/がQ(ある/あった、いる/いたなど)ものだ。

C. Q(ひどい、気の毒な、あきれたなど)ものだ。

解説：P。Qなものだ。

- ③ 語用論的意味の提示について。「ものだ」の語用論的意味を提示する際、文脈、使用場面と語用論的な条件を提示し、「ものだ」の意味は発話状況、発話意図などといった要因、条件と深く関わっていることを理解させる。例えば、「当為」を表す「ものだ」を説明する時、「当為」と解釈される語用論的な条件を提示しながら、「当為」と解釈されるプロセスを説明する。

(53) 「いいえ、私は沢山です」と省吾は幾度か辞退した。

「そんな、君のような——」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人が呈げるッて言うものは、貰うもんですよ」

「はい、難有う」と復た省吾は辞退した。

(島崎藤村『破戒』)

話し手が発話する「ものだ」の意味：一般的に人が呈げるッて言うものは貰う。

コンテクスト：人が呈げるッて言うものは貰うのが一般的に望ましい、話し手がそうしてほしい。

聞き手の「ものだ」の解釈：私はこのものを貰うべきだ。

「詠嘆」、「教示」を表す「ものだ」を説明する時、以下のような例をあげて、発話状況、発話意図などを説明しながら、「ものだ」の意味、ニュアンスを理解させる。

(54) (主人が亡くなって急に肥り出してしまった先輩の妹恭子さんについて)

少し離れたところに立っていた伊木に、井村が歎息するように話しかけた。

「おどろいたねえ、女というものはいつどう変わるか分らないもんだなあ」

「それにしても、恭子さんの場合は、特別だな」

- (55) 「信夫」 貞行は本をたたみの上においた。あらたまった声である。
「はい」 信夫もあらたまって返事をした。
「人間には、命をかけても守らなければならないことがあるものだよ。わかるか？」

- ④ 「ものだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を学習者に提示する。
両言語が非対応関係になっていることを理解させ、翻訳に反映できない「ものだ」の意味、ニュアンスを上述べた提示方法で学習者の習得を図る。

6.5 まとめ

本章では、「のだ」「ものだ」に対応している中国語について詳しく考察した。まずは、「のだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を分析した。まずは、「のだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を分析した。「のだ」に対応する中国語は無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「命令・願望語気」、「意志・願望語気」「必要語気」などを表す形式、または語気副詞、語気助詞とその他の形式(接続詞、副詞)であることがわかった。次に、「ものだ」に対応する中国語の傾向性、およびその表す語気を分析し、同じく無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「意外語気」、「詠嘆語気」、「必要語気」などを表す形式であることを判明した。さらに、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」の提示の仕方とその問題点を明らかにした。その上で、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時の注意するポイント、教授法への提案をまとめた。

第7章 結論

本論文は、認知意味論と語用論の視点から「のだ」「ものだ」の意味論的意味と語用論的意味を考察し、意味拡張のプロセスを明らかにし、さらに両者に対応する中国語の分析を通して、中国人日本語学習者にとって理解しやすい「のだ」「ものだ」の記述を行うことを目的とした。本章では、本論文の全体内容のまとめと、本論文の意義及び今後の課題について述べる。

7.1 本論文の要約

本論文では、まず認知意味論・語用論の視点から「のだ」「ものだ」の意味と用法を分析することで、それぞれの意味拡張のネットワーク、機能及び両者が共通している用法の相違点を明らかにした。次に、「のだ」「ものだ」に対応する中国語用例の傾向性、およびその表す語気を分析し、両言語が非対応関係になっていることを確認し、「のだ」「ものだ」を教える時の注意するポイント、教授法への提案を行った。

第1章から第7章までの考察は次のようにまとめられる。

第1章では、本研究の動機、目的について述べた。現代日本語において頻繁に用いられる「のだ」「ものだ」は、中国語にはそれと類似する語がないため、中国人日本語学習者にとってかねてより習得の難しい項目となっている。また日本語教育現場においては、外国人学習者に「のだ」「ものだ」をどのように説明したらより効果的な指導ができるか、難しい問題となっている。そこで本論文は、中国人日本語学習者にとって理解しやすい「のだ」「ものだ」の記述を行い、学習者の「のだ」「ものだ」への理解を深めることに役立つことを目指す。

第2章では、先行研究の概観を行い、本研究の位置づけについて詳述した。まず「のだ」に関する先行研究をまとめた。具体的には、「のだ」の品詞についての先行研究、文法の観点、語用論の立場、日本語教育の立場、認知言語学の立場からの先行研究に分け、それぞれの内容をまとめ、問題点を指摘した。次に「ものだ」に関する先行研究を整理した。具体的には、「もの」に関する先行研究、「ものだ」に関する先行研究、「もの」と「ものだ」のつながりに関する先行研究の三つに分け、文法、認知言語学、語用論の観点からの先行研究を整理し、問題点を指摘した。さらに、「のだ」「ものだ」と中国語の対照研究の概観を行った。最後に、それぞれの先行研究の問題点をまとめた上で、本研究の位置づけを述べた。

第3章では、本論文において使用する理論的枠組み、研究方法および研究データについて説明した。まず、本論文で用いる理論的枠組み、プロトタイプの意味、周辺の意味の認定方法、意味拡張のプロセスと定義、複数の意味を統括するモデルについて記述した。次に、本論文で使用した研究データの内容、収集方法、分類・分析方法について述べた。

第4章では、認知意味論と語用論の視点から「のだ」の意味・機能について分析した。まず、「のだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学的アプローチによって、「のだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、各意味間の拡張プロセスを考察した上で、「のだ」の多義構造を明らかにした。次に、「のだ」が「命令」「決意」と解釈される語用論的条件を解明し、さらに「強調」「告白」「教示」などの語用論的意味、機能についても考察した。その結果、「のだ」の「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」(拡張義3)という意味論的な意味が、語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的な意味が生じてくることが判明した。さらに、「のだ」が終助詞「よ」と共起する際の機能について分析し、「のだ」+「よ」は聞き手向けの機能をさらに強化する効果、話し手の認識、判断を聞き手に明確に提示する機能と命令の気持ちを和らげる機能をもっていることを明らかにした。

第5章では、認知意味論と語用論の視点から「ものだ」の意味を分析した。まず、「ものだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学の理論的枠組みに基づき、「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、「ものだ」の複数の意味の拡張ネットワークを示した。また、「解説」の「ものだ」はプロトタイプの意味とその拡張義から派生されたものではなく、「～たものだ」の形をとっている名詞述語文の「ものだ」から構文的に派生されたものであることが確認された。さらに、「ものだ」の「当為」「教示」「詠嘆」の語用論的意味について考察し、「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味が語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的意味が生じてくることが判明した。最後に、「のだ」と「ものだ」の類似する意味・用法について考察し、その共通点と相違点を明らかにした。

第6章では、「のだ」「ものだ」に対応している中国語について詳しく考察し、教授法の改善を提案した。まずは、「のだ」に対応する中国語の傾向、およびその表す語気を分析した。「のだ」に対応する中国語は無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「命令・願望語気」、「意志・願望語気」、「必要語気」などを表す形式、または語気副詞、語気助詞とその他の形式(接続詞、副詞)であることが分かった。次に、「ものだ」に対応する中国語の傾向、およびその表す語気を分析し、同じく無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「意外語気」、「詠嘆語気」、

「必要語気」などを表す形式であることが判明した。さらに、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」の提示の仕方とその問題点を明らかにした。その上で、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時に注意するポイント、教授法への提案をまとめた。

7.2 本論文の意義

本論文の意義は以下のようにまとめることができる。

第一は、認知言語学と語用論の視点から、「のだ」「ものだ」の多義構造、意味拡張のネットワークを明らかにすることによって、「のだ」と「ものだ」の研究に新しい方法論の可能性を提供することができたということである。

第2章の先行研究の概観でも述べたように、「のだ」と「ものだ」について、これまで日本語学、語用論の立場から多くの研究成果が蓄積されてきたが、認知言語学の立場からの研究は、管見の限りほとんど行われていない。本論文は、認知言語学的アプローチを用いて、「のだ」と「ものだ」の意味論的意味を確定し、また、各意味の間にどのように結ばれているのか、どのようなプロセスを経て拡張されているのかをネットワークで示すことによって、日本語学習者の意味習得に役に立てることが可能になると考えられる。さらに、認知言語学的アプローチと語用論を有機的に結合し、「のだ」と「ものだ」の意味の広がり全体像を学習者に示すことができるだろう。この意味で、「のだ」と「ものだ」の研究への学術的貢献が大きいと言える。

第二は、「のだ」と「ものだ」にそれぞれ対応している中国語の語気を表す形式を明らかにすることによって、中国人日本語学習者の「のだ」「ものだ」への理解を深めることができるという点である。中国語には、「のだ」「ものだ」に対応するモダリティ形式がなく、両言語が非対応関係になっているからこそ、その相違を明らかに示すことに意義がある。

第三は、「のだ」と「ものだ」の意味拡張ネットワークを利用し、日本語学習者に各意味の関連を理解させ、具体的なイメージをつかませ、中国日本語教育現場への応用、効果的な教授法の開発を期待することができる。

7.3 今後の課題

最後に、本論文の今後の課題について述べる。

第一は、考察対象の拡大である。本論文は基本的に肯定平叙文文末の「のだ」「ものだ」のみを考察対象とし、「のだ」「ものだ」の否定形(のではない、ものではない)、疑問形(のかなど)、過去形「(も)のだった」、また「(も)のだから」、「(も)のなら」など

については考察の対象としなかった。今後は本論文の研究結果を生かし、「のだ」「ものだ」の網羅的な記述を今後の研究課題とする。

第二は、考察方法をほかの助動詞へ応用することである。認知言語学的アプローチと語用論を有機的に結合する方法を用いて、「ことだ」「はずだ」「わけだ」などの助動詞の意味の広がり进行を明らかにすることを今後の目標としたい。

第三は、「ね」「な」「ぞ」などの助動詞と共起する際の機能について考察することである。本論文では、紙面の関係で「のだ」と共起頻度が一番高い「よ」のみに絞り、「のだ」+「よ」の機能を考察した。今後、「のだ」+「よ」に限らず、「のだ」「ものだ」がほかの終助詞と共起する際の機能について詳しく考察したいと考えている。

第四は、基礎研究の結果を中国日本語教育現場へ応用し、効果的な教授法を開発することである。

参考文献

【和文文献】

- 秋元実治(2002)『文法化とイディオム化』ひつじ書房
- 秋元実治(2004)『コーパスに基づく言語研究 文法化を中心に』ひつじ書房
- 揚妻祐樹(1990)「形式的用法の「もの」の構文と意味—〈解説〉の「ものだ」の場合—」
『国語学研究』Vol. 30, pp. 82-94
- 揚妻祐樹(1991)「実質名詞「もの」と形式的用法とのつながり」『東北大学文学部日本語学科論集』Vol. 1, pp. 2-12
- 庵功雄(2013)「「のだ」の教え方に関する一試案」『言語文化』50, pp. 3-15
- 庵功雄他(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井島正博(2010)「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』第6号, pp. 75-117
- 井島正博(2012)「モノダ・コトダ・ワケダ文の機能と構造」『日本語学論集』第8号, pp. 95-145
- 井上優(2003)「「のだ」文と“的”構文」『中国語学』Vol. 250, pp. 264-274
- 今村和宏(2007)「「のだ」の発話態度の本質を探る:「語りかけ度」と「語りかけタイプ」」『一橋大学留学生センター紀要』10, pp. 37-48
- 于康・張勤編(2000)『中国語言語学情報1・語気詞と語気』好文出版
- 内田聖二(1998)「「(の)だ」—関連性理論からの視点—」小西友七先生傘寿記念論文集
編集委員会編『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』大修館書店, pp. 243-251
- 大河内康憲(1975)「“是”のムード特性」『中国語の諸相』白帝社, pp. 21-39
- 王亜新(1997)「日本語の「のだ」と中国語の「是……(的)」について」『東洋大学紀要教養課程編』第36号, pp. 195-212
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析 1『今日はいいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」『日本語学』Vol. 5 No. 9, pp. 91-94
- 大曾美恵子(1991)「「でしょう」「よ」とイントネーション」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第1号, pp. 40-50
- 尾方理恵(2000)「「ものだ」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26, pp. 1-16
- 奥田智樹(2008)「「もの」の本義について」『言語文化研究叢書』7, pp. 15-28
- 奥田靖雄(1990)「説明(その1)—のだ, のである, のです」『ことばの科学4』むぎ書房, pp. 172-216

- 奥村徹(2004)「解説の「ものだ」と説明の「のだ」」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』31, pp. 77-83
- 小野秀樹(2001)「“的”の「モノ化」機能—「照応と“是……的”文をめぐる—」『現代中国語研究』第3期, pp. 146-158
- 笠井陽介(2014)「ノダの多義構造：ネットワーク・モデルによる分析」『日本語・日本文化研究』24, pp. 115-124
- 河上誓作編(1996)『認知言語学の基礎』研究社
- 賀陽(1992)「中国語の書き言葉における語気の体系」(訳・于康／成田静香), 于康・張勤編(2000)『中国語言語学情報1・語気詞と語気』, 好文出版, pp. 157-176(原載『中国人民大学学報』1992. 5)
- 菊地康人(2000)「「のだ(んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, pp. 25-51
- 北村雅則(2001)「モノダで終わる文—連体修飾部の時間的限定性からの考察—」『名古屋大学国語国文学』88, pp. 42-30
- 北村雅則(2002)「モノダ文の用法の再検討—発話機能という視点の必要性—」田島毓堂・釘貫亨編『名古屋大学日本語研究室 過去・現在・未来』, 名古屋大学大学院文学研究科, pp. 67-76
- 北村雅則(2004)「モノダ文の解釈を決める諸要因」『名古屋大学国語国文学』95, pp. 116-103
- 北村雅則(2005)「モノダ文を統一的に分析するために—意味論と語用論の二つの枠組みによる分析法の提示」『経営研究』19巻1号, pp. 71-90
- 北村雅則(2007)「モノダ文における名詞述語モノの役割—文末名詞文の構造との関連性—」青木博史編著『日本語の構造変化と文法化』, ひつじ書房, pp. 221-242
- 北村雅則(2008)「〈驚き・感慨〉を表すモノダ文の構造変化—近世以降を中心に—」『国文学』92, pp. 464-448
- 北村雅則(2010)「モノダ文の解釈に関する語用論的分析」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』47巻1号, pp. 47-60
- 木村英樹(1982)「テンス・アスペクト：中国語」『講座日本語学11：外国語との対照研究Ⅱ』明治書院, pp. 19-39
- 木村英樹(2002)「“的”の機能拡張—事物限定から動作限定へ—」『現代中国語研究』第4期, pp. 1-13
- 金田一春彦(1955)「日本語Ⅲ. 文法」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説 下巻』研究社
- 国広哲弥(1984)「「のだ」の意義素覚書」『東京大学言語学論集'84』, pp. 5-9
- 国広哲弥(1990)「意義素論の展開」『東京大学言語学論集'89』, pp. 1-16
- 国広哲弥(1992)「「のだ」から『のに』・『ので』へ—『の』の共通性」カッケンブッ

- シュ寛子他編『日本語と日本語教育』名古屋大学出版会, pp. 17-34
- 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 小金丸春美(1990b)「作文における「のだ」の誤用例分析」『日本語教育』71号, pp. 182-196
- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究報告 3 現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- 近藤安月子(2002)「会話に現れる「ノダ」—「談話連結語」の視点から」上田博人編『日本語学と日本語教育』東京大学出版会, pp. 225-248
- 佐治圭三(1969)「こと」と「の」—形式名詞と準体助詞—(その1)『日本語・日本文化』1 (佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房, pp. 181-195 に再録)
- 佐治圭三(1972)「ことだ」と「のだ」—形式名詞と準体助詞—(その2)『日本語・日本文化』3 (佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房, pp. 197-222 に再録)
- 佐治圭三(1981)「“～のだ”の本質」『日語学習と研究』8, (佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房, pp. 223-230 に再録)
- 佐治圭三(1986a)「「～のだ」再説—山口佳也氏・金栄一氏にこたえて—」『日語学習と研究』34 (佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房, pp. 231-238 に再録)
- 佐治圭三(1986b)「「～のだ」再説(続)—山口佳也氏・金栄一氏に答えて—」『日語学習と研究』35 (佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房, pp. 238-254 に再録)
- 佐治圭三(1989)「「～のだ」の本質を求めて—再び山口佳也氏に答えて—」『阪大日本語研究』1, pp. 105-127
- 佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 佐治圭三(1993)「「の」の本質—「こと」「もの」との対比から—」『日本語学』12-11, pp. 4-14
- 佐治圭三(1997)「「～のだ」の中心的性質」『京都外国語大学研究論叢』L, pp. 208-217
- 佐治圭三(1999)「「～のだ」補説」『無差』6, pp. 13-25
- 霜崎實(1981)「「ノデアル」考—テキストにおける結束性の考察—」*Sophia Linguistica* Vol 7, pp. 116-124
- 白川博之(1992)「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77号, pp. 36-48.
- 朱徳熙(1982)《语法讲义》商务印书馆
- 杉村博文(1980)「「の」「のだ」と「是」「是……的」」『大阪外国語大学学報』Vol. 49, pp. 75-89
- 杉村博文(1982)「「是……的」—中国語の「のだ」の文—」寺村秀夫他(編)『講座日本語学 12: 外国語との対照Ⅲ』, 明治書院, pp. 155-172
- 瀬戸賢一(2007)「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』ひ

- つじ書房, pp. 31-61.
- 高梨信乃(2006)「助動詞「ものだ」「ことだ」—評価のモダリティを表す用法—」『神戸大学留学生センター紀要』12, pp. 1-23
- 田中望(1980)「日常言語における“説明”について」『日本語と日本語教育』8, pp. 49-64
- 谷口一美(2003)『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』研究社
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉選書
- 田野村忠温(1993)「「のだ」の機能」『日本語学』12-11, pp. 34-42
- 張秀(1959)「中国語動詞の「語気」体系」『語法論集第三集』(于康・張勤編(2000)『中国語言語学情報1・語気詞と語気』好文出版, pp. 1-48に再録)
- 坪根由香里(1994)『「ものだ」に関する一考察』『日本語教育』84号, pp. 65-77
- 坪根由香里(1994)「「もの」「こと」「の」に関する考察——「のだ」を中心に」『南山日本語教育』創刊号, pp. 99-128
- 寺村秀夫(1981)「「もの」と「こと」」『馬淵和夫博士退官記念国語学論文集』大修館書店, pp. 743-763
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法集』くろしお出版
- 名嶋義直(2007)『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 野田春美(1995)「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為的な用法—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』, くろしお出版, pp. 253-262
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野田春美(2002)「第8章 終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版, pp. 261-288
- 橋本進吉(1948)『国語法研究』岩波書店
- 蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄(編)『複文の研究(下)』くろしお出版, pp. 389-419
- 原田登美・小谷博泰(1991)「日本語「もの」と「こと」」『甲南大学紀要文学編 84 国文学特集』, pp. 1-34
- 林大(1964)「ダとナノダ」時枝誠記・遠藤嘉基監修・森岡健二他編『講座現代語6 口語文法の問題点』, pp. 282-289
- 范碧琳(2013a)「文末の「ものだ」の意味に関する認知言語学的考察」『東アジア日本語・日本文化研究』第15集, pp. 27-41
- 范碧琳(2013b)「文末の「ものだ」の意味に関する認知言語学・語用論的考察」『東アジアと日本学』, 厦門大学出版社, pp. 271-280

- 范碧琳(2014)「文末の「のだ」の意味に関する認知言語学的考察」『東アジア日本語・日本文化研究』第17集, pp. 1-12
- 藤井ゆき(1996)「文末の「モノダ」の意味・用法」『広島大学留学生センター紀要(6)』広島大学留学生センター, pp. 49-64
- 堀口和吉(1985)「「のだ」の表現性」『山邊道』29, pp. 39-57
- マクグローイン・H・直美(1984)「談話・文章における『のです』の機能」『言語』13-1, pp. 254-260
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社
- 松本曜編(2003)『認知意味論』池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修『シリーズ認知言語学入門<第3巻>』大修館書店
- 松本曜(2009)「多義語における中心的意味とその典型性:概念的・中心性と機能的・中心性」*Sophia Linguistica* Vol. 57, pp. 89-99
- 三上章(1953)『現代語法序説 シンタクスの試み』刀江書院(復刊 くろしお出版 1972)
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- メイナード・K・泉子(1997)『談話分析の可能性:理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- 靱山洋介(1992)「文末の『モノダ』の多義構造」『言語文化論集第XIV巻第1号』, pp. 19-31
- 靱山洋介(2000)「名詞「もの」の多義構造—ネットワーク・モデルによる分析—」山田進・菊地康人・靱山洋介編『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』ひつじ書房, pp. 177-191
- 靱山洋介・深田智(2003)「第3章 意味の拡張」松本曜編『認知意味論』大修館書店, pp. 73-134.
- 守屋三千代(1989)「「モノダ」に関する考察」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』1号, pp. 1-25
- 森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店, pp. 3-78
- 劉月華等(2001)『实用現代漢語語法(増訂本)』商務印書館
- 李訥・安珊笛・張伯江(1998)「談話文法における語気詞「的de」をめぐって」(訳・于康/山田忠司), 于康・張勤編(2000)『中国語言語学情報1・語気詞と語気』, 好文出版, pp. 129-156(原載『中国語文』1982.2)
- 山口佳也(1975)「「のだ」の文について」『国文学研究』56, pp. 12-24
- 山口佳也(1987)「再び「～のだ」の文の本質をめぐって—佐治圭三氏の論に寄せて」『日語学習と研究』40, pp. 6-13

- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 吉川武時編 (2003) 『形式名詞がこれでわかる』 ひつじ書房
- 吉田茂晃 (1988a) 「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』 15, pp. 46-55
- 吉田茂晃 (1988b) 「ノダ形式の連文的側面」『国文学研究ノート』 21, pp. 41-51
- 吉田茂晃 (2000) 「<ノダ>の表現内容 と語性について-<ノダ>は『説明の助動詞』か」
『山邊道』 44, pp. 17-31

【英文文献】

- Alfonso, A (1966) 『Japanese Language Patterns vol.1』 上智大学
- Chinami, K (1989) An Analysis of the Meaning and Usages of the S+No Desu Construction. 『英語学の視点』九州大学出版会, pp. 319-350
- Lakoff, George (1987) Women, fire, and dangerous things : What categories reveal about the mind. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論一言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店)
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) Metaphors We Live By. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷 和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店)
- Langacker, Ronald W. (1987) Foundations of Cognitive Grammar vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- Leech, Geoffrey N. (1983) Principles of Pragmatics. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』 紀伊國屋書店)

例文出典

○ CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』新潮社版

・第 4 章で使用した作品の著者名と作品名：

赤川次郎『女社長に乾杯!』／安部公房『砂の女』／石川達三『青春の蹉跎』
／井上ひさし『ブンとフン』／井伏鱒二『黒い雨』／大江健三郎『死者の奢り・飼育』
／大岡昇平『野火』／川端康成『雪国』／椎名誠『新橋烏森口青春篇』
／高野悦子『二十歳の原点』／竹山道雄『ビルマの豎琴』／谷崎潤一郎『痴人の愛』
／太宰治『人間失格』／筒井康隆『エディプスの恋人』／三島由紀夫『金閣寺』
／武者小路実篤『友情』／宮沢賢治『銀河鉄道の夜』／宮本輝『錦繡』

・第 5 章で使用した作品の著者名と作品名：

赤川次郎『女社長に乾杯!』／安部公房『砂の女』
／有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』／有吉佐和子『華岡青洲の妻』
／石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』／石川達三『青春の蹉跎』
／井上ひさし『ブンとフン』／井上靖『あすなる物語』／五木寛之『風に吹かれて』
／井伏鱒二『黒い雨』／遠藤周作『沈黙』／大江健三郎『死者の奢り・飼育』
／大岡昇平『野火』／開高健『パニック・裸の王様』／梶井基次郎『檸檬』
／川端康成『雪国』／北杜夫『楡家の人びと』／倉橋由美子『聖少女』
／小林秀雄『モオツァルト／無常という事』／沢木耕太郎『一瞬の夏』
／椎名誠『新橋烏森口青春篇』／塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』
／志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』／島崎藤村『破戒』／曾野綾子『太郎物語』
／高野悦子『二十歳の原点』／竹山道雄『ビルマの豎琴』／立原正秋『冬の旅』
／田辺聖子『新源氏物語』／谷崎潤一郎『痴人の愛』／太宰治『人間失格』
／筒井康隆『エディプスの恋人』／壺井栄『二十四の瞳』／新田次郎『孤高の人』
／野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』／林芙美子『放浪記』
／福永武彦『草の花』／藤原正彦『若き数学者のアメリカ』
／星新一『人民は弱し官吏は強し』／堀辰雄『風立ちぬ／美しい村』
／松本清張『点と線』／三浦綾子『塩狩峠』／三浦哲郎『忍ぶ川』
／三木清『人生論ノート』／三島由紀夫『金閣寺』／水上勉『雁の寺・越前竹人形』
／武者小路実篤『友情』／宮沢賢治『銀河鉄道の夜』／宮本輝『錦繡』
／村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』／山本周五郎『さぶ』

／山本有三『路傍の石』／吉村昭『戦艦武蔵』／吉行淳之介『砂の上の植物群』
／渡辺淳一『花埋み』

○ 『中日対訳コーパス(第一版)』(中国北京日本語学研究センター、2003)

・第6章で使用した作品の著者名と作品名：

安部公房『砂の女』／石川達三『青春の蹉跌』／井伏鱒二『黒い雨』
／大江健三郎『死者の奢り』／大江健三郎『飼育』／大岡昇平『野火』
／島崎藤村『破戒』／谷崎潤一郎『痴人の愛』／太宰治『斜陽』
／三島由紀夫『金閣寺』／村上春樹『ノルウェイの森』

付録1「のだ」「ものだ」の用例集

「のだ」の用例

1. 九州の福岡市もにぎわっていた。大相撲の一行が巡業にやってきていたのである。
(井上ひさし『ブンとフン』)
2. 電話に出た男はぞんざいな口調で、大体の道筋を知らせてくれた。そのぞんざいな口調が耳に残り、なんだかふいに嫌な気分になった。新聞の広告で見た「編集員」というなにか妙に胸のときめくような知的なイメージとはほど遠く、しめっぽくて暗い倉庫の中で受け応えしているような気配が、その男の声音から感じられたのだ。
(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)
3. 書記の主張に部落長が反駁して、村には黒大兵を捕虜として収容する力がないということを作りかえした。しかもあの遠い山道を危険な黒大兵を護送することも村の人間たちの力では難しいだろう。長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にしたのだ。
(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)
4. 「すまないけどね、電車通りの薬屋に行って、カルモチンを買って来てくれない？あんまり疲れすぎて、顔がほてって、かえって眠れないんだ。すまないね。お金は、……」
「いいわよ、お金なんか」
(太宰治『人間失格』)
5. 八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。
(安部公房『砂の女』)
6. 確かに、私は変わりました。それまでとは違った生き方を試みて、泥のような男に成り下がり、生活疲れを引きずった、艶のないやつれた人間になったのです。
(宮本輝『錦繡』)
7. 私は半月前中隊を離れた時、林の中を一人で歩きながら感じた、奇妙な感覚を思い出した。その時私は自分が歩いている場所を再び通らないであろう、ということに

注意したのである。

(大岡昇平『野火』)

8. むろん、そんな金だけにいつまでも頼っているわけにはいきませんから、わたしは、ちょうどすすめる人があったので近くの町にある信用金庫に勤めに出ようかと考えました。ところがこれには珠子が反対しました。勤めなどせず、もっと絵の勉強をすべきだということです。

(筒井康隆『エディプスの恋人』)

9. 場末の小さな美容院の、豚みたいに太った女主人が、私の説明を聞いているうちに突然怒り出したときは驚きました。彼女は遠廻しに、あることを要求していたのでした。自分を「先生」と呼ぶべきだということです。

(宮本輝『錦繡』)

10. 自分には、禍のかたまりが十個あって、その中の一個でも、隣人が脊負ったら、その一個だけでも十分に隣人の生命取りになるのではあるまいかと、思った事さえありました。つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかないのです。

(太宰治『人間失格』)

11. 「康子さんのおはなしさ。伯母さんもようやく決心がついたんだろうね。司法試験もすんだことだし、この辺で一つ正式に話をきめたいと思うけど、どうだろうって言う御相談よ」

「ふむ。そう来るだろうと思っていたよ。要するにあの試験の結果を待っていたんだ。僕が落第したら、それっきり。合格したら縁談を進めよう。……まあ、それが当り前かも知れんな。世間なんてみな計算高いからね」

(石川達三『青春の蹉跎』)

12. 私は何もかもつまらなくなっていて呆然としていると、宿の娘は私を心配してくれている。何も考えてやしない。何も考えようがないのだ。

(林芙美子『放浪記』)

13. しかし恋の相手にぶつかる位は、学問をした片手間で沢山だ。又毎日の仕事をした余暇で沢山だ。むしろ逢わないでよそうと思っても、つい逢う程、彼女は世界にごろごろしているのだ」

(武者小路実篤『友情』)

14. みるみる乳房は全体との聯関を取戻し、……肉を乗り越え、……不感のしかし不朽の物質になり、永遠につながるものになった。

私の言おうとしていることを察してもらいたい。又そこに金閣が出現した。というよりは、乳房が金閣に変貌したのである。

(三島由紀夫『金閣寺』)

15. また、自分は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」という感覚はどんなものか、さっぱりわからなかったのです。へんな言いかたですが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです。

(太宰治『人間失格』)

16. 「(前略)二人で生きるものは仕合せだと云う言葉は本当だ」

「それは誰が云ったのだ」

「あの人が云ったのだ」

(武者小路実篤『友情』)

17. 島村も頬が火照るようで、さっさと通り過ぎると、直ぐに駒子が追っかけて来た。
(中略)

「顔を赤くしたり、ばたばた追っかけて来たりすれば、なお困るじゃないか。」

「かまやしない。」と、はっきり言いながら駒子はまた赤くなると、その場に立ち止まってしまって、道端の柿の木につかまった。

「うちへ寄っていただこうと思って、走って来たんですわ。」

(川端康成『雪国』)

18. (北岡夫人から電話が渡されて)

「柳か、どうした？」と北岡が出て来る。

「あ、ニュースをご覧になりましたか？」

「ニュース？ 見とらんよ。何しろうちのやつ、俺が専務に戻るまでTVを見せてくれんだ。自分は一日中見とるのに、だぞ。今だってCMだったから、電話に出たんだ。俺は一家の主だというのに——」

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

19. 後で見ると、竹筒が舷から食みだしていた部分は、半面だけ黒く焦げていた。閃光かまたは爆発で起った熱気のために焦げたのだ。

(井伏鱒二『黒い雨』)

20. 「荷物は持って行ってもいいが、お前、何処から這入って来たんだ」
「表の戸から」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

21. 「見れば見るほど、へんな顔をしているねえ、お前は。ノンキ和尚の顔は、実は、お前の寝顔からヒントを得たのだ」

(太宰治『人間失格』)

22. 「そりゃ、天井に砂が積っちゃ、具合わるいだろうな……だからと言って、砂で梁が腐るってのはおかしいじゃないか。」

「いいえ、くさります。」

「しかし、砂ってやつは、もともと、乾燥しているものなんだよ。」

(安部公房『砂の女』)

23. 「もう少しですよ」

刑事がのんびりと答える。

「一時間前からそう言ってるじゃないか！」

「本当にすぐなんですよ」

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

24. 「純子、会社を辞めなさい」

「ええ？」

今度は純子が驚く番だ。「何よ、出しぬけに」

「すぐに辞めるんだ！」

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

25. 男は私を抱き伏せると、お前も俺と同じような病気にしてやるのだ。そう云って、肺の息をフウフウ私の顔に吐きかけてくる。

(林芙美子『放浪記』)

26. 「ところで浜田君、僕は聞きたいことがあるんだ」

と、私は頃合を見計らって、一段と膝を進めながら、

「ヒドイ仇名がナオミに附いていると云うのは、一体どんな仇名ですか？」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

27. 家の前までやって来ると、私の忌まわしい想像はすっかり外れて、アトリエの中は真っ暗になっており、一人の客もないらしく、しーんと静かで、ただ屋根裏の四畳半に明りが灯っているだけでした。

「ああ、一人で留守番をしているんだな、——」私はほっと胸を撫でました。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

28. そう云えば勝手口の方の障子も、今しがた誰かがそこから出て行ったらしく、矢張り明け放しになっていました。と、私の注意は、勝手口から地面へさしている仄かな明りを伝わって、つい二三間先のところに裏門のあるのを発見しました。門は扉がついていない古い二本の木の柱で、柱と柱の間から、由比ヶ浜に碎ける波が闇にカッキリと白い線になって見え、強い海の香が襲って来ました。

「きっと此処から出て行ったんだな」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

29. ブスツとして腕組みしたまま座っているのだが、その額やら頬っぺたに、白いバンソウコウが痛々しく鮮やかだった。

きっと奥さんに引っかけられたんだわ、と伸子は昨日の尾島夫人の剣幕を思い出して、同情しながらも、ついおかしくなった。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

30. 「前任者は駄目だよ。あの人は遠くへ転任したし、ここでの任期は四年足らずだった。でもその前の人は警官をやめてから農協の守衛になっている。農協の隣りの家に奥さんと住んでいるよ。任期も長かったそうだし、あの人なら何か知っている」彼はくすくす笑った。どぎまぎしていたためにそんなことを思い出せなかった自分がおかしく、七瀬の役に立てそんなことが嬉しかったのだ。

(筒井康隆『エディプスの恋人』)

31. 「晩飯を食ってから又出かけたのは、何時頃でしたらうか？」

「さあ、あれは、八時十分でございましたでしょうか、……………」

「じゃ、もう二時間にもなるんだ」と、私は覚えず口へ出して云いました。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

32. 東京の賃貸シェアパートでは、日光のよく当る部屋は高く、北向きの部屋は安い。日光はもはや経済的価値に換算されているのだ。

(石川達三『青春の蹉跎』)

33. もちろん砂は、液体ではない。だから浮力に期待するというわけにはいかない。たとえ、砂より比重の軽い、コルク栓のようなものでも、ほうっておけば、自然に沈んでしまう。砂に浮べる船は、もっとちがった性質をもっていなければならないのだ。

(安部公房『砂の女』)

34. 自分で思っているより、ずっと疲れていたに違いない。伸子はソファで、いつしか眠りに落ちていた。

そして……どれくらいたったのか、伸子は目を覚ました。

「ああ……眠っちゃったんだわ」

伸子はそう呟いて、思い切り伸びをした。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

35. 期待し過ぎてはいけない。尾島にしてみれば、解雇したつもりでいるのかもしれない。それに——そうだ、あのマンションを抵当に入れて、叔父が五百万という金を借りているのだ。それを逆に請求されないと限らない。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

36. たいした日常の誇りだよ、と僕はいった。

便器にまたがったまま、紅潮した顔をむりに振りかえって学生がいった。

そうなんだ。

(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)

37. 彼の太い手が下りて来て、襟首をつかまえて、私を立たせた。しかし命ずる声音はやはり温かく、やさしかった。

「踏め。踏むんだ」抵抗しがたく、私はゴム長靴の足をあげた。

(三島由紀夫『金閣寺』)

38. 私は意を決してまだ動き回っている鈴木に「帰ります。さようならをいい、鈴木は「気をつけて帰るんだよ」という。

(高野悦子『二十歳の原点』)

39. 女は両手で顔を覆うて、部屋を駈けて出た。

柏木はというと、立ちすくんだままの私の顔を見上げて、異様に子供っぽい微笑をうかべて、こう言った。

「さあ、追っかけて行くんだ。慰めてやるんだ。さあ、早く」

(三島由紀夫『金閣寺』)

40. 純子は、五千円札を渡して、真由美と別れた。——胸が高鳴っている。

谷口へこれを見せてやるんだ！

早く見たい気持ちをわざと押し殺して、喫茶店へと戻る。

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

41. それから自分は、これもまた実に思いがけない滑稽とも阿呆らしいとも、形容に苦しむほどの失言をしました。

「僕は、女のいないところに行くんだ」

(太宰治『人間失格』)

42. 「ヨシちゃん、ごめんね。飲んじゃった」

「あら、いやだ。酔った振りなんかして」

ハッとしました。酔いもさめた気持でした。

「いや、本当なんだ。本当に飲んだのだよ。(後略)」

(太宰治『人間失格』)

43. そういうお達しを聞いてきたのは藤本で、彼はすこし慥然とした顔でぼくを喫茶店に誘い、「じつはここだけの話だけど、自分もあと半年ぐらいで会社やめるつもりなんだよ」と、ひくい声で言った。

(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

44. 離婚の理由が、この縁談を反古にするものとは思えない。俺は主人の反応に少し腹を立ててそう言った。本当はどこの馬の骨かわからぬ安月給取りの大学の講師に、娘をやる気など俺にはないのだとまで言ってやった。

(宮本輝『錦繡』)

45. お茶を淹れて来ると、伸子は自分でも、ゆっくりとそれをすすって、「大邸宅が建

てられなかったわ」

「二人で住むなら六畳一間だって充分さ」

「二人？——いつかは三人か四人になるのよ」

「そのときはそのときさ」

と昌也は笑って、「ね、僕、大学やめて働こうかと思うんだ」

伸子の顔がこわばった。

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

46. 「おれはまだ二十七だ。当然、まだ独身でいい筈なんだよ。それが君、子供が二人も居て、生活に追われて、なさけないね。子供なんて、早く持つもんじゃない。三十過ぎてからで沢山だ。女房も三十過ぎてからでいいんだ。」

(石川達三『青春の蹉跎』)

47. 「ぼくは、砂のことについちゃ、これでも、ちょっとばかり、くわしいんでね……いいですか、砂ってやつは、こんなふうに、年中動きまわっているんだ……その、流動するってところが、砂の生命なんだな……」

(安部公房『砂の女』)

48. いかにも浜の食事らしく、それはいいのだが、食べはじめた彼の上に、女が番傘をひらいて、さしかけて来たのである。

「なんなの、それは……？」なにか、この地方の、特別な風習なのだろうか？

「ええ……こうしないと、砂が入るんですよ、ご飯の中に……」

(安部公房『砂の女』)

49. 思うに大学は大学で自分の正義をもっているし、学生にも学生側の正義はある。つまり正義と正義とが喧嘩をしているんだよ。

(石川達三『青春の蹉跎』)

50. 玄関の靴とそっくりの、つまりちょっと薄汚れて、くたびれた感じの男が二人、座っていた。(中略)

「犯人は分かりましたの？」

「それを調べるために今日うかがったんですよ」

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

51. ところが、裸の女を抱いているというのに、どうも態勢が整わん。焦れば焦る程

どうにもならん。そのときの情なさがお前に判るか。おい、俺は本当に哀しかったぞ。「それはきっと緊張してたんですよ。とにかく恋をしてたんですから。よくあることです。こんどはうまく行きますよ」と私は可笑しさをこらえて、慰めたり励ましたりしました。

(宮本輝『錦繡』)

52. 「でも、表に行ってみたって、べつにすることもないし……」

「歩けばいい！」

「歩くって……？」

「そうさ、歩くんだよ……ただ、歩きまわるだけで、充分じゃないか……」

(安部公房『砂の女』)

53. 「(前略)中隊にゃお前みてえな肺病やみを、飼っとく余裕はねえ。見ろ、兵隊はあらかた、食糧収集に出動している。味方は苦戦だ。役に立たねえ兵隊を、飼っとく余裕はねえ。病院へ帰れ。入れてくんなかったら、幾日でも坐り込むんだよ。まさかほっときもしねえだろう。どうしても入れてくんなかったら——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんじゃないぞ。それが今じゃお前のたった一つの御奉公だ」

(大岡昇平『野火』)

「ものだ」の用例

1. この壁の油絵は、ここにいた生徒が描いたものです。

(立原正秋『冬の旅』)

2. いつか大牟呂さんが、この石柱は何代か前の先祖が建てたものだと云っていた。

(井伏鱒二『黒い雨』)

3. 人の話では、お妾は普通、用が無くなると、捨てられるものですって。

(太宰治『斜陽』)

4. 「僕の位置にいれば君はそんなあつかましいことは出来なくなる」

「恋はあつかましくなければ出来ないものだよ」

「本当の恋はあつかましいものには出来ない」

(武者小路実篤『友情』)

5. それにしても大火傷をした身で逃げきって、よくも命びろいをしたものだ。
(井伏鱒二『黒い雨』)
6. 「家は浅草の銘酒屋なんですよ、——彼奴に可哀そうだと思って、今まで誰にも云ったことはありませんがね」
「ああ、そうですか、やっぱり育ちと云うものは争われないもんですなあ」
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
7. その他、合算していけば、かなりの額になるはずである。信じられないといっても、事実なのだ。男は、女以上に、ものの破片や断片に耽溺する傾向があるものだ。
(安部公房『砂の女』)
8. 普通歳月というものはいったん過ぎ去ってしまえば、あっけないほど短く単純に感じられる
(北杜夫『楡家の人びと』)
9. 「聞くつもりはなかったんだが、聞かないわけにはいかなかった。ずっとそばにっいていたものでね。熱にうなされると人はうわごとを言うものだ。べつに恥かしがることはない。(後略)」
(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)
10. 「先生、ぼくはなんだか不安なんです」
応接間に来て、加藤は立ったままでいった。
「話すがいい、立っていた方が話しよければ、そのままというんだな、たいていのことは話してしまえばさっぱりするものだ」
外山は静かな眼を加藤に誘うように投げかけていった。
(新田次郎『孤高の人』)
11. 人は屢々、看護していた病人が最後の息を引き取る時とか、又は大地震に出っ会した時とかに、覚えず知らず時計を見る癖があるものですが、私はその時ふいと時計を出して見たのも大方それに似たような気持だったでしょう。
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
12. 廓を流して行く焼栗屋のにぶい声を聞いていると、妙に淋しくなってしまうと、

暗い部屋の中に私は一人でじっと窓を見ている。私は小さい時から、冬になりかけるとよく歯が痛んだものだ。まだ母親に甘えている時は、畳にごろごろして泣き叫び、ビタビタと梅干を顔一杯塗って貰っては、しゃっくりをして泣いている私だった。

(林芙美子『放浪記』)

13. 商売柄か親父は国民服をきらって背広にソフト、丸坊主にせず、痩せてはいたが身の丈六尺に近く、辰郎は一緒に歩く時、いつも誇らしく感じたものだ。

(野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』)

14. 日本にいた頃も、田舎にいる小学生の従弟の友達などは何十人いてもその名を全部覚えていたものだ。

(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

15. あの頃、町には城ヶ島の唄や、沈鐘の唄が流行っていたものだ。

(林芙美子『放浪記』)

16. おれんは娘の時代から、お針がうまかった。そのころの習いで、商家の娘はみんな、したて屋にお針のけいこに行ったものである。

(山本有三『路傍の石』)

17. 二十ばかりの書名がスクリーンにあらわれた。彼女はライトペンを使ってそのうちの三分の二ばかりを消した。そしてそれをメモリーしてから、こんどは『こっかく』という単語をうった。七つか八つの書名が出てきて、彼女はそのうちの二つだけを残し、前のメモリーぶんの下にそれを並べた。図書館も昔に比べれば変わったものだ。貸出しカードが袋に入って本のうしろについていた時代が夢のようだ。

(村上春樹『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド』)

18. 「おまえも、お茶ぐらい、いっしょに飲んだらどうだ？」と言うと、「いいえ、欲しくないのよ」と答えて、顔も上げなかった。重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。女房も年齢をとったものだ。これくらいになると、亭主が飯を食っていても、茶のつき合いをする気もおこらぬらしい。

(松本清張『点と線』)

19. 「鉄橋にぶらさがって、先生に叱られた時のことなんか思うと夢のようです。」

「しかし、貴様も大きくなったものだなあ。」

(山本有三『路傍の石』)

20. しかしそれにしても、ちょっとした植木鉢くらいの大きさのハニワが、よくも千五百年以上もの間、生き残っていたものだと思う。

(曾野綾子『太郎物語』)

21. この登録上のマネージャーは、内藤が練習をさせてもらっている金子ジムに、ただの一度も足を運ぶことがなかった。金子に一言の挨拶もなく、内藤の練習を一回も見にこなかった。それでよくマネージャー面ができるものだ。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

22. それは入念に探された。しかし、どのポケットにも遺書らしいものはかくされていなかった。一万円たらずの現金、ハンカチ、靴ベラ、折りたたまれた昨日の新聞、皺になった列車食堂の受取証。

「列車食堂の受取証？妙なものを持っているもんだね」

(松本清張『点と線』)

23. 強い力は加藤を新聞記者の囲みからひっぱり出すと、駅の前に待たせてある自動車におしこんだ。自動車に乗ってから、加藤は相手が藤沢久造であることを知った。

「えらいことをやったものだ」

藤沢久造は加藤にひとこといっただけだった。

(新田次郎『孤高の人』)

24. その頃中学生で鎌倉にいた私は、級友だった吉野氏の子息の吉野壮児からこのことを伝え聞いて凄い人があるものだと感心した。

(小林秀雄『モーツァルト・無常という事』)

25. 「ひでえ親があるもんだな」あるきながら彼は呟いた、「話には聞いたこともあるが、本当にそんな親があるのかな」

(山本周五郎『さぶ』)

26. 「そしたら、そのホステス、何て言った？」

「《そうよ、お客だから、こうしてガマンしてあげてんじゃないの》と言ったんだ」

「ひどいもんだね」

(曾野綾子『太郎物語』)

27. テレビの解説者は、はじめアリを批判し、もう齢だ、衰えがきているなどと言っておきながら、次第に優勢になっていくにつれて、さすがにアリなどと讃め出す。いい加減なものだ。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

28. 「あの小娘の上に荷物を落っことしたり、ネズ公入りのチョコレートをプレゼントしたり……。みんなこの柳のやったことだ」
「呆れたものだな」大畑が柳をにらみつけた。

(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

29. イスラエル側には、ガザからの一方的な撤退案をパレスチナ側と協力して進めるよう改め、撤退の対象に西岸を含めるよう求めた。ガザ撤退を理由に西岸入植地を維持し続けるのではないかとの懸念に応えたものだ。

(朝日新聞2005. 2)

30. 記者会見で木村氏は、小穴氏の社長退任を「健康上の理由」と説明。落合氏が経営陣刷新を求めて臨時株主総会開催を請求している問題をめぐり、「小穴氏に過度な負担をかけるわけにはいかなかった」とも述べた。落合氏との対立がいまだに経営に影を落としていることを示唆したものだ。

(朝日新聞2005. 2)

31. 工場長は野辺送りした僕の報告を聞くと、在木カネの介抱していた充田タカという被爆者が死んだので、僕に葬式のお経を読めと云った。
充田タカという女は、従来この工場の炊事場へ広島市内から浅蜷や雑魚を売りに来ていた闇屋である。それが一昨日の空襲で被爆して顔と両手に傷を受け、今朝がた在木カネを頼ってここの炊事場へ辿りついたものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

32. 聞けば、シゲ子たちが広島から帰って来ると、二人の客が縁側にしょんぼり腰をかけていたと云う。僕らの安否を気づかって、山奥の村からわざわざやって来たものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

33. そんな突拍子もないハチマキを、自分で作るバカはいないから、それは、女の子から贈ってもらったものだ、ということは一目瞭然であった。

(曾野綾子『太郎物語』)

34. だから二人の女は、知らない彼女の一部分を偶然に発見した思いで、衝動をうけたのだろう。

「どんな男か、あのホームまで行って窓からのぞいてやるわ」

八重子はずんだ声で言った。

「よせ、よせ。他人のことは放っとくものだ」

安田が言った。

(松本清張『点と線』)

35. それを、吹き乱れた苧萱につけた。

「あら、風流なお手紙は、たいてい、紙の色と同じ花の枝に、おつけになるものですわ」女房たちがいうと、

「そうですか。どうも私は、そういうことにうとくて。どんな花がいいのか、よくわからないのです」

(田辺聖子『新源氏物語』)

36. 「そりゃ不可」と大日向は笑いながら言葉を添えた。「こういう時には召上るものです。真似でもなんでも好う御座んすから、一つ御受けなすって下さい」

(島崎藤村『破戒』)

37. 「いいえ、私は沢山です」と省吾は幾度か辞退した。

「そんな、君のような——」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人が呈げるって言うものは、貰うもんですよ」

「はい、難有う」と復た省吾は辞退した。

(島崎藤村『破戒』)

38. 「局長様に会いたいのならそのように、きちんと御約束してから来るものだ。ただちょっと用事というだけでは御忙しい局長様が女子に会つとる暇はなかるう。ここをどこだと考えとる」

(渡辺淳一『花埋み』)

39. 「信夫」貞行は本をたたみの上においた。あらたまった声である。
「はい」信夫もあらたまって返事をした。
「人間には、命をかけても守らなければならないことがあるものだよ。わかるか？」
(三浦綾子『塩狩峠』)
40. 「俺はニューギニアからずっとあの班長と一緒にだが、こき使われるばかりで何もし
て貰った覚えはねえ。班長ってのは、兵舎じゃ可愛がってくれるが、前線じゃ、な
まじ戦争を知ってるだけに、冷たいもんだよ。」
(大岡昇平『野火』)
41. (主人が亡くなって急に肥り出してしまった先輩の妹恭子さんについて)
少し離れたところに立っていた伊木に、井村が歎息するように話しかけた。
「おどろいたねえ、女というものはいつどう変わるか分からないもんだなあ」
「それにしても、恭子さんの場合は、特別だな」
(吉行淳之介『砂の上の植物群』)
42. 「さあ、これからどんどん墮落して行くばかりでしょうね。(中略)」
「家は浅草の銘酒屋なんですよ、——彼奴に可哀そうだと思って、今まで誰にも云
ったことはありませんがね」
「ああ、そうですか、やっぱり育ちと云うものは争われないもんですなあ」
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
43. 夜食が終るのは八時だ。それから、経文の筆記であった。就寝十時。慈念の生活を
みていると、禅寺の修行というものはつらいものだな、と里子は思わざるを得ない。
(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)
44. 「これ、お作や」と細君の児を叱る声があった。「どうしてそんな悪戯するんだい。
女の児は女の児らしくするもんだぞ。(後略)」
(島崎藤村『破戒』)

付録2「のだ」「ものだ」に対応する中国語の用例集

「のだ」に対応する中国語の用例

1. a. ナオミ、ナオミ！己はどうして今夜彼女を置き去りにして来たのだろう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
- b. 纳奥米、纳奥米！今晚为什么丢下她来了。纳奥米不在身边是不行的，这是最糟糕的事。
(谷崎润一郎《痴人之爱》)
2. a. 後で見ると、竹筒が舷から食みだしていた部分は、半面だけ黒く焦げていた。閃光かまたは爆発で起った熱気のために焦げたのだ。
(井伏鱒二『黒い雨』)
- b. 后来一看，竹筒露出船槓的那部分，只有一面被灼焦了。这是被闪光或爆炸时散发的热气灼焦的。
(井伏鱒二《黑雨》)
3. a. 「おや、まアちゃん、いつ来たの？」
「今日来たんだよ——てっきりお前にちげえねえと思ったら、やっぱりそうだった」
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)
- b. “今天来的呀。—我想准是你，果然没错儿。”
(谷崎润一郎《痴人之爱》)
4. a. 「薄情者！俺を置いてゆくのか。君のためにこんなざまになったんだぞ！」
(三島由紀夫『金閣寺』)
- b. “你简直一点人情都不懂！想扔下我就走吗？我可是为了你才摔成这个样子的！”
(三島由紀夫《金閣寺》)
5. a. 「これもやっぱり親の罰だ。親を欺して面白い目を見ようとしたって、ロクな事はありゃしないんだ」と、私はそんな風に考えました。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

- b. “这也是父母的惩罚。欺骗父母还想得到好结果，根本不会有好事的！”我这样思付着。

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

6. a. 「おれには分っている……本当だとも……いまにきっと、そんな目にあわされるんだ…」

(安部公房『砂の女』)

- b. “咱知道得可清楚呢……真的呢……眼下肯定会让我们难堪的……”

(安部公房《砂女》)

7. a. 「ねえ、ワタナベ君、どうしたの？あなたなんだか漠然とした顔してるわよ。目の焦点もあっていないし」「旅行から帰ってきて少し疲れてるんだよ。べつになんともない」

(村上春樹「ノルウェイの森」)

- b. “咦，渡边君，怎么搞的？表情好像有点发呆，眼珠也聚不起光来。”“刚旅行回来，有点累。其实没什么。”

(村上春樹《挪威的森林》)

8. a. 八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。

(安部公房『砂の女』)

- b. 八月里的一天，一个男人失踪了。他利用休假去海边，听说那地方坐半天火车即可到达，谁知他一去便查无音信。

(安部公房《砂女》)

9. a. それにしても、このしめっぽさは、やりきれない。いや、むしろ砂がしめっぽいのではなくて、自分の体がしめっぽいのだ。

(安部公房『砂の女』)

- b. 即使这样，这番湿漉漉的感觉也着实让人吃不消。当然，不是沙子湿漉漉，而是自

己的身体混漉漉。

(安部公房《砂女》)

10. a. その二つが矛盾しているのは、(おれが矛盾しているのではない、現実そのものが矛盾しているのだ) ……

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. 这两方面自相矛盾着(不是自我矛盾, 而是现实本身就有的矛盾) ……

(谷崎潤一郎《痴人之爱》)

11. a. 「早く言ってくれよ。僕はいそいでるんだ」

(石川達三『青春の蹉跎』)

b. “你快说啊, 我还有急事呢!”

(石川达三《青春的蹉跎》)

12. a. 「一厘も残りなく償わずば、という言葉もあるし、或者には五タラント、或者にはニタラント、或者には一タラントなんて、ひどくややこしい譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ。」

(太宰治『斜陽』)

b. “还有‘倘若不一厘钱都偿清的话’这类词句, 又有很复杂的比喻, 说什么‘一个给了五千, 一个给了二千, 一个给了一千’, 看来耶稣也挺会算帐啊,”

(太宰治《斜阳》)

13. a. 「しかし、浜田君、僕にはまだよく分っていないんだ。君はナオミから鍵を貰って、此処へ何しに来ていたと云うんです？」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “可是, 浜田, 我还没搞清这件事呢。你从纳奥米那里拿到钥匙, 到这儿来干什么?”

(谷崎潤一郎《痴人之爱》)

14. a. 「声を出すな……乱暴はしない……静かにしているんだ……」

(安部公房『砂の女』)

- b. “别出声……我不会胡来……你安静一点……”
(安部公房《砂女》)
15. a. 「(前略)さあ行け。一番下まで、ゆっくり行くんだ……」
(石川達三『青春の蹉跌』)
- b. “往下，慢慢地滑……”
(石川达三《青春的蹉跌》)
16. a. 柏木はというと、立ちすくんだままの私の顔を見上げて、異様に子供っぽい微笑をうかべて、こう言った。「さあ、追っかけて行くんだ。慰めてやるんだ。さあ、早く」
(三島由紀夫『金閣寺』)
- b. 柏木立刻抬头看了看呆立着的我，那脸又变得象个孩子似地笑起来。他对我说到：“哟！快去追吧！要安慰她一下！还不快去！”
(三島由紀夫《金閣寺》)
17. a. 「そりあ、そうだが——お前は要領がいいから羨しい。俺なんか……」
「なんとか工面して来るんだよ」
(大岡昇平『野火』)
- b. “是啊，但我佩服你手腕高，像我这样的……”
“想点办法呗。”
(大岡升平《野火》)
18. a. 「おい、僕の潜る通りに潜って来い。絶対に線に触れるな。僕が線を取除けるからな。もし僕が倒れたら、服以外には手をかけるな。よいか、ズボンの端を掴んで引きずるんだ」
(井伏鱒二『黒い雨』)
- b. “喂！按我的钻法钻过来，绝对不要碰线。因为我在排除电线，如果我倒下了，除了衣服以外，别的地方都不要碰。知道吗？要抓住裤脚边往外拽。”
(井伏鱒二《黑雨》)

19. a. 「いや、我々は再起をはかるんだ、突破口を見つけるんだ」
(井伏鱒二『黒い雨』)

b. “不，我要重新努力，闯过这一关。”
(井伏鱒二《黒雨》)

20. a. 書記の主張に部落長が反駁して、村には黒大兵を捕虜として収容する力がないということくりかえした。しかもあの遠い山道を危険な黒大兵を護送することも村の人間たちの力では難しいだろう。長い雨期と洪水が何もかもを複雑にし困難にしたのだ。
(大江健三郎『死者の奢り・飼育』)

b. 村长不同意书记的说法，反复强调村里没有收容黑人俘虏的能力，更不用说押着这个危险的“猎物”翻山越岭，因为梅雨和洪水使一切都更加复杂困难。
(大江健三郎《死者的奢华》)

21. a. 「大袈裟にいやがって、彼奴の足、結構役に立つんだ。ただ俺をこき使おうと思って、そら使ってやがるんだ」
(大岡昇平『野火』)

b. “他就是装假，其实那家伙的脚相当好用。他就是为了逼我干活，才装病的。”
(大冈升平《野火》)

「ものだ」に対応する中国語の用例

1. a. 塩気を摂らない日が重なると、手にとまった蠅を叩こうとしても、叩く方の手首がぐにやりとして蠅に届かないものだと中田君が云った。
(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 盐一天一天地变得贵重起来了，身体如果老是吸收不到盐分，即使想打停在手上的苍蝇，手腕子也会软绵绵地伸不到苍蝇身上去。
(井伏鱒二《黒雨》)

2. a. 「讓治さん、あなた好い児ね、一つ接吻して上げるわ」と、彼女はからかい半分に

よくそんなことを云ったものです。Kと私も二人で同じ間にいました。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “让治先生，你是个好孩子，吻你一下吧。”她经常半开玩笑地这样说。

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

3. a. すると、あの空のにごりは、穴の内側だけの現象だったのだろうか？ それとも、飛砂の流れを、靄ととりちがえたのだろうか？ いずれにしても、まずいことになったものである。

(安部公房『砂の女』)

b. 原来天空的浑浊，难道只是洞穴内侧的现象吗？难道是把飞沙的流动与薄雾搞混淆了吗？反正事情变得有些棘手了。

(安部公房《砂女》)

4. a. 「しかし、よく命令だけで動けるもんだね。あれだって一応命がけだからな」

(石川達三『青春の蹉跌』)

b. “可是，那些人都那么听命令，一有命令就拼命啊。”

(石川达三《青春的蹉跌》)

5. a. 男は、不意をつかれる。まったく、妙な言いがかりもあったものだ。

(安部公房『砂の女』)

b. 男人冷不防吃了一惊。全是奇谈怪论。

(安部公房《砂女》)

6. a. 聞けば、シゲ子たちが広島から帰って来ると、二人の客が縁側にしょんぼり腰をかけていたと云う。僕らの安否を気づかって、山奥の村からわざわざやって来たものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 茂子说她和矢须子从广岛回来时，就看见两位客人正无精打采地坐在走廊边发呆。他们很关心我们的安全情况，所以才特意从深山坳的村庄里来看望我们。

(井伏鱒二《黑雨》)

7. a. 若い女性の羞恥心というものは、時と場合によっては頑迷固陋の気性と隣合わせになるものだ、だから悲劇が起ることがある。梶田医師が云ったそうだ。

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 年轻女子的羞耻心根据时间和地点，是和顽固守旧的风气紧密相连的，所以有时会发生悲剧。梶田医生是这么说的。

(井伏鱒二《黒雨》)

8. a. 「こだわりやしないわ。でも息子の愛人なんて、母親から見ると、憎いもんだって言うわね。息子を取られるような気がするんだってさ」

(石川達三『青春の蹉跌』)

b. “不是怕。你想，儿子的情人，在母亲看来总是讨厌的，因为她把儿子夺走了，你说是不是？”

(石川达三《青春的蹉跌》)

9. a. 「女というものは、多くああしたものだ」と自分で自分に言って見た時は、思わずあの迷信深い蓮華寺の奥様を、それからあのお志保を思出すのであった。

(島崎藤村『破戒』)

b. “妇女嘛，一般都是这个样。”丑松自言自语地说。这时，他不禁想起了莲华寺那位特别迷信的师母，还有那位志保姑娘。

(島崎藤村《破戒》)

10. a. 人の話では、お妾は普通、用が無くなると、捨てられるものですって。

(太宰治『斜陽』)

b. 人们说，小老婆一到无用的时候大多被人遗弃。

(太宰治《斜陽》)

11. a. 工場長は野辺送りした僕の報告を聞くと、在木カネの介抱していた充田タカという被爆者が死んだので、僕に葬式のお経を読めと云った。

充田タカという女は、従来この工場の炊事場へ広島市内から浅蜷や雑魚を売りに来ていた闇屋である。それが一昨日の空襲で被爆して顔と両手に傷を受け、今朝がた在木カネを頼ってここの炊事場へ辿りついたものである。

(井伏鱒二『黒い雨』)

- b. 充田高这个女人过去是从广岛市把蛤仔和小杂鱼贩到这个厂里伙房来的黑市贩子。她在前天空袭中被炸，脸和双手受伤。今天早上才到这个伙房里来求在木金的。

(井伏鱒二《黒雨》)

12. a. これはお化のような大きな火の玉が高空で閃く瞬間に、光の高熱が磨硝子の模様だけ残して廊下板を黒こげにしたのだろう。その板ぎれを爆風が吹きあげて川か海に撒き散らしたものだ判断して間違いない。

(井伏鱒二『黒い雨』)

- b. 这可能是妖魔似的大火球在高空闪亮的那一瞬间，在光的高温照射下，把走廊上的木板烧得只留下毛玻璃花纹了的缘故吧。可以断定这些碎木片是被大风卷起之后，撒落在江里或大海里的。

(井伏鱒二《黒雨》)

13. a. そんなカオスの中からよく致命的な伝染病が発生しなかったものだと今でも僕は不思議に思っている。

(村上春樹「ノルウェイの森」)

- b. 我现在还感到不可思议：在那般混浊状态中居然没有发生致命的传染病。

(村上春樹《挪威的森林》)

14. a. 世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだと、私は、その時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいじらしく、哀れに思えてなりませんでした。

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

- b. 那时我痛切地感到，世上竟有如此不负责任的父母兄弟，因而也就更加觉得纳奥米可怜、值得同情。

(谷崎潤一郎《痴人之爱》)

15. a. 一とまず、納得すると、なにはさておき、まずタバコだ。一週間、よくも辛抱できたものだと思う。

(安部公房『砂の女』)

b. 暫且想通了，闲话休提，先来抽口烟吧。一星期了，可真够受哇。

(安部公房《砂女》)

16. a. いや、これは、おれの足の臭いだ……そう思ってみると、急に親しみがわいてくるのだから、おかしなものだ……

(安部公房『砂の女』)

b. 不，这是咱的脚臭丫……这么一想，心理竟忽然涌起阵阵亲切感，真奇怪呀……

(安部公房《砂女》)

17. a. 瓦の色も、焰の舌のように赤くなっているね。凄いものが出来たもんだ

(井伏鱒二『黒い雨』)

b. 瓦的颜色红得象火舌一样。真是厉害。

(井伏鱒二《黒雨》)

18. a. 「しかし——奇異なことが有れば有るものだ。まあ、貴方の死んだ夢を見るなんて」

(島崎藤村『破戒』)

b. “可是，说怪也真怪，我怎么竟梦见你死了。”

(島崎藤村《破戒》)

19. a. 「呆れたもんだね、まさに海豹に違いないね」

(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “真吓人，你简直是只海豹。”

(谷崎潤一郎《痴人之愛》)

20. a. 「見事なもんだな。どこで習ったの」と私が訊いた。

(三島由紀夫『金閣寺』)

b. “真叫妙手高艺！从哪学来的？”我问。

(三島由紀夫《金閣寺》)

21. a. 「そりゃ不可」と大日向は笑いながら言葉を添えた。「こういう時には召上るものです。真似でもなんでも好う御座んすから、一つ御受けなすって下さい」
(島崎藤村『破戒』)

b. “那可不行。”大日向笑着插话说，“今天你得喝，哪怕是意思意思，也得接过这一杯。”
(岛崎藤村《破戒》)

22. a. 「女の子はもう少し上品に煙草を消すもんだよ」と僕は言った。「それじゃ木樵女みたいだ。無理に消そうと思わないでね、ゆっくりまわりの方から消していくんだ。そうすればそんなにくしゃくしゃにならないですむ。」
(村上春樹「ノルウェイの森」)

b. “女孩子熄烟要熄得文雅一点。”我说，“那样熄，活象砍柴女。不要硬碾，从四周开始慢慢熄，那就不至于把烟头弄得焦头烂额的。”
(村上春树《挪威的森林》)

23. a. 「そんな、君のような——」と丑松は省吾の顔を眺めて、「人が呈げるッて言うものは、貰うもんですよ」
(島崎藤村『破戒』)

b. “你这是怎么啦……”丑松望着省吾的脸说，“人家说送给你，就该收下嘛。”
(岛崎藤村《破戒》)

24. a. 「ふん、ない事があるもんか、女と男と勝負事をすりゃ、いろんなおまじないをするもんだわ。
(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

b. “哼，不存在的事情哪会有呢！女的和男的赌钱，就要用各种绝招嘛。”
(谷崎润一郎《痴人之爱》)

25. a. 「何故、新平民ばかりこの社会に生きながらえる権利が無いのであろう——人生は無慈悲な、残酷なものだ。
(島崎藤村『破戒』)

b. 为什么独有新平民同样生在社会上却毫无权利呢？人生多么不仁，多么残酷啊！

（岛崎藤村《破戒》）

26. a. 路傍の樹木の枝。葉の一枚も附いていない枝、ほそく鋭く夜空を突き刺して、
「木の枝って、美しいものですわねえ」と思わずひとりごとのように言ったら（後
略）

（太宰治『斜陽』）

b. 路旁树木的树枝。一片树叶都没长的细长树枝，它们刺向夜空。“树枝真美呀，”
我情不自禁的嘟囔道。

（太宰治《斜阳》）